

産業遺産の観光資源としての活用に関する調査研究

平成 16 年度

財団法人尼崎地域・産業活性化機構 調査課

はじめに

平成 15 年度に発足した財団法人尼崎地域・産業活性化機構において、自主研究のひとつとして「産業遺産の観光資源としての活用」を取り上げた。産業遺産については、平成 13 年度に財団法人あまがさき未来協会において調査研究が実施され、その成果をもとに翌平成 14 年度、シンポジウムが開かれ、広く周知を図るとともに、その活用の可能性を考えたものである。

そのあまがさき未来協会は財団法人尼崎産業振興協会と統合、財団法人尼崎地域・産業活性化機構となったが、その 1 年目の研究として産業遺産の観光資源としての活用を取り上げたのである。

もとより「産業遺産」という概念は産業の振興というよりも、文化の分野でとらえるべきものである。地域文化を形成するひとつの要素として産業遺産があり、この存在を顕わにすることによって、地域の発展に寄与することをめざそうとするものである。そして、これをより具体的、かつ実践的に検証するため、また、地域・産業活性化機構として、産業の振興によりシフトした取り組みとするため、観光資源としてのアプローチを試みた。これは、新たに発足した尼崎地域・産業活性化機構としての「まちづくり」への一つの方向性を示すことに意義ある取り組みであったと考える。

産業遺産を機軸にするまでもなく、もとより尼崎にとって観光の振興ということ自体が非常に困難な課題であり、現実的には実現困難であることは予想されたが、あえて観光という側面からこれまで取り組んできた産業遺産を取り上げることによって、新たな発見やまちづくりのシーズを見つけることができると考えた。そして、それはそれなりの結果を導き出すことができた。

ここでは、この 5 年間の産業遺産に関する取り組みを総括することによって、尼崎市にとっての産業遺産の価値を明らかにしたい。

1 産業遺産に関する取り組み (平成 12 年度から 16 年度まで)

産業都市として発展してきた尼崎にとって、工場の風景や技術力の蓄積など「産業」のもたらすものは重要な地域資源である。一方、産業構造の転換により、尼崎市においては多くの工場が閉鎖、廃止されている。そんな中、平成 14 年度に財団法人あまがさき未来協会において、価値ある工場建築物の調査を実施した。また、近年、「産業観光」が「自然・文化・社会などの観光資源とならんで重要な観光資源のひとつであり、工場・工業施設・農業施設などを内容とするものである。そうした産業施設等を観光客・旅行者に見せることは、その地域の PR にも役立ち、教化の面で重要な意義がある」とされて注目されている。

そこで、平成 15 年度、財団法人地域・産業活性化機構において、「産業遺産の観光資源としての活用に関する調査研究」を実施した。産業遺産の活用事例分析や登録文化財制度の活用方策を研究したものである。こうした成果を踏まえ、産業遺産にとどまらず広く産業景観を紹介するガイドブック「工都の情景」を作成、配布した。さらに、平成 16 年度には武庫川女子大学の角野幸博教授に依頼し、女子大生による臨海部の工場地帯の景観についての調査を行った。

この一連の活動は平成 12 年度、尼崎市が「ミレニアム遺産の選定」事業を財団法人あまがさき未来協会に委託したことに始まるものである。

産業遺産に関する取り組み経過

- 平成 12 年度 ミレニアム遺産の選定（財団法人あまがさき未来協会）
- 平成 13 年度 産業遺産に関する調査研究（財団法人あまがさき未来協会）
- 平成 14 年度 尼崎の産業遺産発掘シンポジウム（財団法人あまがさき未来協会）
- 平成 15 年度 産業遺産の観光資源としての活用に関する調査研究（財団法人尼崎地域・産業活性化機構）：ポストカードブック発行
- 平成 16 年度 産業遺産の観光資源としての活用に関する調査研究（財団法人尼崎地域・産業活性化機構）

2 ミレニアム遺産の選定

平成 12 (2000) 年度、あまがさき未来協会は尼崎市から委託を受け、ミレニアムイベントを実施、同イベントに参加した市民によりミレニアム遺産 100 を選定した。この結果を「あまがさきミレニアム遺産 100 選集」として 2,000 部発行した。

この中に、尼崎市の工場立地の歴史を踏まえ「川沿いの産業遺産」「臨海部の産業遺産」「内陸部の産業遺産」をいれた。

(1) 尼崎市ミレニアムイベント「あまがさき創・世紀」

尼崎市ミレニアムイベント「あまがさき創・世紀」は、千年に一度の世紀変わりの年を迎えるにあたり、様々な角度から本市の過去を振り返ると同時に、未来の尼崎市のまちづくりはどういったものを引き継いでいけばいいのかを考えようとしたものである。主催は尼崎市（企画財政局企画部企画課：当時）。財団法人あまがさき未来協会が委託を受けて事業を実施した。

- 1 実施日 平成12年11月17日（金）午後1時～5時
- 2 実施場所 アルカイクホール・オクト
- 3 実施内容 「昔と今の尼崎」写真展（11月15日～21日）
50年後の尼崎「こんなまちになったらいいな」小学生の舞台発表
「あまがさきミレニアム遺産」選定
- 4 参加者数 500人

◇ミレニアム遺産

21 世紀の尼崎へ大切に引き継いでいきたいふるさとの宝「あまがさきミレニアム遺産」を市民自身に選んでもらおうということで、平成12年7月・8月の2か月間で「ミレニアム遺産」候補を募集した。寄せられたミレニアム遺産候補をリストにし、これをもとに11月17日（金）、アルカイクホール・オクトで開くイベントで入場者に100遺産を選んでもらうことにした。

学者や有識者からなる選定委員会を設けて選ぶという方法がまず第一に考えられたが、長い歴史をもつ尼崎には史跡や遺跡が多く（ちなみに尼崎市発行の2000年版「くらしのガイドあまがさき」に掲載されている国・県・市指定文化財だけでも45件ある）、また全域で早くから都市化が進み施設も多く、選ぶべきものがありすぎること、また、この事業はそうしたものに権威付けをすることが目的ではなく市民自身がいまいちどまちを見直すきっかけにしたいという思いがあったため、市民に候補をあげてもらい、それをイベント会場で参加者が選定するという方法をとることにした。

◇市民との連携

(1) ほんまちらボ

このイベントを通じて市民等との連携を図るため様々な方々にお手伝いいただくことにした。

ミレニアム遺産の分類、分析については関西学院大学総合政策学部片寄俊秀ゼミにお願いすることにし、「関西学院大学受託研究規程」に基づき契約を交わした。

片寄ゼミは三田市内の中心市街地に町家を改修した「ほんまちラボ」を設立し、学生らが商店街を定点観測しながら実践的にまちづくりを進めている。そうした経験をもつ学生たちの新しい感覚を導入しながら、ミレニアムイベントの実施についても手伝ってもらおうとしたものである。

学生たちは分類、分析にとどまらず、ミレニアム遺産候補応募者とイベント参加者に進呈する T シャツのデザインをし、ミレニアム遺産募集キャンペーンのため中央・三和・出屋敷商店街をヌイグルミで練り歩いてくれた。このヌイグルミは社団法人尼崎青年会議所からお借りした環境キャンペーン用の「エコあま君」である。この学生のうちの2人がミレニアム遺産調査の成果をもとに尼崎市内のコンサルタント会社に就職が決まり、尼崎南部再生研究室（通称あまけん）設立後、その事務を担当し尼崎のまちづくりに関わっていくことになった。

(2) ミレニアム遺産探険隊

ミレニアム遺産を選ぶにあたっては、市民から募集することにしたものの、特に南部臨海部にあるものは、ひごろ市民がふれあう機会をもたないため応募が少ないであろうと予想された。工業都市として発展してきた尼崎市にとって重要なものが多いということ、**「ミレニアム遺産探険隊」**を結成し、この探険隊からもミレニアム遺産候補を提案することにした。

ミレニアム遺産探険隊は片寄ゼミのほか、建築史家、漫画家、モニュメント作家、都市問題研究家、陶芸家、記者、NPO代表、尼崎市職員らで結成、数箇所の工場を回り、またそれぞれの思いがあるミレニアム遺産候補を推薦してもらった。

これらはボランティア参加であり謝礼や交通費は支給しなかった。

(3) 昔と今の尼崎写真展

ミレニアムイベントにあわせて「昔と今の尼崎写真展」を開催した。様々な角度から本市の過去を振り返るため、尼崎がどんなふうに変ってきたかを確かめておこうとしたものである。

期間はミレニアムイベント当日をはさむ1週間、平成12年11月15日(水)～21日(火)、場所はアルカイクホール・オクト前のシビックギャラリー。写真選定と解説は尼崎戦後史聞き取り研究会（尼崎市総合文化センター7階・尼崎市立地域研究史料館内）、現状写真撮影・パネル作成はNPO法人シンフォニーをお願いした。

内容と思いは、展示場に掲げた次の案内文に表されている。

「昔と今の尼崎写真展へようこそ。ここでは、かつての尼崎の風景を記録した写真25点を選んで、現在の様子とくらべることで、20世紀の尼崎の歴史をふりかえります。25点の写真からは、今世紀の尼崎の持つさまざまな顔が浮かび上がります。日本を代表する工業都市として急成長をとげたこと。逆にそのことによって生じた都市社会のひずみ。交通網の整備や住宅地化の進展。それと反比例するように消えてゆく農地。都市にうるおいを与える自然環境や歴史的街並み、文化財...そして、そこに生きる人々の生活の変容。これらすべてが、20世紀の尼崎を象徴していると言えます。実際のところ、20世紀の尼崎を代表する風景を、それも地域のバランスをとって選ぶというのは、想像していた以上にたいへんでした。結局選んだのが、ここに展示したパネルですが、地域やテーマのかたよりもあると思います。もっとこんな写真やテーマが20世紀の尼崎にはふさわしいのではないかと、そんな風に思われる方もおられるかもしれません。従来知られていない、尼崎の歴史を記録する写真をお持ちであったり、ご存じの方がおられれば、教えていただければと思います」

デザインフォーラム倉谷征二氏にはミレニアム遺産募集のポスター、ちらし、イベントのポスター、ちらし、プログラム、会場に掲げる看板のデザインをお願いした。最終的に選定した 100 遺産の冊子と CD ロムの作成をお手伝いいただいた。

イベント当日の舞台進行では、大阪市に拠点を置く「イベント・文化仕掛人学校」の紹介で小劇場演劇にかかわる麻野裕二氏の助力を得た。

◇あまがさき創・世紀—みんなで世紀の市宝を大発掘

ミレニアムイベントは「あまがさき創・世紀—みんなで世紀の市宝を大発掘」というタイトルで開催した。国宝に対して市宝、至宝にもかけて市宝という造語を考えた。

内容は、小学生の舞台発表「50年後の尼崎—こんなまちになったらいいな」と、7月から8月にかけて市民の皆さんから募集したミレニアム遺産候補をもとにした 100 遺産の選定会。

開会にさきだち宮田良雄尼崎市長は

「20世紀は機械技術の急激な進歩など大きな改革があった反面、戦争という悲惨なこともありました。尼崎も産業のまちの副産物として公害のまちという名前をいただいてしまいました。私たちの住んでいる地域は2000年の昔から先達が築いてきたもので、公害のまちというのはそんな悠久の歴史のなかのほんのひとこまの出来事であると思います。尼崎にはいいことがたくさん有るに違いない、いままで残してこられた遺産がたくさんあるのに違いない、素晴らしい尼崎を発見しようというのがこの催しです」と挨拶した。

(1) 50年後の尼崎—こんなまちになったらいいな

まず、園和北小学校6年生4クラス129人による楽器演奏と歌、踊り。

「つるぎの舞」の楽器演奏に始まり「川にはメダカが泳ぎ、緑あふれ、花が咲く、人の心のやさしさあふれる、あたたかいまち尼崎・・・生まれ育った尼崎、だいすきなまち尼崎、やさしさを忘れず友達と心をあわせてふるさとの宝を21世紀へ大切に引き継いでいきたいと思います」としめくくった。

次は開明小学校3年生1クラス28人による芝居。開明小学校は阪神尼崎駅と国道43号線の間であり、公害、ホームレス、ごみのぼい捨て、戦争、環境の問題をとらえ、手話を使って「・・・君と僕の生きているまち、夕日のきれいなまち、呼び掛け合えば笑顔がかえる、そんなまちを」と歌った。

最後は潮小学校6年生1クラス39人が学校で撮影したビデオを流しながらの発表。工作でつくった自然をとりいれた公園、電気自動車、太陽光、風力発電などのまちの様子をビデオで見せながら、「・・・できたらいいなやさしいまち。できるといいなふれあいのあるまち。未来の尼崎がやさしいまちになるように、できることからがんばろう。いちばん大切なものふれあいから」と訴えた。

(2) ミレニアム遺産選定会

地域研究史料館職員による「尼崎2000年の歴史」の説明のあと「あまがさきミレニアム遺産」選定会となった。

ミレニアム遺産候補の推薦には233人から373件の応募があった。うち40人が尼崎市外の人。年齢は11歳から89歳までと幅広い年齢層からの応募があった。

これらミレニアム遺産候補について関西学院大学片寄ゼミの学生がビデオを使いながら説明した。

「遺産という名称から歴史的資産が多いのではないかと予想していたところが、実は意外に少なかったのですが、これは市民にとって普段の暮らしに関係がないので当然かとも思いました。今回、探険隊を結成して歩いたり、バスや船に乗ったりしていろいろな視点からこの尼崎のまちを見てきましたが、尼崎には長い歴史の中で様々な文化というか顔がたくさんあるのだなということに感動しました」

次いで、片寄教授のコーディネートで、ミレニアム遺産探険隊から建築史家の川島智生氏、漫画家井上眞理子氏、学生、地域研究史料館辻川敦氏が舞台にのぼり、会場の市民から意見を聞きながら、100遺産を選ぶこととした。スライドやプロジェクターを使い遺産候補の写真を見ながら、会場が一体になって残したいミレニアム遺産を選ぶうちに尼崎について、より深い認識をもってもらえるように配慮した。

まず、ミレニアム遺産探険隊の井上眞理子氏と川島智生氏が報告を行った。

井上氏は自作の漫画を披露しながら、尼崎のひとつの原風景について語った。

「なつかしい尼崎の風景を漫画にしようということで、昭和30年から40年代にかけての出屋敷の飲み屋や食堂やパチンコ屋がひしめいていた様子をかいてきました。工場につとめる人たちがお酒を飲んだり、食事をしたりしていたものです。闇市が発展してできた大きな商店街には、市外からも多くの買い物客が詰めかけにぎわいました。そんな当時の雰囲気伝える通りが今も残っており、アーケードなどにも昔の繁栄がしのべれます。これにとどまらず、いろいろな尼崎の風景を漫画にしていますが、昔を懐かしむだけでなく、自分の生まれ育ってきたまちを見詰め直すきっかけになれば、という思いでかいています」

日本の近代建築史を研究する川島智生氏。

「日本はかつての活力を失い、アイデンティティが失われつつあります。そういうものをお考えするときのよりどころに、これまで見過ごしてきたものがひとつの核になるのではないのでしょうか。文化庁が近代建築を文化財に指定することを始めており、それが尼崎にとって今後の大きなポイントになると考えています。尼崎というのは工業都市として発展しましたが、工場はまず明治のなかばに川沿いにつくられて、昭和の初めくらいに海沿いに来て、その後内陸部につくられました。こうした工場の建物もいままではほとんど研究されてきませんでした。最近著名な建築家の作品もあることがわかってきました。また、阪神電車の煉瓦造りの変電所、ユニチカ記念館、尼信記念館、大庄公民館、スパニッシュスタイルの個人住宅など尼崎には貴重な近代建築がたくさんあります」

ミレニアム遺産探険隊では「産業遺産」をミレニアム遺産として提案しようということでは考えていたが、産業遺産については十分な調査ができず、今の時点で固有のものをだすことはできないため、川島氏のこうした話を受けて、「川沿いの産業遺産」「臨海部の産業遺産」「内陸部の産業遺産」という表現で提案し、尼崎という都市のなりたちを産業遺産という側面から見直してもらおうということにした。

100遺産の選定にあたりまず片寄教授から

「ミレニアム遺産、みんなで選ぶれきしの遺産、にほんの宝、あまがさき、むかしの知恵を生かすまち—という考え方で100選んでみたいと思います。100というのはたくさんあるということです。このなかでいくつかは選ばざるをえないものがありますが、できれば新しいものを発見したい。この100遺産のなかで本当にこれが選ばれてよかったというものがでてくると、それを次の時代にどうにかしていこうという動きが出て次の尼崎のまちをつくっていくという流れが望ましいと思います」

との考えが示された。

来場者にはあらかじめ「ミレニアム遺産候補一覧表」を配布した。一覧表には市民の皆

さんから寄せて頂いたものとミレニアム遺産探険隊の推薦をあわせて 207 の候補をあげた。主なものの写真を見ながら、あるいは寄せられたコメントを紹介しながら選んでいった。

写真はパソコンで名称をクリックするとでてくるようにしたが、このソフトの作成はNPOシンフォニーに依頼し、完成したのはイベント当日の午前中だった。

そのなかで 3 人以上から推薦があったもの、周知のものを選ぶことにした。3 件以上が 36 件、周知のものとして 37 件、計 73 件である。

会場からは明治から大正、昭和のはじめまで尼崎名産としてさかんに作られ、京都や大阪の高級料理店に売られて有名であったアマイモにはじまり、守部観音まつり、武庫地区秋祭りの太鼓、水害記念碑、鉄鋼戦士の像、出屋敷のアーチ、大覚寺狂言、阪急塚口駅改札口、環境景観モデル事業などについて熱心な説明と推薦があり、もちこまれたスライドを映写する場面もあった。

(3) 選定された100遺産

○貴重な屋外空間

尼崎市に流れる主要な河川と臨海部の運河や防潮堤、それに池といった 7 つの『水辺空間』は、空間のもつ環境形成機能（遊び、うるおいなどを享受する親水機能、防災、避難先として、また季節、天候による空の移ろいや景色などの広がりを感じる空間機能、微気候調整の効果や動植物の生息空間を与える自然・生態系保全機能など）を理由として、高密度都市尼崎にとってその貴重性が市民に強く意識されていると感じられる。同様に、8 つの『公園』も緑・花のしつらえ、あるいは憩う、遊ぶ、楽しむなどさまざまな機能をもつ屋外空間として貴重である。また、屋外空間の中でも、周辺建物や植栽などとあいまって独自の景観を醸し出している空間として『道』も 5 つあげられた。

○独自の特質をもつ地区空間

『地域・風景』の 9 つは、田園、特色ある公園、水路にかかる橋と街並み、歴史、大学、商業集積といったものを核としながら、いずれも独自の特質をもつ地区空間を形成しているものである。『町並み』の 3 つは『地域・風景』ほど広くはないし、やや線的広がりになっているが、同様に独自の特質、風情をもつ地区空間である。『駅前』の 5 つは、再開発整備された尼崎の主要駅周辺部で、都市の中で商業系を中心とした集客・交通の主要結節点としての役割をもつ。

○施設・建物

尼崎には、公共、民間あわせてさまざまな施設の集積があるが、その中から結果として 10 の『施設』が遺産としてあげられた。都市のシンボルであり造形的にも注目される「尼崎市役所」、文化・スポーツの重要拠点「記念公園総合体育館」「ピッコロシアター」、空間的広がりをもあわせもつ「園田競馬場」「魚つり公園」、自然環境との共生を実感できる「ホテルの里」「六樋」、武庫川の両側に駅改札口をもち、川の上に駅がある「阪神電車武庫川駅」、尼崎近郊から魚・野菜などの生鮮食料品が集まる「尼崎中央卸売市場」、尼崎港に敷設されたパナマ運河方式の船舶の通行路「閘門」である。

『建物』の 8 つは、明治以降、尼崎が近代化していく中で建てられ、かつ市民になじみ深い名建築があげられている。「大庄公民館」は先に示した「尼崎市役所」とともに有名な建築家である村野藤吾氏の設計による。

○興味深い造形・シンボル性

『モニュメント』には、尼崎の歴史を表象する記念碑・塔・像、あるいは都市の中で興味深い造形をもつものがあげられた。『橋』も単にそこを通過する機能よりむしろ、その造形美、可動性、歴史背景などの理由から選ばれたと考えられる。

○歴史的資産

『寺社』は、歴史性あるいは地域との密着性など市民生活と深い関わりをもつ。市内に数多い神社仏閣の中から4つ選ばれた。もちろん、単体ではないが『地域・風景』の「寺町」もこの範ちゅうの意識で捉えられることであろう。『史跡』としてあがった12は、弥生時代の遺跡である「田能遺跡」から第二次世界大戦時の「開明小学校の機銃掃射跡」まで、年代的にも幅広い。

○人・物・事

『人物』では、市内広済寺に墓所があり、尼崎市文化のシンボルとして顕彰している「近松門左衛門」と尼崎藩の武家屋敷で生れ、のちに古学の祖と仰がれた「契沖」が選ばれた。『物産品』としては、かつて産した尼崎独自の農産物、特産品があげられた。『祭・行事』は7つがあげられた。地域・地区で守り伝えられる踊・祭りや「市民まつり」のように近年の市民意識の醸成を願う催しまであがっている。

○産業遺産

『産業遺産』については、先に記したようにこれからの調査を待つ必要があり、ここでは、市内のエリアを3つに分けて示している。

以上の結果をみると、100の遺産がさまざまな分野から選ばれたことがわかる。個々の遺産は、市民の大多数が共通に周知したものや、意外に知られていなかったものがこのイベントを通じて再認識させられたものもあろう。いずれも市民にとって親しみがあり、貴重な資産、資源であることにまちがいない。

なお、100遺産はB6判の冊子にして発行した。

また、1月27日（土）ABCテレビの「街かどチャチャチャ」であまがさきミレニアム遺産が紹介された。

あまがさきミレニアム遺産一覧表

貴重な屋外空間	水辺空間	1	武庫川	施設・建物	建物	51	旧尼崎中央署
		2	猪名川・藻川			52	大庄公民館
		3	庄下川			53	大庄小学校
		4	浜田川			54	旧阪神電鉄尼崎発電所
		5	運河			55	日本キリスト教団尼崎教会
	公園	6	若王子池	興味深い造形・シンボル性	モニュメント	56	城内高校の水害記念碑
		7	西武庫公園			57	西長洲八幡公園の平和塔
		8	農業公園			58	鉄鋼戦士の像
		9	猪名川自然林			59	西武庫須佐男神社の震災記念碑
		10	上坂部西公園			60	造
		11	大井戸公園			61	出屋敷のアーチ
		12	大物公園			62	武庫大橋
		13	元浜緑地			63	丸島橋
		14	小田南公園			64	東高洲橋
		15	橋通り			65	モスリン橋
	道	16	山幹通り	歴史的資産	神社	66	富松神社
		17	IR東海道本線沿線緑化			67	治田寺
		18	蓬川緑地の桜並木			68	琴浦神社
		19	阪急園田駅周辺(東園田8丁目)の歩道修景整備			69	大覚寺狂言、弁財天堂、閻魔十王像のある寺町大覚寺
70		大庄西町1丁目素盞鳴神社の楠					
独自の特質をもつ地区空間	地域・風景	20	東園田町4丁目の田園風景	史跡	71	富松城跡	
		21	農業公園周辺の景観		72	田能遺跡	
		22	武庫之荘駅北の1~17の橋		73	猪名寺廃寺跡の森	
		23	近松の里		74	旧尼崎港線跡地	
		24	園田学園女子大学周辺		75	塚口御坊(正玄寺)	
		25	寺町		76	髭の渡し	
		26	築地		77	尼崎城	
		27	アルカイックスクエア		78	西武庫十三重塔	
	町並み	28	中央三和出屋敷商店街	人物	79	神崎の石灯籠	
		29	出屋敷の町並み		80	残念さんの墓	
		30	出屋敷のアーケード		81	開明小学校の機銃掃射跡	
		31	蔵のある民家や路地など風情あるまちかど		82	遊女塚	
	駅前	32	阪神尼崎駅前広場	物産品	83	近松門左衛門	
		33	アミング潮江		84	契沖	
		34	塚口さんさんタウン		85	尼芋	
		35	出屋敷リベル		86	尼の生揚醤油	
36		フェスタ立花	87		ランプあめ		
施設・建物	施設	37	尼崎市役所	祭・行事	88	富松一寸豆	
		38	記念公園総合体育館		89	田能の里芋	
		39	ピッコロシアター		90	樽こも	
		40	園田競馬場		91	守部観音踊り	
		41	魚つり公園		92	貴布禰神社の祭り	
		42	ホテルの里		93	だんじり祭り	
		43	六樋		94	市民まつり	
		44	阪神電車武庫川駅		95	小田大太鼓	
		45	尼崎市中央卸売市場		96	武庫地区秋祭りの太鼓	
		46	閘門		97	薪能	
	建物	47	防潮堤	産業遺産	98	臨海部の産業遺産	
		48	ユニチカ記念館		99	川沿いの産業遺産	
		49	尼信記念館		100	内陸部の産業遺産	
		50	尼崎信用金庫世界の貯金箱博物館				

注：これらは必ずしも正式名称になっていません。

(2) ミレニアム遺産の中に「産業遺産」を選定

ミレニアム遺産のなかで、尼崎においては初めて「産業遺産」という概念をとり入れた。これまで耳に、あるいは目にしたことのない「産業遺産」という地域資源が初めてたち現れてきたのである。しかしながら、これはまだまだ市民権をえたものではなく、かつ、そのころ国内あるいは世界的に認知されていた「産業遺産」と呼ばれるものに比べて、尼

崎に存在するものは規模、古さ、風格、質感において見劣りするものであろうことは容易に想像された。反対に、産業都市尼崎に多数存在する工場群のなかには未知のものもあると推測され、尼崎の工業化の発展になぞらえて、「臨海部の産業遺産」「川沿いの産業遺産」「内陸部の産業遺産」といささか強引に3部門をたてたものである。

「ミレニアム遺産 100 選集」のなかでは、それぞれを次のように解説している。

■川沿いの産業遺産

まず、川沿いの系譜からみる。その嚆矢は左門殿川と大物川に挟まれて立地する明治 22 年の尼崎紡績であった。左門殿川の水を利用することで成立した。現在ユニチカ記念館がある場所である。

この煉瓦造建物は明治 33 年に建設されたものだが、かつて、ここに工場があったことを示す唯一つの記念碑的なものである。明治 40 年代から大戦景気にあった大正 8 年までには多くの工場が一斉に成立する。

左門殿川に面した初島の東亜セメント、庄下川に面した西大洲の旭硝子・大阪鉄工所・大日本麦酒製瓶工場・その対岸の中大洲の日本醤油醸造・古河練銅・岸本製釘所・横浜電線製造、庄下川に面した大日本木管、神崎川に面した大阪合同紡績・モスリン紡織、近世からの尼崎市街地を取り巻くように川沿いの田畑に工場が配置される。幾筋もの河川に恵まれた。

■臨海部の産業遺産

次は、海岸の系譜である。それは大正元年の丸島築港計画にはじまるが、計画主体であった鈴木商店の破産によって未完に終わる。その内容は、港湾整備計画とセットになった海岸の埋め立て造成であった。ただ、それ以前の明治末期に大庄村の海岸部にはリバーブラザース石鹼工場がすでに操業を開始していた。次いで登場したのが、浅野総一郎率いる尼崎築港会社による臨海工業地帯造成であった。

昭和 5 年に着工され、昭和 6 年には埋立地が分譲され工場が進出する。日本発送電・尼崎製鋼所・尼崎製鉄・尼崎人造石油・日本石油・中山鋼業・日本亜鉛鍍、といった火力発電所と鉄鋼を中心とした会社によって、工場群は構成された。

尼崎が重化学工業都市として成立するのは、この時である。この時期、多方面にわたる新たな科学的発見によって、近代工業は急激な発展を遂げ、大量の水の供給と大規模な船が接岸できる近代的施設が、昭和線前期には求められていた。

この埋立地の完成とあいまって、海岸に近い近世時に新田開発された南部地域には新たな運河が掘削され、工場用地として整備される。海岸部の埋め立ての手法は高度成長期までのわが国の工業地帯創出に使われた、もっとも典型的な類型といえる。

■内陸部の産業遺産

海岸が工場によって埋め尽くされていく一方で、昭和 10 年代に入ると、内陸部にも工場が急増する。内陸部の系譜である。それまでの川沿いといった立地ではない。それは土地区画整理によって生み出された土地であった。本来、土地区画整理とは田畑を住宅地に変える手法として成立していたが、尼崎のような低湿地では、住宅地としての需要は多く見込めなかった。よって、工場地に転用されるケースも現れていた。

工場が増加するのは J R 東海道線以南と国道 2 号線以北の間の場所である。そこでは北難波の住友金属工業プロペラ製造所(昭和 18 年)や長洲のヤンマーディーゼル(昭和 11 年)・東洋精機(昭和 16 年)に代表されるように、昭和 10 年以降に機械工場が

連立する。ただし、このような面状の展開ではない、点での成立は、大正期より見られる。

官鉄神崎駅北側の麒麟麦酒（大正 7 年）、塚口の森永製菓（大正 10 年）、大庄村の金井重要工業（昭和 2 年）、塚口のゲンゼ（昭和 8 年）などである。

貨物の運行可能な鉄道や昭和 2 年に開通した阪神国道に面した場所に工場用地は求められた。このような工場用地取得法は、内陸部に作られる今日の工業団地に繋がるものである。

以上、みてきたように、尼崎での工場は大きく分けて、明治中期以降大正期にかけて川沿いに成立し、昭和戦前期には海岸部の埋立地に、そして昭和 10 年代以降には内陸部にも向かう。このような変遷は、工場のありようの変容を反映したものといえるだろう。

<参考>

尼崎の近代化と工業の発展

21 世紀を迎えるに当たって、尼崎の長い歴史の中で培われてきた文化や地域性を掘り起こし、そのなかから残されてきた「ミレニアム遺産」を選定するなかで、「産業遺産」を発掘することになった。そこで、尼崎の近代化の歴史を見ておくこととする。

1 江戸から明治

1617 年（元和 3）、幕府は尼崎に 5 万石の譜代大名戸田氏鉄を配置し、大阪の西の固めとして尼崎城を築かせた。同時に城下町も建設された。

海岸地帯に次々と開発された新田をはじめ、農村では綿や菜種などの商品作物が盛んにつくられた。綿作が盛んになり肥料の干鰯（ほしか）の需要が増えると、古代からの伝統をもつ漁業はいつそう盛んになった。中在家町には魚市場ができ、生魚取引が活況をみせた。

しかし、明治維新によって尼崎藩が廃止され、尼崎城は廃城となり、城下町尼崎は急速にさびれていった。藩主の桜井氏は東京へ移住し、残された士族も多くは困窮するなど、城下町は一時期活気を失った。明治初年に尼崎町の全人口の 2 割以上を占めた士族は、10 年代にその半数が町外に移住し、残留したものも大部分は家産を失って貧困層を形成するにいたった。

尼崎における明治初期の商品作物は、米、菜種、甘薯、綿の四種だった。このうち尼崎町南部を主産地とする甘薯は「尼いも」と呼ばれて評判もよく、一種の特産品でもあった。また綿作は武庫郡を中心として、かなりの商品化が進んでいた。裏作の菜種も、ほぼ 100 パーセントが販売され、農家にとっては重要な現金収入源となっていた。

しかし、こうした近世以来の商品作物や、城下町の繁栄を担った中在家の魚市場などは、明治の半ばころから徐々に衰退していく。

農家の副業的産業のほかに、明治 10 年代尼崎の工業的産業としては、すでに江戸時代から続いてきた醤油醸造と、新たに起きたマッチ製造がある。

良質の大豆と丸小麦を材料とする尼崎産の醤油は「尼の生揚げ（きあげ）」と呼ばれ、独特の製法によるまろやかな味わいは播州竜野、紀州湯浅の醤油にも匹敵する評判を呼んでいた。

一方、明治 10 年代の新工業がマッチ製造である。マッチは 19 世紀初めヨーロッパで発明されて世界に広がり、日本では 1875 年（明治 8）、フランス流の黄燐マッチが初めて製造された。その後、立地条件に恵まれた阪神地区を中心に製造が広がる。製造法が比較的簡単なため、士族授産事業とも結びついた。

2 近代工業の始まり

尼崎市の近代工業の始まりは、尼崎と大阪の資本家が設立した尼崎紡績（のち大日本紡績、ユニチカとなる）であった。尼崎紡績は 1889 年（明治 22）6 月、資本金 50 万円の有限責任会社として旧尼崎町の辰巳町に設立。本格的大紡績工場の先駆であった。尼崎近辺は日本で最良質の阪上綿の産地であったので、その綿花を利用することが設立目的の一つであったが、実際には安価で比較的長繊維のインドや中国・安南産の綿花が用いられた。後のニチボー（現ユニチカ）尼崎工場が 1965 年（昭和 40）に閉鎖されるまで、尼崎の産業を支える存在であり、大正時代には日本を代表する生産高を誇った。1900 年（明治 33）に

建築された赤レンガ造りの尼崎紡績本社建物が、ユニチカ記念館として残っている。

このように、明治期における尼崎の代表的な工業生産物は、綿糸、マッチ、醤油であったが、鉄道の敷設などとともに、その沿線に続々と工場が進出してきた。

1874年（明治7）、官設鉄道が大阪・神戸間に開通し、現JR尼崎駅である神崎ステーションも開設した。1891年（明治24）には尼崎・伊丹間を結ぶ川辺馬車鉄道が開通し、のちに摂津鉄道・阪鶴鉄道を経て、現在のJR宝塚線となった。1905年（明治38）には阪神電鉄が開通した。

1909年（明治42）、三菱財閥系の旭硝子株式会社が尼崎で操業を始めた。財閥系大企業の尼崎進出第1号が同社であった。ガラス製造のための会社設立を決意した岩崎俊彌は、1907年（明治40）8月1日、大阪市内に創立準備事務所を設置し、同年9月8日に創立総会を開催。社名を旭硝子株式会社、本店所在地を兵庫県川辺郡尼ヶ崎町ノ内尼ヶ崎町字中在家町460番地に定めて、資本金100万円でスタートした。

1910年（明治43）には又兵衛新田に日本リバー・ブラザーズの石鹼工場が設立された。

1916年（大正5）には古河電気工業、翌1917年（大正6）から1913年（大正12）にかけて久保田鉄工、関西ペイント、日本硝子、麒麟麦酒、大日本セルロイド（現ダイセル）、住友伸銅所（現住友金属工業）、日本スピンドル、塩野義商店、森永製菓、尼崎製釘所などが設立された。1920年（大正9）には阪急電鉄が開通している。

こうした企業の進出と併せ、大正14年（1925）、日本電力尼崎火力発電所が完成。1927年（昭和2）には阪神国道（国道2号線）が開通。また、浅野財閥の浅野総一郎らが1929年（昭和4）に、尼崎築港会社を設立した。同社は、工業地を造成することを目的に、臨海部約51万7千坪を埋め立てるとともに、良好な港とするための浚渫を行った。埋め立てた場所は、平左衛門町、扇町、末広町、中浜町、東浜町、東海岸町一体に及んでおり、現在の工業専用地域の大部分を占めている。

この地に立地したのが、関西共同火力発電所（現関西電力）、尼崎製鋼所と尼崎製鉄（後に神戸製鋼所）、日本亜鉛鍍金（現日亜製鋼）、日本石油などであった。このようにして、尼崎の臨海部に重化学工業地帯が形成された。

3 行政機構の変化

産業・交通の発展に対応して、行政機構も変化していく。1889年（明治22）の町村制施行時、現尼崎市域には城下町を中心とする尼崎町と、小田・大庄・立花・武庫・園田の5カ村が設置された。このうち尼崎町が、人口の増加や都市化の進展などにともなって、立花村の一部を合併して1916年（大正5）に尼崎市となった。

都市化の流れは、水道の整備や学校施設の拡充、住宅・医療・福祉など新たな都市問題、社会問題を生み出し、工場煤煙や、地下水汲み上げによる地盤沈下といった公害被害も、この頃から激しくなってきた。急速に都市化する工業都市尼崎は、同時に日本における労働運動、農民運動の中心地の一つでもあった。

こうした急速な変化に対処していくため、広域的な施策や都市計画が必要となる。1924年（大正13）には、現尼崎市域を範囲とする尼崎都市計画区域が決定され、昭和期に入ると道路計画や土地区画整理が実施された。1936年（昭和11）には尼崎市と小田村が解消合併して新たな尼崎市となり、1942年（昭和17）には大庄・武庫・立花村を合併した。

1937年（昭和12）に始まる日中戦争から、1941年（昭和16）開戦の太平洋戦争にかけては、戦時国家体制が強まるなか、尼崎の工業生産も軍需生産の比重を増していく。1945

年（昭和 2）には、3 月以降は米軍による空襲被害を受けるようになり、特に 6 月 1 日と 15 日に大阪・尼崎地域を襲った B29 による空襲では、西長洲・金楽寺・杭瀬・大物・西本町をはじめ、各所に大きな被害があった。

4 戦後の復興

戦後尼崎の復興は、まず商店街の再建から始まった。杭瀬・出屋敷などの商店街が活気を取り戻し、戦時疎開と空襲でかつての面影を失った本町通商店街の多くが移転し開設した中央商店街も、これに続いた。市民生活が徐々に立ち直るなか、1947 年（昭和 22）には園田村が尼崎市に合併し、現在の尼崎市域となる。

落ち込んだ工業生産も、1950 年（昭和 25）の朝鮮戦争にともなう特需景気によって息を吹き返し、やがて高度経済成長期にかけて、鉄鋼を中心とする工業都市尼崎が復活を遂げていった。

この時期の尼崎にとっての最大の課題は、工業用水の汲み上げによる地盤沈下が原因となって、毎年のように繰り返される高潮被害を防ぐための防潮堤の建設であった。特に 1950 年（昭和 25）のジェーン台風は、戦前の室戸台風以上に深刻な被害を尼崎市域にもたらした。このため、尼崎の海岸部全域を覆う大防潮堤建設が計画され、1955 年（昭和 30）度中に完成した。

鉄道や港湾の整備とともに工場立地が進んできた中で、尼崎市は 1954 年（昭和 29）に工場誘致条例を施行した。この条例では、「市内において、工場の新設又は拡充をする者に対して必要な措置を講じ、もって工業の振興を図ることを目的とする」としている。

条例施行後、1956 年（昭和 31）には、尼崎市は防潮堤建設の影響などによって、財政再建団体に陥っており、市単独の事業などは歳出カットするよう国からの強い指導があった。それにもかかわらず、条例を存続させたのである。

一方、国は 1963 年（昭和 38 年）に「近畿圏整備法」を制定。尼崎市域の阪急神戸線以南の地域が、産業と人口の過度の集中を防止するという「既成都市区域」に設定された。この中で、人口の増大をもたらす原因となる大規模な工場等の新設または増設を制限することができると規定された。そして、翌年には「近畿圏の既成都市区域における工場等の制限に関する法律」、いわゆる「工場等制限法」が制定され、臨海部の工業専用地域を除く既成都市区域においては、作業場面積 1,000㎡以上の工場の新・増設が禁止されることとなった。この時期以降、大規模工場の新規立地は、現在にいたるまでゼロという状態が続いている。

こうした国策による工場立地規制によって、工場誘致条例は、必然的に意味を成さなくなり、1968 年（昭和 43）に廃止された。

高度経済成長期には、工業生産の拡大に加えて、北部を中心とした住宅地開発も一層進み、市域の農地は急速に失われていく。人口の増加も著しく、1970 年（昭和 45）には 55 万 4 千人とピークを迎えた。同時に、地盤沈下に加えて大気汚染や騒音などの公害問題が一層深刻となるなど、急速な都市化の弊害がさまざまな形であらわれた。このため、工業用水道の設置（1958 年給水開始）や公害防止協定の締結（1969 年第 1 次協定）など、抜本的な公害対策がはかられていく。

さらに 1973 年（昭和 48）の第 1 次オイルショック以降、日本経済の構造変化が進むなか、戦前以来の尼崎の工業も大きな転換をせまられ、工場の転出や閉鎖、人口の減少など、都

市としての活力の停滞を余儀なくされていった。

尼崎市産業経済局の資料によると、工場等制限区域に立地する2,000㎡以上の工場が、1971年（昭和46）から2000年（平成12）以降に移転又は閉鎖された件数は、59件にものぼっており、面積にすると約568,000㎡となる。このうち29件は、マンションや住宅に転用されている。

近年尼崎の工業動向を1990年（平成2）から1999年（平成11）までの工業統計調査（従業員4人以上の製造事業所）の事業所数と製造業出荷額を見てみると、共に最高だったのは1991年（平成3）で、以降減少傾向が続き、過去最低は1999年（平成11）で事業所数1311、出荷額1兆4999億円で、この8年間でそれぞれ536事業所、6332億円の減少となっている。

減少した536事業所のうち、一般機械器具（167減）と金属製品（116減）の2つで53%を占めている。また、6332億円のうち最も減少したのは、化学工業で1366億円、次が鉄鋼業で1323億円、3番目が一般機械器具882億円でこの3業種で56%を占めている。反面、この不況下でも出荷額を大きく増やしたのが電器機械器具（583億円）と輸送用機械器具（277億円）であった。出荷額における全国シェアを見てみると、1991年（平成3）時は16位であったが、1999年（平成11）時には22位と工業都市としての地盤沈下は進んでいる。

移転・閉鎖した工場跡地は、製造業以外の利用が進んでいる。大規模工場の場合、近年の経済状況が厳しいうえ、製造業はかつてのように広大な土地を必要としなくなったこともあり複合商業施設、大規模集合住宅等へ、狭小跡地は住居系へと利用転換が進んでいる。

<参考文献>尼崎市史第3巻、尼崎地域史事典、尼崎商工会議所80年史、尼崎市HP
「尼崎市の歴史」

3 産業遺産に関する調査研究（平成 13 年度）

ミレニアム遺産の中に産業遺産を選定したことを受け、平成 13 年度、財団法人あまがさき未来協会では、自主研究として産業遺産に関する調査研究に取り組むこととした。

市内 63 工場の建築物を調査した。尼崎市内の工場敷地内にある建家を中心に昭和 39 年までの時期に作られたことが判明したものを対象とした。事務所、工場、倉庫、電気関連施設、従業員施設が主なものである。

調査研究の結果は「尼崎産業遺産に関する調査研究報告書」（A 4 判 152 ページ）にまとめた。

産業遺産に関する調査研究会会員（平成 13 年度）

	氏名	所 属
	粕田光男	粕田光男空間造型研究所、中央実務専門学校建築設計科・建築工学科講師
	加藤正文	神戸新聞記者
	川島智生	建築史家
	坂口重夫	ポリテクセンター兵庫住宅サービス科講師（兵庫能力開発促進センター）
	馬場正哲	(株)地域計画建築研究所
	三宅宏司(研究会会長)	武庫川女子大学生生活美学研究所・生活環境学部生活情報学科教授
	吉田哲	京都大学大学院工学研究科・建築学専攻・建築計画学
尼崎 市	辻川敦	総務局地域研究史料館
	山本敏史	企画財政局都市デザイン担当
	富永謙一	企画財政局都市デザイン担当
	高橋昌男	産業経済局産業振興課
	桃谷和則	教育委員会事務局歴史博物館準備室

（1）産業遺産とはなにか

産業遺産とは、産業の形成と発展に重要な役割を果たした意義をもつ、機械、道具、工場施設、土木構造物、建築物、図面、写真などのうち、今日に残されているものをさすとされる。

1993 年（平成 5）、国の重要文化財に「近代化遺産」という種別が設けられた。近代化遺産はさらに土木・交通・産業の三種類にわけられる。この前年 1992 年にわが国が世界遺産

条約を批准したところから、産業遺産への関心が高まってきようだ。

この遺産という語感から、休止した工場といったイメージがつきまとうが、産業遺産とは未来へのこしていきたいもの、と考えたい。

実はヘリテージという用語を（文化）遺産と訳すのはあまり適切ではない。ヘリテージとは継承されたものであり、その上に現在があるのであって、日本語のニュアンスのような過去の遺物ではない。

明治以降、日本は工業化がすすみ、終戦後もつねに経済発展をつづけてきた。その原動力となった産業の「気分」を彷彿とさせるもの。エネルギーや機能美、たくまぎ造形のおもしろさ、そんなところに価値をみいだせるものが、産業遺産である。

「産業遺産」とは、産業の形成と発展に重要な役割を果たした意義をもつ、機械、道具、工場施設、土木構造物、建築物、図面、写真などのうち、今日に残されているものを指す。一方、「近代化遺産」という言葉もある。「日本の近代化に貢献した建造物」とされるが、「産業遺産」「近代化遺産」ともに、明確な規定や概念があるわけではない。

1993年（平成5）、国の重要文化財に新たに「近代化遺産」という種別がもうけられた。この近代化遺産は、土木遺産・交通遺産・産業遺産の3種類に分けられている。

近年、産業技術の高度化が進展し、産業構造がダイナミックに変化していく中で、産業遺産、近代化遺産は急速に散逸・消滅していく危機的状況下にある。しかしながら、産業遺産が、一部が世界遺産として、あるいはわが国の重要文化財として指定されるなど、産業遺産の学術的文化的価値が重視される機運にある今日、産業遺産研究の成果に寄せられる期待は大きなものになってきている。

国では、1990（平成2）年に近代化遺産総合調査を開始している。

近代化産業遺産への関心は、わが国が1992年（平成4）に世界遺産条約を批准した頃から高まってきたものと思われる。

「産業遺産」の概念は、1950年代イギリスで始まった「産業考古学」（Industrial Archaeology）がそのスタートとなっており、今日では国際会議（国際産業遺産保存会議：TICCIH）も開かれるようになってきている。わが国では1977（昭和52）年に「産業考古学会」が設立され活動している。一方、「近代化遺産」の保存と活用を図るための組織として「全国近代化遺産活用連絡協議会」（全近）が1997年（平成9年）に設立されている。

これらは、ともに重要な文化財であるという認識は共通しており、保存であれ活用であれ何らかの形で後世に残していこうという点では共通していると言える。しかし「産業遺産」「近代化遺産」の多くは未だ文化財としての取り扱いを受けてはおらず、取り壊しになるもの、適切な管理を受けずに荒れ果てるもの等が多い。そのため、こうした組織が生まれその保存と活用のための運動を展開しているのだろう。

平成12年度に行った「ミレニアム遺産」の選定は、未来に引き継ぎたい尼崎の宝100を市民に選んでいただいたものであるが、これは、地域が自立的な発展を行う上では、その地域固有の発展史を再認識し、これらを活かしたまちづくりを目指そうという地域からのニーズにこたえたものといえる。この最終選定にあたって、「産業遺産」という項目を入れたのは、産業都市として発展してきた尼崎のアイデンティティを表わす「産業遺産」に着目し、広く皆さんに認識していただくとしたものである。しかしながら、尼崎市には国が調査を進める近代化遺産に該当するような古く、また大規模なものはほ

とんどない。塀に囲まれた工場内にある建物はそのまま知られることなく消え去るのみである。そこで、工場内の建物を中心に調査を行ったものである。

産業遺産には、建物だけでなく、設備、機械、家具、備品類や機関車、車両、自動車なども含まれるが、これらを調査することになると膨大な手間がかかり、現実的でないことから、この調査では工場建築に限ることとした。

この産業遺産に関する研究について詳述する前に、尼崎における産業遺産研究への取り組み経過を見ておきたい。

(2) 尼崎における産業遺産調査研究のあゆみ

尼崎市教育委員会 桃谷和則

1 はじめに

1990年代、文化庁は近代の歴史・文化遺産の保護に関する施策を矢継ぎ早に実施した。すなわち、1990（平成2）年に開始された近代化遺産総合調査と同調査結果に基づき1994（平成6）年から開始された近代化遺産の重要文化財指定、1995（平成7）年の特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準改正による近代の歴史・文化遺産の史跡等への指定開始、1996（平成8）年の文化財保護法改正による登録文化財制度の創設、同年より開始された近代遺跡の調査等々である①。

しかし、近代の歴史・文化遺産を調査・研究し保護しようとする動きは1990年以前に既に学会・研究者・業界団体等において積極的に進められていた。本稿が対象とする産業の分野においては、1977（昭和52）年設立の「産業考古学会」と1984（昭和59）年設立の「日本産業技術史学会」がその牽引役を果たしたが、近畿地方においては、大阪工業会内に事務局が置かれた日本産業技術史学会の存在が大きかったと言える。

大阪では既に1980（昭和55）年、桃山学院大学総合研究所内に「産業記念物調査研究委員会」が発足し、大阪における産業記念物の所在と保存状況に関する調査が開始され、同委員会の機関紙である『大阪の産業記念物』が翌年6月から発刊されていた②。また、1981（昭和56）年には上田篤・梅棹忠夫・吉田光邦を世話人とする「産業技術史学会」が大阪府の支援を受け発足し、機関紙『産業技術史研究』を発刊した③。この産業技術史学会を母体に、産業記念物調査委員会に集る研究者も多数参加して結成されたのが日本産業技術史学会であった。日本産業技術史学会は「産業技術に関する歴史について調査・研究を促進し、その成果を社会に還元することを目的」（会則第2条）④とし、初代会長には京都大学名誉教授の吉田光邦が就任、1985（昭和60）年からは機関紙『技術と文明』の発行を開始した⑤。また、同学会は大阪千里の万国博覧会記念公園内に国立産業技術史博物館の誘致構想を有していた大阪府・大阪市・大阪工業会と提携し、1987（昭和62）年に4者の代表者を代表幹事とする国立産業技術史博物館誘致促進協議会を設立している⑥。

このように1980年代、近畿地方においては、大阪を中心に産業遺産の調査・研究・保存の動きが活発化したが、この動向は隣接する尼崎にも一定の影響を及ぼすこととなった。

2 尼崎における産業遺産調査研究のはじまり

尼崎における産業遺産調査研究の先駆的事例は、日本産業技術史学会発足当初からの主

要メンバーであった三宅宏司氏（当時、大阪教育大学助手）が1985（昭和60）年に行った、尼崎市立尼崎産業高等学校が所有する機械・設備・道具・備品等の所在調査であった。戦前には住友金属工業甲東青年学校が所在していた同校地には、戦後、大阪市内から住友工業学校（後の住友工業高等学校）が移転している。それゆえ同校には住友工業学校時代の備品・教材が数多く残されており、氏の調査によればその数は数十種、総数100点を越えていたという。その主要な資料は、1939（昭和14）年製の指導用マイクロマターや、戦前に同校地に隣接して所在していた住友金属工業プロペラ製造所との関係が疑われる4点の木製プロペラ等であった⑦。なお、このときの調査により発見された資料の一部は、歴史博物館建設構想を有していた尼崎市教育委員会が、翌1986（昭和61）年に歴史博物館資料として収集し、保存を図ることになった。

3 日本産業技術史学会による尼崎の産業資料調査

1986（昭和61）年、尼崎市は市制施行70周年を迎えた。その記念事業のひとつとして、同年9月11・12の両日、尼崎市立中小企業センターを会場に「日本産業技術史学会あまがさきシンポジウム」が開催された。シンポジウムのテーマは「近代工業の歩みと新しい産業都市像を求めて」であった。シンポジウムでは、同学会の吉田会長による「日本の産業技術史における尼崎の地位と役割」と題する基調報告、尼崎市からの委託により前年から同学会が進めていた尼崎の産業技術史と産業記念物に関する調査の結果報告、海外の事例も含めた産業記念物の保存・活用に関する事例報告、産業博物館構想と中堅工業都市に関する調査報告・提言、さらに「産業記念物・産業博物館・新しい産業都市」をテーマとするパネルディスカッションが行われた⑧。シンポジウムの詳しい内容については財団法人あまがさき未来協会より記録集が刊行されているので同書に譲り⑨、ここでは尼崎市からの委託により同学会が実施した「産業技術史的観点に立脚した尼崎市における産業資料・産業記念物に関する調査・研究」についてのみ紹介する⑩。

同学会の調査は概ね次のような役割分担で行われたようである（所属は全て当時のもの）。

総論	庄谷邦幸（桃山学院大学）
土地利用	池野茂（桃山学院大学）
環境・建築・都市計画	安田孝（大阪大学）・久隆浩（大阪大学）
紡績・紡績関連産業	角山幸洋（関西大学）
金属・機械	出水力（大阪府立藤井寺工業高校） 並川宏彦（桃山学院大学）
化学	森田恒之（国立民族学博物館）
エネルギー・研究所	三宅宏司（大阪教育大学）

調査の方法は担当者によって様々であったようだが、大半が『尼崎市史』や企業社史等、既存の2次的な文献資料を用いた調査で、実際に企業・工場を訪問したと思われる調査はごくわずかであった。また、アンケートによる調査も並川宏彦氏による「尼崎の産業記念物の所在に関するアンケート調査」が唯一のようである。ゆえに本調査では、尼崎の産業技術史に関する新たな史実が発見されたり、企業・工場が記念物として保存している機械類等を除いて、新たな産業資料が発掘されるということはほとんどなかった。このように、本調査は、尼崎の産業技術史・産業資料に関する総合的な調査としては決して完全なものとは言えなかった。しかし、本調査は、これまで全くといってよいほど顧みられることがなかった尼崎の産業技術史・産業資料にはじめて光を当て、シンポジウムに多数の市民・行政関係者が参加し、その様子が新聞紙面等で広く紹介されたことで、産業技術史・産業

資料に関する人びとの関心を喚起したというのは大きな功績であったと言える。また、日本産業技術史学会にとっても、学会創立後間もない時期に、行政との協働による大規模なイベントが開催できたことは、同学会の存在を広く周知することになり、大きなメリットがあったものと思われる。

4 尼崎市教育委員会による産業資料調査

前述のとおり1986（昭和61）年に尼崎市は市制施行70周年を迎えたが、その記念事業のひとつとして、江戸時代に尼崎城が存在した城内地区に歴史博物館を建設することが決定された。同博物館では、工業都市として歩んだ尼崎の近・現代史に焦点を当てた活動を行うことが特色とされ、常設展示の一部では産業展示と称して、尼崎に発達した様々な産業の歴史を紹介することが計画された^⑩。

このため、歴史博物館建設計画を所管していた尼崎市教育委員会社会教育課では、1987（昭和62）年、歴史博物館の産業展示で活用可能な資料の所在把握を目的とする近代産業分野の展示物調査を実施した。調査は、社会教育課の近・現代史担当学芸員の指導のもと、神戸大学近・現代史研究会（代表 神戸大学助教授 鈴木正幸）に委託し、同研究会所属の大学院生・学部生たちが行った。本調査は、尼崎市内に残存する産業資料・産業遺産の悉皆調査を目的としたものではなく、あくまで将来、歴史博物館に展示可能な資料を調査するのが主目的であったので、まず、尼崎の近代産業史にとって重要な位置を占め、しかも、産業資料・産業遺産が残存している可能性の高い企業・工場のリストアップから調査を開始した。その際、前年の日本産業技術史学会による調査の結果や、『尼崎市史』、『地域史研究』、各企業の社史等の文献を参考とした。これにより実際に訪問して調査を行う対象を29企業（32事業所）とし、対象企業に対して調査依頼文を送付した。しかし、そのうち調査が許可されたのは21企業（24事業所）で、3企業は不許可、5企業は該当する資料はないとの返答であった。不許可となった企業に対しては尼崎商工会議所を通じて再度、調査許可を求めた場合もあったが、結局、許可が下りることはなく、上記21企業（24事業所）を訪問し、工場内に残された産業資料・産業遺産の調査を実施することとなった。調査が許可された場合でも、立ち入り場所が制限されたり、撮影は不許可、あるいは調査結果を一切公表しないように求めてきた企業・工場があり、企業・工場サイドの産業遺産の調査・保存に対する認識の希薄さを痛感しながらの調査であった。

調査結果であるが、まず建造物については、日本油脂尼崎工場と三菱電線工業尼崎工場に明治後期から大正期の建築と思われる煉瓦造りの建物が残存していることが判明した。また、機械・設備類では、企業・工場が記念物として保存しているもの以外にも、現役で稼働中の製造機械のなかに戦前のものが数点発見されるなどの成果があった。特に、キリンビール尼崎工場では1985（昭和60）年に稼働停止した製麦工場の建物がそのまま残されており、なかには主に1930年代にドイツで製造された製麦設備が一式、そのままの状態で放置されていることが発見できたのは大きな成果であった。発見された機械・設備類はいずれも大型で、歴史博物館の展示資料とするには困難があったが、製麦工場の建物が取り壊される際に廃棄される可能性があったので、機械類の保存を企業サイドに求めたほか、歴史博物館の展示資料として活用することを検討した。結局、製麦工場は間もなく撤去されたが、数台の機械は取り外されて工場敷地内に保管され、1993（平成5）年、そのうちの1台（雑穀分離機）が、歴史博物館資料として尼崎市教育委員会に寄贈されることとなった^⑪。

5 その後の動向

尼崎においては、1980年代に2度、産業技術史・産業資料に関する調査が実施された。そして、偶然にも両調査の実施と時を同じくして、戦前期における日本最大の火力発電所であった関西電力尼崎第一・第二発電所の解体・撤去が1986（昭和61）年から開始された。その際、日本産業技術史学会が中心となって両発電所を保存しようという運動が起こり、尼崎市教育委員会も資料寄贈を関西電力に申し入れた。その結果、発電所施設そのものの保存には至らなかったものの、一部の設備・機械類が日本産業技術史学会や尼崎市教育委員会等で保存されるという一定の成果を上げることができた^⑬。しかし、バブル経済の崩壊や尼崎経済の停滞、さらには工場用地としての尼崎の魅力の低下等が影響し、1990年代以降、神戸製鋼所尼崎工場やキリンビール尼崎工場など、工業都市尼崎を代表してきた大規模工場が次々と廃止あるいは市外に転出し、尼崎市内の製造事業所数は減少の一途をたどっていった。このように、産業資料・産業遺産の調査研究・保存には大変厳しい時代ではあったが、その間も尼崎市教育委員会歴史博物館準備室では、1995（平成7）年6月に取り壊し直前の神戸製鋼所尼崎工場を訪問し写真撮影等を行うなど、産業資料・産業遺産の調査・研究・資料収集を地道に継続していった。

注

- ①『文化庁月報』第304号（ぎょうせい、1984）、文化庁文化財保護部記念物課「近代の遺跡の保護について―史跡名勝天然記念物基準一部改正」（『月刊文化財』第379号、1995）、文化庁文化財保護部建造物課「報告近代の文化遺産の保存と活用について（建造物分化合会関係）」（『月刊文化財』第388号、1996）、文化庁文化財保護法研究会編著『文化財保護法改正のポイントQ&A』（ぎょうせい、1996）
- ②産業記念物調査研究委員会編集『大阪の産業記念物』第1号（同会、1981）
- ③『産業技術史研究』（大阪府企画部・産業技術史研究会、1984）
- ④『日本産業技術史学会正会員名簿』（同会、1984）
- ⑤日本産業技術史学会編『技術と文明』第1冊（思文閣出版、1985）
- ⑥『国立産業技術史博物館（仮称）構想』（国立産業技術史博物館誘致促進協議会、1987）
- ⑦三宅宏司「尼崎産業高校所在備品調査―住友工業高校時代のものを中心として」（日本産業技術史学会編『日本産業技術史学会第2回年会講演概要集』、1986）、三宅宏司「住友工業高校から尼崎産業高校へ」（「大阪の産業記念物」刊行会編『大阪の産業記念物』第8号、1986）
- ⑧『日本産業技術史学会あまがさきシンポジウム当日配付資料』（財団法人あまがさき未来協会、1986）
- ⑨『まちづくりコンベンション・シリーズ記録 日本産業技術史学会あまがさきシンポジウム』（財団法人あまがさき未来協会、1987）
- ⑩財団法人あまがさき未来協会編『尼崎の産業技術史研究』（同協会、1986）、並川宏彦「尼崎の産業記念物の所在に関するアンケート調査結果について」（未刊行）
- ⑪『（仮称）尼崎市立歴史博物館準備室だより』第1号（尼崎市教育委員会歴史博物館・図書館準備室、1990）
- ⑫『（仮称）尼崎市立歴史博物館展示物調査結果報告書』（神戸大学近・現代史研究会、1988、未刊行）
- ⑬桃谷和則「尼崎における火力発電の歴史」（財団法人あまがさき未来協会『TOMORROW』第56号、2001）

平成13年度にあまがさき未来協会が行った産業遺産に関する調査は工場内にある建物に限って行ったがその意義は次に述べるとおりである。

(3) 工場建築の調査意義

尼崎はかつては全国有数の工業都市であったが、近年多くの工場が市外に流出し、もはや工業生産額の上ではけっして工業都市とはいえない状況にある。現実には工場撤退後は工場の再建ではなく、倉庫や住宅の用地として用いられることが多く、また一方で更地も目立つ。尼崎という、工場が先行して形成された都市空間は大きく変容をはじめている。市街の空洞化が著しい。市域に工場敷地が占める割合を考えると、減少の一途にある。すなわち、都市尼崎の構造は大きな変化の過程にある。

平成13年のこの時期を逸しては尼崎が工業都市であった時の原形を掴むことがほぼ不能になるとも危惧された。そのとおり後年、関西電力のふたつの発電所の閉鎖など、工場をめぐる環境は刻々と変化した。

(4) 時間軸の設定

文化財登録制度では登録の対象になるのは、建設後50年を経過したものとなっているが、この調査では、昭和30年代に建設されたものまでを対象とすることとした。

昭和39年で括ったことは便宜上のものにすぎず、どの年度で境界を設定するのかについては明確な根拠はない。しかしこの前後の時期に多くの点で、戦前的なるものの終焉がみられる。そういったことを鑑みれば、この時期に境界を設定することにさほど誤りはないであろう。その根拠としては、次のふたつの理由をあげることができる。ひとつは経済上、もうひとつは建築技術上の理由である。

まず前者からみると、この頃から日本は急速に経済発展を遂げ、もはや戦前的な様態とは言えなくなる。東京オリンピックが開催された昭和39年から、大阪万国博覧会がひらかれた昭和45年、そして昭和48年のオイルショックまでのこの10年間こそが、戦後の時代を大きく分けるものと位置付けられる。すなわち、高度経済成長がピークに達した時期以前と、以降では大きく社会のあり方が変化すると考えられるからである。また尼崎をめぐる状況についてみても、昭和40年代後半には公害問題が顕在化し、従来とはあきらかに異なった様態を示す。すなわち経済上にとどまらず、社会構造の転換期を意味した。

次に後者をみると、昭和20年代と昭和30年代は昭和10年代に誕生した構造技術の延長線上にあったということが関連する。すなわち、工場建家を形成する鉄骨材料に注目すれば、H型鋼の使用は昭和40年以降で、それまでは戦前期と同様にI型鋼やL型鋼をリベットで接合したものが多く、柱や梁はラチスの形態に組み立てられた。また、建築思想についてみても、戦前期のモダニズムに端を発するモダニズム思潮がいまだ支配的な時代であった。

このようにこの時期は多くの点でターニングポイントのひとつと捉えることが可能であった。

(5) 産業遺産調査結果

以上のことを基盤に実施した産業遺産調査の結果は次のとおりである。

1 (株)朝日オートセンター(旧金井重要工業・トラベラー製造所)

尼崎市大庄北 5-2-1

① 事務所(旧製品倉庫)：竣工年月日－昭和 3 年 構造・材質－鉄筋鉄骨コンクリート造平屋建 設計者－和田建築事務所・和田貞治郎 施工者－大阪池上組・池上栄助

② オークション会場(旧熱処理工場)：竣工年月日－昭和 3 年 6 月 構造・材質－鉄筋鉄骨コンクリート造 2 階建一部 3 階建、屋根の形状は 3 連のヴォールトが連なり、アーチ形の断面をみせる。 設計者－和田建築事務所・和田貞治郎 施工者－大阪池上組・池上栄助

会社概要 明治 27 年に金井熊吉によって尼崎辰巳町に設立される金井トラベラー製造所を出発点とする。大正 2 年には金井慶二が後を継ぐ。大正 11 年より紡績用リングの製造を開始し、昭和 3 年に新工場を旧武庫郡大庄村に建設する。昭和 6 年に同敷地内に針布製造所を設立するものの、膨大な需要に応えられず新工場の設立が求められる。そのために昭和 12 年に伊丹に新たな工場が建設される。もうひとつの理由としては、大庄の工場が海岸から近いことで、潮風の影響に晒される。それは製品に錆びが生じるなど針布製造にとっての大きなマイナス要因を生んだ。昭和 18 年に社名を金井重要工業に変える。昭和 52 年にこの工場は廃止される。業務内容は繊維機器製造を主に不織布製造など多岐に及ぶ。大庄地区に設置された立地として、昭和 2 年開通の阪神国道が関連する。大庄村は将来、大尼崎市を形成すると予測されていた。

建築概要

1) 工場建築の再利用

金井重要工業の尼崎大庄工場の跡で、現在は朝日オートセンターという中古車販売店である。この会社はかつて工場であった建物をそのまま使用している。それは事務所とオークション会場の 2 棟からなる。現在もこの敷地は金井重要工業が所有している。先年まで事務所棟や食堂があったが、解体撤去されている。これらは木造建築であった。

現在も使用される 2 棟はユニークな外観を有するといったことがランドマーク的なものとして捉えられ、残されたと考えられる。この二つはともに鉄筋コンクリート造となる。オークション会場は旧熱処理工場であって、二階に当時の機械が設置されたままになっている。3 連のアーチの谷間にあるコンクリート製の樋のデザインは特徴的なもので、上部にいくほどに階段状に広がり、不安定さを強調する。これはドイツ表現派という、当時日本の建築界を席卷したスタイルに影響を受けたものと思われる。旧製品倉庫は事務所と車庫に使用されており、天井が高い空間である。竣工時には換気と採光のための鉄筋コンクリート造の越屋根であったのだろう。

工場としての機能が必要とされなくなった後も、再利用されている点にここでの意義がある。同様なケースとして尼崎市内では、よく知られるユニチカ、阪神電鉄倉庫があるが、今回の調査で朝日オートセンターは、産業遺産を利用したものであるということが発見できた。かつてここに日本を代表するトラベラー工場があったことをモニュメントのように、このふたつの建築は伝えている。

2) 竣工時の様態

工場全体では 1 万数千坪の大工場である。竣工時の記録(『土木建築之日本』3 輯 7 号)では「欧米の長を取り短を補い、工場法に因る最新式設備を施した」ものである。工費は十余万円、様式は近世式鉄骨鉄筋コンクリート、であった。中枢をなす工場は建坪は 620 坪、延坪は 750 坪を数える。仕上げは外壁についてセメントモルタル塗、腰部と蛇腹は擬石洗い出しと、一部にスクラッチタイルが使用されていた。今ではないが鋸屋根の工場も

あったことが判明している。

この工場の一二期工事では、トラベラー成形工場をはじめ 10 の工場と、1 の事務所、1 の倉庫がつくられる。またこの工場構内には、創業以来の史料を納めた金井記念館が設置される。二階建ての洋館であり、その建築材に用いられたのが一番最初の工場・辰巳工場の古材であった。が、戦災で焼失した。このような施設の設置は尼崎の工場ではきわめて希な事例である。それはこの会社が尼崎で創業したことを戦前期までは重要視していたことに他ならない。

3) 設計者

工場の設計者の和田貞治郎は、明治 45 年に大阪市立工業学校建築科を卒業した建築家であり、金井慶二の同級生であった。その関係で設計依頼がなされたものと考えられる。ただし、金井慶二は建築教育を受けていることから、建築のスタイルもふくめて工場の設計については注文をつけたと推察できる。つまり、一般の工場設計と比較すれば経営者の意向が相当に強く反映されたものであったとみられる。和田は卒業後、辰野片岡建築事務所に勤務し、その後大阪合同紡績建築課主任となり、大正 12 年に独立し、岸和田紡績や大阪鉄工所工場などを手掛ける。芦屋市に現存する精道小学校も作品のひとつだが、工場建築家という側面が強い建築家といえる。だから、この手の工場などはお手のものだったのだろう。なお、伊丹に昭和 12 年に建設された針布工場の設計もまた、和田貞次郎によるものだった。

評価軸

当初のオリジナル建築は 2 点あり、その時期は大正期以前というものではないが、昭和初期の鉄筋コンクリート造工場建築の形態がよくとどめられる。これまではこの建築の存在は知られておらず、履歴も判明しなかった。今回の調査で近代建築であることが判明した。

2 王子製紙(株) (旧神崎製紙)神崎工場 尼崎市常光寺 4-3-1

① KE コーター(旧加工室) : 竣工年月日 - 明治 27 年 構造・材質 - 煉瓦造平屋 設計者 - 不詳 施工者 - 不詳

② 電気室 : 竣工年月日 - 大正後期から昭和初期 構造・材質 - 鉄筋コンクリート造三階建て 設計者 - 不詳 施工者 - 不詳

③ 工場 : 竣工年月日 - 大正後期から昭和初期 構造・材質 - 鉄筋コンクリート造二階建て、三角形妻壁 設計者 - 不詳 施工者 - 不詳

④ 興和クラブ : 竣工年月日 - 昭和戦前期(推測) 構造・材質 - 木造平屋、ハーフティンバー風外壁 設計者 - 不詳 施工者 - 不詳

会社概要 明治 27 年、川辺郡常光寺に真島製紙所が創立される。明治 31 年に大阪製紙株式会社に変更、明治 43 年野田製紙所と改称、大正 4 年富士製紙が買収し、富士製紙神崎工場となる。昭和 8 年、王子製紙は富士製紙と権太工業を合併し、王子製紙神崎工場となる。わが国でも有数のアート紙生産工場として名をはせる。昭和 20 年空襲を受け工場は壊滅する。昭和 23 年神崎製紙として独立する。近年王子製紙と合併する。この工場の製造品目としては、製紙などがある。立地として神崎川に面し、当初は船舶により製品原料の運搬をおこなった。

建築概要 明治 27 年創業当時の工場施設は、昭和 20 年の空襲で被災し大半が壊滅するが、煉瓦造の加工所が残る。そこでは外観でアーチ状の開口部廻りがゼブラ模様の意匠をみせる。すなわち、赤い煉瓦と白い煉瓦を交互に配し、アーチ廻りを飾っている。このようなデザインの煉瓦建築は非常にめずらしい。また、昭和 39 年までは創業時の二階建て洋館事

務所(外国人技師の設計とされる)が存続した。この工場建設および最初の運営に、外国人技師が関わっており、このような事実から類推すれば、これらの施設の設計には外国人建築技師の可能性もある。さらに、戦前期の電気室もまた空襲でダメージを受けなかったもののひとつである。鉄筋コンクリート造で柱型があらわれるスタイルをとる。同様なスタイルのものに工場があり、鉄筋コンクリート造にも関わらず、三角形の妻壁を立ち上げることから、大正期につくられたと考えられる。

評価軸

当初のオリジナルのものとしては改造は激しいが、明治期の煉瓦造建築があって、その古さという点からは尼崎市内に現存するあらゆる工場のなかでもっとも古いものといえる。また鉄筋コンクリート造の電気室は規模が大きく、戦前期までの建築の特徴を示す建築である。

3 木村化工機(株)本社尼崎工場 尼崎市杭瀬寺島 2-1-2

- ① **木型工場**: 竣工年月日－昭和 14 年 構造・材質－木造、トラス構造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② **鉛管倉庫**: 竣工年月日－昭和 14 年 構造・材質－木造、トラス構造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ **古紙リサイクルボード実験場**: 竣工年月日－昭和 14 年 構造・材質－木造、トラス構造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ④ **鉛板工場**: 竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨、トラス構造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 13 年に大阪市西淀川区佃で創業する木村鉛工所が前身である。昭和 14 年木村鉛鉄機械工業所として、現在地に工場を新設する。昭和 44 年に木村化工機と社名を改称する。業務内容としては鉛管・鉛板にはじまり、化学工業用各種装置、原子力関係装置などを製造する。立地としては佐門殿川右岸に位置し、前面は国道 2 号線である。

建築概要

戦前期のものは、木型工場、鉛管倉庫、古紙リサイクルボード実験場の 3 棟が確認される。これらは木構造で、トラスによって大空間を構築している。とりわけ木型工場の梁や柱は合わせ梁や方杖によって大空間を支える工夫がみられる。古紙リサイクルボード実験場は高い位置に窓が水平連続窓になって採光をおこなっている。また、昭和 30 年代につくられた鉛板工場では鉛を引き延ばす機械が用いられる。

評価軸

現在の場所での開業が昭和 14 年という時期であるために、事務所が改築された他は、大体当初のオリジナルのものが多く残る。戦前期の木造によるものである。佐門殿川と国道二号線が交わる橋詰にあって、南側にあった中島自動車製造所(電気自動車製造のパイオニア)が亡き現在は、大阪市側から尼崎市側に入る際の、ひとつのランドマークになっている。

4 (株)クボタ・尼崎工場 尼崎市西向島 64

- ① **木型工場 1**: 竣工年月日－大正期 構造・材質－木造、トラス構造、足元立ち上がり部分は煉瓦 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② **木型工場 2**: 竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－鉄骨、木造、トラス構造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ **ロール加工工場(北棟・南棟)**: 竣工年月日－大正期 構造・材質－木造、トラス構造、

足元立ち上がり部分は煉瓦、一部鉄骨造に改築 設計者－不詳 施工者－不詳

④ 電気室：竣工年月日－大正後期から昭和戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て 設計者－不詳 施工者－不詳

⑤ 鑄造所：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 23 年に大阪で鑄物製造業として創業する。明治 36 年に久保田鉄工所として、水道用鑄鉄管の製造を開始する。その後は農機具をはじめ工作機械などを手掛ける。平成 2 年に株式会社クボタに社名を変更する。尼崎工場は主力工場のひとつで、大正 6 年より鑄鉄管・鋼塊用鑄型を生産する。昭和 2 年には回転式立吹鑄造方式により、鑄鉄管では日本でトップメーカーとなる。昭和 17 年より工作機械鑄物などの生産をおこなう。昭和 32 年には鑄型およびにロールの専門工場になる。昭和 36 年世界初の遠心力鑄造ロールの製造に成功する。現在の業務内容は圧延用ロール、鑄鉄異形管、ティーザクスの製造をおこなう。立地条件としては、旧佐門殿川の右岸に面する。船舶による運送がおこなわれる。尼崎市潮江に分工場である長洲工場がある。

建築概要 尼崎工場は、久保田鉄工所が大正 6 年に建設したものではなく、それ以前より操業していた大阪鉄工所(経営者はハンター、現在の日立造船)の鑄造部門だった。その創業は明治 45 年であったから、ここでの工場はこの時期に遡ることができる施設が含まれる可能性もある。大阪鉄工所は大正 5 年にこの工場を独立させ関西鉄工株式会社とする。それが大正 6 年に購入されて久保田鉄工所尼崎工場になる。隣接地には大正 7 年に久保田鉄工所によって関西製鉄が設立される。

戦前期までの尼崎工場の様態をみると、第一から第十三の鑄造所が設けられた。この工場は戦災を受け、木型工場が全焼、事務所と倉庫の一部が焼失した。現在は多くの工場施設からなるが、大正期から昭和戦前期に建設されたと思われる建築が 5 棟現役で使用されている。

昭和 40 年までにつくられた尼崎工場構内の各建物は構造の上から、骨組みが木造のものと鉄骨のもの、鉄筋コンクリート造の 3 つに分けられる。木造のものをみると、小屋組は共通しトラス構造であり、そのなかでもっとも古いものと考えられるものが木型工場 1(大正期)である。またロール加工の工場が北棟と南棟にわかれてあり、これらのものもその後増改築がなされているが、腰壁が煉瓦造など大正 10 年までに多かった工場建築の手法を示す。このことから大阪鉄工所時代の建築であった可能性も窺える。鉄骨については共通して柱はラチス柱、梁はトラス構造になる。木型工場 2 が昭和戦前期につくられており、それ以外にも鑄造所など、昭和 40 年までにつくられたものが多い。鉄筋コンクリート造のものに電気室があり、大正後期から昭和戦前期につくられたものである。

評価軸

当初のオリジナルのものとしては、大正期の木造工場が 3 棟存在する。それらは木造による工場としての古さという点からは、尼崎市内に現存するあらゆる工場のなかでもっとも古いものである。また鉄筋コンクリート造の電気室も残っている。戦前期までにつくられた木造、鉄骨、鉄筋コンクリート造の各構造のものが現存する。

5 (株)クボタ・武庫川工場 尼崎市大浜町 2-26

① 資材工場(3 棟)：竣工年月日－昭和 10 年代後半 構造・材質－木造、トラス構造、スレート板貼 設計者－久保田鉄工所内部の設計組織 施工者－銭高組

② 金型補修工場：竣工年月日－昭和 10 年代後半 構造・材質－木造、トラス構造、スレ

ー ト板貼 設計者ー久保田鉄工所内部の設計組織 施工者ー銭高組

会社概要 明治 23 年に大阪で鋳物製造業として創業する。明治 36 年に久保田鉄工所として、水道用鋳鉄管の製造を開始する。その後は農機具をはじめ工作機械などを手掛ける。平成 2 年に株式会社クボタに社名を変更する。武庫川工場は鋳鉄管の専門工場として、昭和 15 年に開設された。多様な管種と口径の幅広さは世界のトップレベルの生産規模として、西日本の供給拠点となる。立地条件としては、西堀運河左岸に面する。船舶による運送がおこなわれる。

建築概要 戦前期の工場建設の状況を観察すると、昭和 15 年に第一機械工場が、昭和 16 年に鉄管工場、昭和 17 年に第二・第三機械工場が、昭和 18 年に金型遠心力鋳鉄管工場、第四機械工場が、いずれもが久保田鉄工所内部の工場建築設計組織によって設計され、施工は銭高組によって担われた。これらの工費の合計は 355 万 8 千円であり、その延床面積は 14.500 坪であった。

なお、戦災により、倉庫一棟を焼失し、変電所・鋳物工場の一部が被害を受けた。

これらの工場が現存するどの工場に該当するのかは詳しく判明しないが、戦前期に建設された工場施設は敷地の北側にある。すなわち正門や事務所を挟んで南北の区域で建設時期が異なる。南側のより海岸に近い方の工場は戦後の建設である。

複数の資材工場は共通する外観であり、それは北側の屋根が一段下がり、光は北側から採られている。紡績工場に多い、いわゆる鋸屋根ではなく、その変形されたタイプと考えられる。また金型補修工場は木造ながらもきわめて長大な奥行を有し、構造的には合わせ梁や方杖などにくわえ、柱真に足元から内側に向かって傾斜する筋違状の補強材が 2 本入り、木造ながらも構造的に相当に強いフレームがつくり出されていた。

評価軸

当初のオリジナルのものとして、4 棟存在する。金型補修工場は尼崎市内に現存する木造建築としては、もっとも長大な奥行を有する建築といえる。

6 塩野義製薬(株)杭瀬工場 尼崎市杭瀬寺島 2-1-3

① **レクチュアホール(001 棟)**: 竣工年月日ー昭和 7 年 構造・材質ー鉄筋コンクリート造二階建、増築部を含めると三階建 設計者ー横河工務所 施工者ー竹中工務店

② **試験棟(003 棟)**: 竣工年月日ー昭和 11 年 構造・材質ー鉄筋コンクリート造二階建 設計者ー横河工務所 施工者ー竹中工務店

③ **パイオ治験薬製造棟(105-3 棟)**: 竣工年月日ー昭和 4 年 構造・材質ー鉄筋コンクリート造三階建 設計者ー横河工務所 施工者ー竹中工務店

④ **原動室(204 棟)・原薬製造棟(205 棟・206 棟・207 棟・208 棟・211 棟・308 棟)・ポンプ棟(209 棟)・化学実験棟(210 棟)・治験薬製造棟(305 棟)**: 竣工年月日ー204 棟・205 棟・206 棟は昭和 8 年、207 棟は昭和 5 年、208 棟は昭和 2 年、209 棟は昭和 4 年、210 棟は昭和 9 年、211 棟は昭和 11 年、305 棟は昭和 6 年、308 棟は大正 15 年、310 棟は昭和 15 年 構造・材質ー鉄骨平屋建、屋根・壁ともに人造スレート、基礎と腰壁が煉瓦造のものが 308 棟 設計者ー不詳 施工者ー不詳

⑤ **新製剤包装工場(310 棟)**: 竣工年月日ー昭和 37 年 構造・材質ー鉄筋コンクリート造、6 階建て 設計者ー坂倉建築研究所 施工者ー竹中工務店

⑥ **倉庫・事務所(500 棟)**: 竣工年月日ー昭和 37 年 構造・材質ー鉄筋コンクリート造・打ち放し仕上げ、6 階建て 設計者ー坂倉建築研究所 施工者ー竹中工務店

⑦ **化学実験棟(501 棟)**: 竣工年月日ー昭和 13 年 構造・材質ー木造 2 階建、モルタル塗

設計者－不詳 施工者－不詳

⑧ 守衛室・自転車置場：竣工年月日－昭和 37 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造・打ち放し仕上げ 設計者－坂倉建築研究所 施工者－竹中工務店

会社概要 明治 11 年大阪道修町で創業の、わが国を代表する医薬品総合メーカーである。大正 8 年に会社組織となり、大正 11 年に神戸酢酸今福工場を買収し、杭瀬工場は完成する。塩野義製薬の全工場のなかで、主力工場としての位置付けにある。昭和 22 年に関西行幸中の天皇は杭瀬工場を訪問する。この工場の製造品目としては、フルメタ軟膏・クリーム、リンデロン-V 外用剤、アルメタ軟膏、ドブトレックス、リンデロン注などがある。立地として左門殿川に面し、船の直接横付けが可能であった。このことは当初、船舶により製品原料の運搬をおこなったことを示す。また阪神国道に近接する位置にある。

建築概要 敷地面積 44.000 平米のなかに、大正 15 年完成のものから平成 10 年に改築された工場まで、建設時期が異なるさまざまな建物がある。そのなかでも昭和 37 年という、ある一定の時期につくられた建築が数多く目に付く。戦後の日本の建築をリードしてきた坂倉建築研究所大阪事務所によって設計された一連の施設である。

1) 坂倉建築研究所による建築

それは次のような特徴がある。コンクリートが剥き出しになった、打ち放しといわれる仕上げゆえに、それまでにつくられた建築とは明確に違いがある。しかもその表現は、表面が平滑なものではなく、コンクリートの表面に凹凸があって、より荒々しい肌合いで、彫塑性を強調するものになっている。このようなスタイルは昭和 30 年代前半に世界中に流行した、建築家ル・コルビュジェの後期の作品傾向と共通する。

正門に直面する倉庫棟は一階に事務所を内蔵するが、玄関上部の大庇などはこの建築が彫刻としての側面を有することを示す。その壁面は幾何学模様の目地によって飾られる。北側壁面は事務室部分だけに、コンクリートの方立がランダムな間隔に配されデザインされる。コルビュジェの作品・ラ・トゥーレットの修道院で用いられた手法の影響が色濃い。南側壁面は要塞のような小さな窓が設置され、壁だけの印象が強いなかで、唯一、屋上から降りてくる螺旋階段を外観のアクセントとしている。内部をみると、受付奥にはまるで宙を舞うかのように曲げられた階段が目につく。それは自由な形態が可能な鉄筋コンクリート構造という特性を生かしたものである。また応接室の椅子や机までもが坂倉建築研究所の独自のスタイルで設計されている。

守衛室とつづく自転車置場の柱は、上部にいくほどに細く絞られ、ブルータリズムの影響の荒々しいテクスチャのコンクリート製ながらも、ギリシャ神殿のオーダーを思わせる。その柱頭部に詰め込まれた鉄製の受け部分がピンになって、フラットスラブ構造のようにコンクリート製の屋根全体を支えるという、ひとつの実験が試みられている。

さらに正門と南門をつなぐ警備棟一帯に敷かれた床の仕上げにもデザインが施されている。それはセメントモルタルの目地がすべて北を向くというものである。個々の工場建築単体ではなく、工場敷地全体をトータルデザインしていこうとする環境デザインの姿勢が窺える。

4 つの円筒状からなる排水処理場は、コンクリート打ち放しで、樋の形態がガーゴイル(樋嘴)となる。このデザインもル・コルビュジェの影響が窺える。

塩野義製薬と坂倉建築研究所との関係は、昭和 36 年につくられる大阪浦江工場内の新研究所にはじまり、この杭瀬工場、そして昭和 43 年に完成する摂津工場へと繋がっていく。

2) 歴史的建造物

大正 11 年の創業時の建築は残っていないが、戦前期までにつくられた工場施設は調査を

おこなった平成 13 年 7 月の段階で、15 棟が存在した。それらは構造面から、鉄筋コンクリート造のもの、鉄骨造のもの、木造のもの 3 つに分けられる。鉄筋コンクリート造によるものは 3 棟、鉄骨造によるものは 11 棟、木造によるものは 1 棟がある。

史料的制約もあって全貌があきらかにならなかったわけではないが、いくつかの断片的な史料からは次のように事実があきらかになった。まず、大正 11 年当初の工場をみると、本工場とよばれた建物は煉瓦造りの大規模な建築であった。また昭和 2 年には鉄筋コンクリート造の製薬部研究所が設置された。これは杭瀬工場最初の鉄筋コンクリート造建築であった。いずれも現存しない。杭瀬工場全体は昭和 20 年 6 月 26 日の空襲で大被害を被った。戦災を受けた杭瀬工場の写真からは、川べりに二階建て一部三階建ての大規模な鉄筋コンクリート造の工場が存在したことがわかる。開口部が多い外観からは学校校舎のようなスタイルを示す。現在は失われている。戦後の最初の鉄筋コンクリート造建築としては、昭和 34 年に完成する抗生物質工場が最初である。

これら戦前期の鉄筋コンクリート造建築の設計は、横河工務所大阪事務所が担っていた。当時の横河工務所大阪事務所には松井貴太郎という著名な建築家がおおり、関西に多くの工場建築を設計した。

3) そのほか

道路を挟み、南門の向かいに木造二階建ての寮がある。

なお、今では想像すらできないが、江戸時代にはこの工場敷地内、稲荷神社北側の緑地のあたりに、船遊びを楽しむための「寺江亭」という京都の貴族の別荘があった。現在は石碑が建つ。

評価軸

大正 11 年当初のオリジナルのものは残っていないが、大正 15 年から昭和戦前期、昭和戦後期と、様々な時期の建築から構成される点を特徴とする。とりわけ戦後期の坂倉建築研究所による建築群はその完成度にくわえ、築 40 年を経ており、戦後期の建築ながらも歴史性ということから評価に価するといえよう。尼崎市内に位置する戦後期の工場建築としては、もっとも建築的に意義が深い建物と考えられる。

7 神鋼鋼線工業・尼崎工場 尼崎市中浜町 10-1

① 旧中浜変電所(元.日本発送電)：竣工年月日－昭和 10 年前後 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

② 電気室：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

③ 工場 A 棟：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄骨 設計者－高柳宗一(高柳工務所) 施工者－不詳

④ 工場 B 棟：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄骨 設計者－高柳宗一(高柳工務所) 施工者－不詳

⑤ 旧酸素工場(現.研究所)：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 29 年に神戸製鋼所より分離独立し、発足する。その始点は大正 6 年に乾新兵衛により設立された乾鉄線株式会社に遡れる。この会社はワイヤロープ製造では東京製網に次ぐ歴史を有した。乾鉄線は昭和 6 年に社名を日本鉄線鋼索株式会社と改称する。線材二次製品メーカーとしてわが国有数の規模を誇った。昭和 18 年に日本鉄線鋼索は神戸製鋼所によって買収され、神戸製鋼所尼崎工場となる。業務内容は引き継がれた。なお、神

鋼鋼線工業は昭和 63 年に尼崎市道意町より、現在地に移転した。現在の主要営業品目とし、PC 鋼線をはじめ、めっき鋼線およびワイヤロープの製造販売をおこなう。工場立地としては敷地東側に蓬川が流れ、そこには船が接岸し、原材料の運搬をおこなう。

建築概要 ここに紹介する建築は、元日本発送電の変電所と、昭和 12 年設立の旧尼崎製鋼所の工場のふたつからなる。

前者は旧中浜変電所といい、装飾を排除したモダニスタイルの建築である。構造は鉄筋コンクリート造二階建て、外観の特徴はガラスとタイルによる構成主義的なスタイルが用いられている点にある。まず、一階エントランスの庇をタイル貼りの柱が支え、それは庇スラブ上部に達し、一部回り込み、一見、抽象彫刻のような印象を与える。そのタイルは薄茶色の泰山焼きのモザイクタイルである。玄関内部は半円などを用いたアールデコの味わいのある階段がある。その上部は吹き抜けになる。階段踊り場ではガラスの箱状の窓が外部に突出するなど、大胆なモダニスタイルが試みられる。二階は全面ガラスの連続窓が実現された。それはガラスの壁面を柱の位置よりも突出させることで可能となった。竣工は昭和 10 年前後であり、現存する尼崎にある近代建築のなかで、もっともモダンデザインの色彩が濃い建築といつてよいだろう。

後者は尼崎製鋼所が戦後に神戸製鋼所尼崎製鉄所になり、昭和 63 年に閉鎖される。その工場施設に神戸製鋼の子会社である神鋼鋼線工業が移転し、当時の施設をほぼそのままに利用している。電気室は柱型が外観に表出した外観であり、戦前期の建築であることを示す。工場 A 棟と工場 B 棟はともに鉄骨造の建築である。旧酸素工場は昭和 30 年代の鉄筋コンクリート造建築である。

評価軸

ふたつの電気関連の施設が歴史的な建築である。とりわけ旧中浜変電所は構成主義の影響が顕著な鉄筋コンクリート造によるモダニズム建築であり、現存する尼崎市内にある建築のなかでもっとも前衛的な意匠を有する歴史的建造物といえる。

8 神東塗料(株) 尼崎市南塚口町 6-10-73

① **事務所**：竣工年月日－昭和 30 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て、陸屋根 設計者－日建設計工務 施工者－不詳

② **塗料工場**：竣工年月日－昭和 15 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造、屋根部は木造 設計者－不詳 施工者－不詳

③ **倉庫**：竣工年月日－昭和 15 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 34 年に神戸で神戸ボイル油株式会社を母体として創業し、昭和 8 年に東洋塗料製造株式会社と合併し、神東塗料株式会社が設立される。昭和 13 年に住友化学工業株式会社と資本・技術提携がおこなわれる。同年神東化学研究所が新設される。昭和 14 年には神東の製品はすべて住友本社の一括買い上げとなった。昭和 15 年尼崎工場が操業開始する。昭和 18 年、帝国塗料株式会社を合併する。昭和 61 年、尼崎工場内に新設 FMS (溶剤系塗料) 工場完成、翌昭和 62 年、尼崎工場内にロボットによる調色である CCS システムを導入した近代化調色工場完成する。業務内容としては、塗料、接着剤、顔料、合成樹脂塗料、油脂などの製造をおこなう。立地としては阪急電鉄塚口駅南方にある。

建築概要 当初の敷地は 1 万 2 千坪あって、昭和 26 年に画家・小松益喜が描いた「神東塗料会社が見える風景」という油絵からは、田園のなかで多くの工場や倉庫から構成されていたことがわかる。事務所は左右対称のプランニングで、中央部に車寄せが設けられ、水平

の底が突出するものであるが、デザイン的に戦後のモダニズム建築といえる。窓廻りのスティールサッシをみても棧の位置についてもデザインがなされており、工夫のほどがうかがえる。設計を日建設計工務がおこなった理由は、神東塗料が住友系資本ということで担当したと考えられる。

塗料工場は一階は鉄筋コンクリート造であるが、屋根部は木造のトラス構造で、バタフライ形の屋根になる。このような混構造は万が一、製造中に爆発した場合に、木造部分を飛ばすことで、本体に影響が及ばないように考えられたことによる。また、バタフライの意味は、有効採光面積を有利にするため、敢えて水仕舞い上は不利な形態になった。倉庫については三角形の妻壁が立ち上がり、柱型が表れている点の特徴である。

評価軸

事務所は戦後のモダンスタイルを示す一例と位置付けられる。塗料工場は鉄筋コンクリートと木による混構造ながらも、小屋組の木の組み合わせは戦前期までの洋風による木造技術の跡が見受けられる。これは戦後の建築には見られないもののひとつである。

9 住金機工株式会社 尼崎市扶桑町 1-1

① 第一工場：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄骨造、鋸屋根、ただし地階は鉄筋コンクリート造 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

② 第二工場：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄骨造、鋸屋根、ただし地階は鉄筋コンクリート造 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

③ 倉庫

竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－木造 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

会社概要 住友金属工業鋼管製造所から独立し、昭和 33 年に設立される。現在の業務内容としては、継ぎ目なし鋼製溶接継手、高圧ガス容器、スミコート PV の製造販売である。工場立地としては敷地北側の JR 東海道線上に専用のプラットホームが設置されている。昭和 33 年の創業時には引き込み線が工場構内に引き入れられていた。また敷地東側で産業道路に面する。

建築概要 第一工場と第二工場はともに昭和 10 年代に住友金属工業プロペラ製造所としてつくられた建築である。ともにボス加工工場であった。建築の構造は鉄骨造で北側採光の鋸屋根である。両者とも鉄筋コンクリート造の地階を有しており、双方は地下通路で繋がる。地階は柱・梁から構成されるラーメン構造であり、現在のものと比べて寸法の大きな柱、梁が確認される。現在の用途は従業員食堂や倉庫などに使用されており、ドライエリア(空堀)から採光、換気をおこなう。このドライエリアの擁壁も鉄筋コンクリート造によって構築されている。建具類は鉄製のサッシになっている。木造の倉庫については、越屋根の開口部を高く掲げるスタイルである。

第一工場前の屋外にはドイツのオイムコ社のハンマー(昭和 10 年当時に使用)が展示されており、住金機工では古い機械類を大事にしていることがわかる。

評価軸

地下工場は尼崎市市内では住友金属建材とともに唯一のもので、日本全体においても戦前期のものとしては数少なく、きわめて貴重なものといえる。住友金属建材の工場とも地下で繋がっている。

10 住友金属建材(株)尼崎製造所 尼崎市扶桑町 1-21

① **工場(翼加工)**: 竣工年月日—昭和 10 年代 構造・材質—鉄骨造、鉄筋コンクリート造
地階あり 設計者—長谷部竹越建築事務所 施工者—不詳

会社概要 平成 9 年にイゲタ鋼板株式会社とイゲタ建材株式会社が合併し、同時に住友金属工業株式会社のカラー鋼板事業・ステンレスチタン建築事業、並びに住友鋼材工業株式会社の加工製品事業の営業譲渡を受け発足したメーカーで、住友金属グループのひとつである。営業品目としては塗装鋼板をはじめ冷延製品や軽量形鋼、デッキプレート、グレーチング、仮設建材など建築土木に関わるものが多い。

建築概要 戦前期につくられた工場は旧住友金属工業プロペラ製造所の施設を使用している。鉄骨造によるものである。この工場には地階があり、現在は従業員のロッカールームなどに用いられる。この地下の通路は住友機工株式会社の第二工場と地下通路で繋がる。地下通路の断面は工場と工場の間ではトンネル状になる。建物の下では地階の壁と天井は直角で交わる。柱と梁が取り付く部分はハンチになるが、珍しい形の火打梁状の補強も観察できる。

評価軸

地下工場は尼崎市内では住友機工とともに唯一のもので、日本全体においても戦前期のものとしては数少なく、きわめて貴重なものといえる。住友機工の工場とも地下で繋がっている。

11 住友金属工業(株)特殊管事業所 尼崎市東向島西之町

① **本館事務所**: 竣工年月日—昭和 10 年代 構造・材質—鉄筋コンクリート造三階建 設計者—長谷部竹越建築事務所 施工者—不詳

② **研究棟**: 竣工年月日—昭和戦前期 構造・材質—鉄筋コンクリート造三階建 設計者—不詳 施工者—不詳

③ **厚生棟**: 竣工年月日—昭和戦前期 構造・材質—鉄筋コンクリート造三階建 設計者—不詳 施工者—不詳

④ **工場**: 竣工年月日—昭和 3 年 構造・材質—鉄筋コンクリート造 設計者—不詳 施工者—不詳

⑤ **倉庫**: 竣工年月日—大正期以前 構造・材質—煉瓦造(基礎部) 上部不明 設計者—不詳 施工者—不詳

会社概要 明治 45 年に創業した岸本製釘所を引き継ぎ、大正 8 年に設置された住友伸銅所尼崎工場が前身である。大正 10 年に住友合資会社伸銅所尼崎工場に、大正 15 年には住友伸銅鋼管株式会社尼崎工場となる。昭和 10 年には住友金属工業株式会社と社名が改称され、その鋼管製造所としてスタートする。昭和 30 年以降は特殊管事業所として、高級継目無鋼管の一貫製造工場となる。工場立地としては旧佐門殿川と東掘運河に挟まれ、さらに入り堀に面する。

建築概要 本館事務所は装飾を排除した簡素なスタイルの鉄筋コンクリート造建築である。開口は柱型以外の部分を最大限用いたものである。柱型は表出されず、平滑な壁面が実現される。入口には車寄せがあり、その屋根はトップライトになる。内部は階段廻りにのみわずかにアールデコの要素がみられる。研究棟は大正期から昭和戦前期に建設された鉄筋コンクリート造建築である。特徴は縦長の開口となり、本館事務所より古い時期の建設と考えられる。厚生棟は一階が事務所関係、二階に吹き抜けになった大ホール状の従業員食堂がある。その柱は鉄筋コンクリート造で放物線状の曲線(パラボラアーチ)になった巨

大な梁によって支えられるという構造になっている。また床の間の付いた和室の広間も用意されている。屋上に設置された円形の塔屋があり、そこから機関銃で射撃できるようになっていた。

工場は昭和 3 年に尼崎旧工場の東側につくられたものの一部で、外観上柱型と梁型が表しになっており、その交わり部分にハンチが付く。いわゆる折線アーチというスタイルのもので、大正後期から昭和初期の工場建築や学校建築に用いられた手法であった。尼崎工場は大正 14 年に安治川工場の鋼管部門が移転され、それまでの製釘・製線・製樽などが廃止される。この時点で工場施設は大きく更新され、古い建家は失われた。しかし基礎の部分が煉瓦造になった倉庫も現存する。そのほかかつてこの工場で使用されていた機械類が屋外に展示されている。

評価軸

尼崎市内の工場としては三菱電機伊丹製作所とならび、その規模を誇る。臨海部の工場としては最大のもので、大正期から昭和戦後期までの各時期の工場がある。

12 住友精密工業株式会社・本社工場 尼崎市扶桑町 1-10

① 旧本館事務所：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建、陸屋根 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

② 第二工場(旧翼加工)：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄骨造、一部鉄筋コンクリートの混構造 3 階建て 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

会社概要 昭和 18 年の住友金属工業株式会社のプロペラ製造所神崎支所として設立される。昭和 36 年に住友金属工業の航空機事業部門を継承し、住友金属工業として発足する。工場立地としては敷地東側が産業道路に面する。

建築概要 戦争による空襲で建家の大半を失う。鉄骨造の工場は焼け落ちるものの、鉄筋コンクリート造建築の多くは残った。旧本館事務所は昭和戦前期の鉄筋コンクリート造建築である。その外観は戦後の建築と共通し、装飾が排除された簡素な箱状建築である。モダニズム的な建築特徴もみられない。戦前期につくられた第二工場は鉄骨造の建築ながらも、スラブと梁は鉄筋コンクリート造になり、巨大な鉄骨のラチス柱によって支えられる。そのような混構造が採用された理由として、工場ゆえに機械の振動などが下階に伝わることを避けなければならないといった、必要に迫られてこのようなことになったと考えられる。工場は一般的に単層が採用されることが多いが、ここでは珍しく複数階を有する。

評価軸

第二工場はコンクリートスラブと梁を鉄骨ラチス柱で支えるという、現在の建築技術では見られない構造が実現されており、過渡期的な産物とはいえ、歴史的なものと位置付けられる。

13 住金溶接工業(株) 尼崎市扶桑町 1-17

① 6号館(旧熱処理)：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造 3 階建て 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

② 工場：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄骨造 設計者－長谷部竹越建築事務所 施工者－不詳

会社概要 住金溶接棒株式会社は昭和 37 年に、富士鋼業株式会社(昭和 14 年に設立)の溶接棒事業を分離し、設立された溶接材料と機器のメーカーである。昭和 40 年、尼崎市扶桑町に移転する。住友金属工業のグループ会社のひとつである。

建築概要 旧住友金属工業プロペラ製造所の施設を使用している。6号館とよばれる建物は鉄筋コンクリート造 3階建てで、外観は工場というより事務所などのビルディングのスタイルを呈する。開口部は壁面全体がガラス窓になり、壁面に対する開口率は高い。また、水平連続窓が実現されており、モダニズムに影響を受けたものとして位置付けられる。ただ、子細に観察すれば一層あたりの階高が高く、通常の事務所でないことがわかる。現在は工場兼研究所として使用されている。戦後はほぼ10年間にわたってアメリカ進駐軍がこの6号館を本部として接収した。その際に、ダンスホールとしても使用した。設計は長谷部竹越建築事務所が担当しており、昭和10年代に完成する旧住友金属工業プロペラ製造所のすべての施設は同建築事務所の設計による。同建築事務所の前身は明治期の住友家臨時建築部であって、戦後は日本最大の建築事務所である日建設計となる。

工場は妻壁の中央部分が北側と南側にそれぞれ立ち上がり、棟部分は下がるというバタフライ状の断面になる。これは採光を考慮して現れたものだが、従来の北側だけに開かれたものではないという点に特徴がある。

評価軸

6号館はモダニズムの影響を受けた戦前期の建築である。内奥にあるために敷地の外からはうかがい知れないが、今回の調査で発見できた近代建築のひとつである。

14 (株) 精機工業所 尼崎市東塚口町 1-7-33

工場 1・2・3・4・5：竣工年月日－昭和14年 構造・材質－木造、屋根は人造スレート葺き、壁は下見板貼り一部オイルペイント塗 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正11年、ギヤ式低速度モートルの特許をとり、大阪大正橋で創業する。昭和4年C形減速装置を開発、昭和14年に立花村に本社工場を建設し、組織体制を株式会社とする。海軍指定工場となる。業務内容は一貫して、産業用のギヤ減速装置の製造である。立地としてJR福知山線に近接し、また尼崎産業道路が敷地の西側に予定されるという、利便性が高い場所であった。

建築概要 昭和14年に大阪市内から移転してくるが、ほぼ当時の施設配置がそのまま残る。ただ、事務所棟が平成7年の阪神大震災で被災し建て替えられている。また社宅や寄宿舎、テニスコート・バレーコートなどの厚生施設は敷地の一部売却などで失われている。

ここでの工場建築はすべて木造によってつくられている。工場は東西方向に配置される。中央部の屋根は採光と換気のために一段と高くなる。外観からは壁面のなかでガラス窓の面積が北面と南面では相当に大きく占めていることがわかる。屋根は洋小屋のトラス構造で支えられている。ここでは木造ならではの工夫がみられる。まず柱をみると合わせ柱になる。梁は合わせ梁だけでなく、木製のラチス梁もみられる。トップライトから差し込む太陽光が淡く反射し、木造トラス構造ならではの、ダイナミックな空間を観察することができる。

評価軸

事務所以外のほとんどすべての工場施設が竣工時のままに使用されている、きわめて珍しい工場といえる。また、木部は白色系ペイントが塗られるなどメンテナンスが行き届いており、木造ならではの柔らかい空間が作りだされている。

15 積水化学工業(株) 尼崎工場 尼崎市潮江 5-8-6

本館：竣工年月日－昭和2年 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 尼崎工場は昭和 28 年に日室紡績工場跡地に開設された。粘着テープの製造から開始され、現在はサインシステムやフォーム、メディカル、ハイムの部材など多岐にわたる。現在は尼崎工場には 20 棟をこえる施設がある。立地として JR 福知山線に接し、当初は引き込み線もあった。

建築概要 昭和 2 年に完成する日室紡績工場の事務所棟がそのまま使用されている。鉄筋コンクリート造二階建てで、中央部に車寄せを設け、左右対称のプランを有する。意匠的には柱型が二階のパラペットを突き抜けるというゴシックに影響を受けた要素もみられる。内部の階段には木製の親柱が用いられ、セセッション風の幾何学的な装飾が施されている。室内は梁型が表れているが、現在の建築に比較して、天井の高さが高いことが指摘できる。

評価軸

事務所として、旧日室紡績という昭和初期の鉄筋コンクリート造建築が使用されており、これまではその存在の確認や履歴の解明はなく、今回の調査で発見できた歴史的建造物のひとつである。

16 ダイセル化学工業(株)神崎工場(旧大日本セルロイド) 尼崎市神崎町 12-1

① 旧事務所：竣工年月日－大正 5 年 構造・材質－木造平建、棧瓦葺き 設計者－河合浩蔵(推定) 施工者－不詳

② 倉庫 1：竣工年月日－大正 5 年 構造・材質－煉瓦造平建、棧瓦葺き 設計者－河合浩蔵(推定) 施工者－不詳

③ 倉庫 2：竣工年月日－大正 5 年 構造・材質－煉瓦造平建、棧瓦葺き 設計者－河合浩蔵(推定) 施工者－不詳

会社概要 神崎工場は大正 5 年設立の大阪繊維工業株式会社が前身である。セルロイドの製造を目的に設立される。創業者の岩井勝次郎は大阪の岩井商店(後の日商岩井)の経営者で、隣接する関西ペイントの設立者でもあった。大阪繊維工業は大正 8 年に堺セルロイドをはじめ 8 社と合併し、大日本セルロイド株式会社神崎工場となる。昭和 8 年以降セロハン製造を開始し、戦後はフィルム製造を担う。昭和 54 年ダイセル化学工業株式会社に名称を変える。現在はポリスチレン樹脂ベースの製造もおこなう。立地として神崎川に接し、当初は水運を利用していた。

建築概要 大正 5 年の創設時の建築が旧本館事務所である。玄関の庇は当初のものと思われる、その持ち送りはセセッションに影響を受けた意匠になる。ほかに煉瓦造倉庫が 2 棟残っている。現存する煉瓦造の倉庫は内部に鉄骨補強がなされている。操業開始時の鳥瞰図からは 20 棟前後の建物があったことがわかる。その多くは煉瓦造であった。

設計者の河合浩蔵は神戸地方裁判所などを設計した明治大正期の大物建築家のひとりであって、

この工場の創設者・岩井勝次郎邸を御影に建設した。岩井勝次郎は河合浩蔵にとってパトロニックな存在であった。

評価軸

従来は戦災で多くが失われたと考えられていたダイセル神崎工場ではあるが、設立当初の煉瓦造建築の現存が確認された。設計者は著名な建築家・河合浩蔵であり、建築史上意義深いものである。

17 ダイソー(株)尼崎工場(旧大日本ソーダー) 尼崎市大高洲 11

① 事務所：竣工年月日－昭和 6 年 構造・材質－木造二階建て、モルタル塗、瓦棒葺き

設計者－不詳 施工者－不詳

② **食堂**：竣工年月日－戦前期 構造・材質－木造平屋建て、モルタル塗、瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

③ **倉庫 1(4 棟)**：竣工年月日－戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造平屋 設計者－不詳 施工者－不詳

④ **倉庫 2(1 棟)**：竣工年月日－戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て 設計者－不詳 施工者－不詳

⑤ **倉庫 3**：竣工年月日－戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て 設計者－不詳 施工者－不詳 ※元は変電施設

⑥ **研究所**：竣工年月日－昭和 36 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造 設計者－不詳 施工者－不詳

⑦ **岩塩倉庫**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 4 年大阪で大阪曹達を設立、かせいソーダ製造を目的として、昭和 6 年に尼崎工場を建設する。昭和 27 年に尼崎工場内に次亜塩素酸ソーダ製造設備を新設する。昭和 30 年大阪チタニウム向け液塩輸送パイプ竣工する。昭和 34 年、大阪水素へ水素ガスを供給する。亜塩素酸ソーダプラント竣工する。昭和 36 年に尼崎工場と道路を隔てて隣り合った敷地に研究所を新設する。同年塩素酸ソーダプラント竣工する。昭和 44 年塩素化ポリエチレンプラント完成する。昭和 45 年ケイ酸ソーダ用カレット製造設備新設、昭和 51 年に隔膜法ソーダ製造設備の運転が開始される。この工場の事業内容としては、かせいソーダおよび、塩素製品の主力工場となる。薬品、無機・有機化成品、合成樹脂、樹脂加工品、医薬品そのほかの化学製品の製造、化工をおこなう。立地として旧左門殿川に面し、現在も船舶により製品原料の運搬をおこなっている。

建築概要 敷地面積 26,000 坪のなかに、昭和 6 年完成の工場から平成 13 年に新築された工場まで、建設時期が異なるさまざまな建物がある。

まず、戦前期のものからみていく。事務所は木造建築ながら、鉄筋コンクリート造であるかのように柱型を突出させる外観である。また、開口部が大きいということも特徴といえる。玄関部には車寄せがあり、その意匠は木造建築であることを示すように、軒裏に化粧垂木状のものが洋風のアレンジでデザインされている。食堂もまた木造建築によるもので、柱に付いた頬杖からも、この建築が洋小屋でつくられていることがわかる。柱型が表しになった鉄筋コンクリート造倉庫は二種類あって、平屋建てのものと二階建てのものがある。後者は前者のものに増築された可能性がある。変電所は当初から二階建てであった。

次に戦後期のものをみると、鉄筋コンクリート造研究所がある。この建築は庇などによって水平線を強調した外観を有し、モダニズムの影響を受けた建築といえる。岩塩倉庫は船から降ろされた岩塩を保管する鉄骨建物であり、三角形断面の巨大な空間を内包する。

評価軸

事務所は鉄筋コンクリート造であるかのようなスタイルでつくられており、尼崎市内に現存する工場の戦前期の木造事務所としては、意匠面において優れたもののひとつといえる。

18 大同鋼板(株)本社工場 尼崎市杭瀬南新町 3-2-1

① **事務所**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建て 設計者－不詳 施工者－不詳

② **冷圧工場(北敷地)**：竣工年月日－昭和 34 年 構造・材質－鉄骨造 設計者－日建設計

施工者－鴻池組

③ **工場(南敷地)**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造 設計者－不詳 施工者－不詳

④ **倉庫 1(南敷地)**：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート平屋造(のちに二階部分が木造で増築) 設計者－不詳 施工者－不詳

⑤ **倉庫 2(南敷地)**：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート平屋造 設計者－不詳 施工者－不詳

⑥ **給水塔**：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 32 年の富家商店が前身である。大正 13 年尼崎工業所が設立され、昭和 9 年富家鋼業が設立される。昭和 16 年大同鋼板と合併し、昭和 25 年大同鋼板が設立される。業務内容は亜鉛メッキ鋼板・ガルバリウム鋼板や表面処理鋼板、イソバンドなどの金属サンドイッチパネル建材を製造する。この敷地は左門殿川右岸に棧橋を有し、船から直接原料を荷下ろしできる立地にある。

建築概要 阪神電鉄西大阪線によって敷地は南北に分かれる。北敷地には事務所や商品展示場、各工場がある。戦前期までのものは給水塔がある。一方南敷地は各工場からなるが、戦前期の倉庫が 2 つある。

前者からみると、車寄せのある事務所は昭和 30 年代につくられたもので、戦後のモダニズム建築と位置付けられる。また、工場にはラチス柱が用いられているものがあって、H 形鋼が普及していない時期の建設のスタイルが窺える。また佐門殿川へのクレーン棧橋があって、ここでもそのようなラチス柱がみられる。それは昭和 30 年代までの鉄骨造における柱の構成の一般的なスタイルであった。

後者をみると、戦前期の鉄筋コンクリート造倉庫が 2 つある。倉庫 1 は後に増築されて二階建てになり、倉庫 2 は敷地境界塀と一体化したものである。

昭和 30 年代までにつくられた工場の特徴は、鉄骨という骨組みに注目すれば、先述のラチス柱や鉄骨の接合部がリベット接合になっている点にある。採光という点では鋸屋根による北側からの光の摂取が多い。昭和 40 年代以降は採光のために屋根の形状を変化させる手法は照明の進展により減少する。

評価軸

昭和 30 年代につくられる鉄筋コンクリート造の事務所は、戦後のモダニズムに影響を受けた建築である。

19 東亜バルブ(株)本社工場 尼崎市西立花町 5-12-1

① **事務所**：竣工年月日－昭和 15 年 構造・材質－木造、瓦棒葺き、モルタル塗 設計者－不詳 施工者－不詳

② **修理弁工場**：竣工年月日－昭和 37 年 構造・材質－鉄骨、鉄板葺き、ヴォールト状の屋根が連続する 設計者－玉置玉彦 施工者－柴田建設

③ **第三事務所・溶接工場**：竣工年月日－昭和 37 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 11 年に大阪で創業する太田工業商会在前身であり、輸入バルブを取り扱う。昭和 7 年には虫印バルブ製作所に改称、昭和 9 年に佃工場を建設し、昭和 15 年に立花工場が完成する。ここでは主に鋼板弁を製造した。戦時中には戦艦大和のバルブはここでつくられた。戦時中は佃工場とともにこの工場は海軍の管理工場となる。昭和 17 年に東亜バル

ブと名称変更する。戦後は市岡工場と佃工場が空襲により全焼するために、立花工場が生産拠点となる。昭和 26 年から本社機能がこの工場に移る。事業内容としては、各種バルブの製造販売および、メンテナンス事業である。供給先として原子力発電所や火力発電所、LNG 基地、石油化学、船舶などがある。

建築概要 竣工時は立花工場という名称であり、機械工場、木型工場、合金工場から構成され、合金工場には溶解炉が 4 基備えられていた。昭和 15 年の竣工時の建築としては、木造の第 5 事務所が現存する。現在内部は改装されていて、当時の面影のある部屋は 1 室しかない。昭和 37 年に建設された修理弁工場の屋根には、アーチ状の破風が連続し、その様子は工場という装置型建築の特徴を強調し、より象徴的に表現したものと捉えられる。また、このようなスタイルは昭和 30 年代に流行する鉄筋コンクリートによるシェル構造の影響を受けたものと推察できる。このような意匠が JR 東海道線側にのみ設置されている事実からは、列車からの視線、つまりは外観上の美を考えてのことだと思われる。ここに高度成長期前期という時期での、設計者の工場に対する美の意識というものをみることができる。

この工場を取り巻く環境は変化しており、昭和 57 年までは準工業地域であったのが、以降は住居地域に変更になり、工場施設の拡充が実質上不可能になった。このことからもうかがえるように、急速に尼崎市は工業都市から住宅都市へと推移している。

評価軸

修理弁工場の屋根でアーチ形が繰り返される外観は、工場建築における昭和 30 年代の流行を示す。尼崎市内ではほかにキューピーや関西ペイントでみられたが、この工場がもっとも洗練されたデザインによるものといえよう。

20 東洋精機(株) 尼崎市長洲本通 1-14-37

- ① **本館事務所**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造二階建、モルタル塗、腰壁スクラッチタイル貼 設計者－古塚正治 施工者－新井組
- ② **受付守衛室**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造二階建、モルタル塗、屋根塩焼瓦葺き 設計者－古塚正治 施工者－新井組
- ③ **旋盤工場**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造、トラス構造、屋根・外壁共に人造スレート、基礎腰壁はコンクリート造 設計者－古塚正治 施工者－新井組
- ④ **鑄造溶解工場**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造、トラス構造、屋根・外壁共に人造スレート、基礎腰壁はコンクリート造 設計者－古塚正治 施工者－新井組
- ⑤ **鑄造砂型工場**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造、トラス構造、屋根・外壁共に人造スレート、基礎腰壁はコンクリート造 設計者－古塚正治 施工者－新井組
- ⑥ **電気設備室**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造、トラス構造、屋根・外壁共に人造スレート、基礎腰壁はコンクリート造 設計者－古塚正治 施工者－新井組

会社概要 明治 41 年に大阪市上福島北町で田辺貫一が創業した松本鑄合資会社を前身とする。明治 44 年に大阪市西野田大開町に工場を移転し、翌明治 45 年に社名を東洋鑄に変更する。大正 6 年にわが国で最初に捺染用銅ロールの国産化に成功する。大正 9 年大阪伸銅所を併合し東洋鑄伸銅株式会社となる。海軍指定工場となり、型打鍛造品をはじめタービンブレード、ラジエータチューブを受注する。昭和 8 年以降陸軍向けに薬莖や砲弾の信管を製造する。昭和 14 年に尼崎市北大物町に鑄工場を建設した。同年長洲に新工場の建設に着手し、昭和 16 年に完成する。現在の本社工場である。ほぼ同時に私立東洋鑄伸銅青年学校を開校する。昭和 17 年に大阪市から尼崎市に本社を移転した。この時期の主な製品は、伸銅品、鑄造品、潜水艦や船舶の高圧弁や空気管などであった。昭和 19 年に社名を東洋精

機株式会社に変更する。戦後は真空ポンプを製作し、捺染用銅ロールの生産を再開させた。昭和 30 年以降高压バルブ製作に着手し、潜水艦や深海調査船などに搭載される。現在資本金 1 億円の規模をほこる中堅メーカーである。

建築概要 東洋精機の本社工場である。昭和 16 年の創設時の建築面積は 8.729 坪あった。竣工時の施設は、事務所・守衛室・大食堂・鋳造工場・圧搾工場・圧延工場・鍛造工場・機械工場・仕上工場から構成されていた。さらに付属する施設として、寄宿舎と青年学校がこの敷地の南側にあった。現在、当時の建築としては、本社事務所、受付守衛室、旋盤工場、鋳造溶解工場、鋳造砂型工場、の 5 棟がある。当時の建築配置の骨格は残るものの、近年改築がはじまっている。最初に調査をした平成 12 年 7 月の時期には、サイロのように積み上げたコンクリートの重みで水に圧力を与え、その水圧で金属を削る装置が 2 棟、残っていたものの、平成 13 年には解体撤去されている。

本社事務所は木造モルタル塗ながらも、外観上は鉄筋コンクリート造風の陸屋根にみえるように設計されている。一階は事務所で、二階は工場長室や会議室・貴賓室からなる。木構造であわせ柱や方杖が設置され、力学的に耐風を考慮したものになっている。このことは一階で観察できる。二階は腰板が廻る洋室になっており、天井のデザインもオリジナルのままである。

倉庫や工場は木構造で、トラスによって大空間を構築する。外観は太陽光を取り入れるために二つのレベルでの開口部を有するが、紡績工場のような北側採光に偏重しておらず、北面と南面の二面に向いている。扉は木製ながらも高さが 5 メートルはある大きなもので、当初のものである。

設計者の古塚正治は大正昭和戦前期に阪神間を中心に活躍した建築家で、代表作に宝塚ホテルなどがある。西宮に事務所を開設していた。尼崎市内では尼崎信用金庫の本社屋を昭和 5 年に完成させていた。施工を担当した新井辰一は古塚建築事務所の元所属員で、現在の新井組を創設した。

評価軸

事務所や守衛室も含め、竣工時の工場施設が多く残っている点や、著名な建築家・古塚正治の設計ということは、意義深いといえる。

21 東リ(株)伊丹工場(旧東洋リノリウム)

尼崎市猪名寺 1-29(半分は伊丹市東有岡 5-125)

① 旧本館事務所:竣工年月日—大正 9 年 2 月 10 日(棟札あり) 構造・材質—木造二階建、ハーフティンバー仕上げ 設計者—渡辺節(担当・野村理一) 施工者—鴻池組

② 乾燥室:竣工年月日—大正 9 年(昭和 12 年に増築) 構造・材質—鉄筋コンクリート造三階建、陸屋根 設計者—渡辺節(増築部分は小笠原建築事務所) 施工者—鴻池組

会社概要 明治 21 年に金沢市で寺西豊太郎が創業した由多加織の製造所を前身とする。由多加織とは豊太郎が研究開発した稲藁繊維による織物で、主に輸出用につくられた。明治 24 年に兵庫県伊丹町に移転し、寺西由多加織合名会社となる。この会社を母体に、大正 8 年に寺西福吉は山口銀行の山口吉郎兵衛らとともに、東洋リノリウム株式会社を設立した。設立の際にアメリカンリノリウム社からの技術指導を受けた。日本で最初のリノリウム製造会社で、大正 9 年に国産第一号リノリウムがつくられた。大正後期以降、わが国に数多く建設されるビルディングの床材として、ひろく採用される。丸の内ビルディングや住友ビルディングなど、戦前期の多くの建築で使用される。昭和 10 年にはリノタイル工場がつくられる。昭和 38 年厚木工場完成、現在にいたる。工場立地としては敷地西側の JR

福知山線から引き込み線が工場構内に引き入れられていた。

建築概要 旧東洋リノリウムの本社工場である。大正 8 年の創設時の建築が旧本館事務所である。ほかに乾燥室が残っている。この建築は大正 9 年に完成し、昭和 12 年に増築されたものである。大正 10 年当時は 16 棟から構成され、現存する旧本館事務所と乾燥室以外の多くの建築は煉瓦造であった。工場の全体計画はアメリカンリノリウム社の技師長・パーカーによる。

旧事務所は同じ敷地内で曳き屋されて、現在の位置に移った。現在は倉庫に用いられる。リノリウムのサンプルや会社の文書史料の保管庫になる。外観意匠の特徴は正面妻壁が木部が表しになったハーフティンバーというスタイルが採用されていることである。縦線が強調されたデザインで、その下端が見切りの水平材よりさらに垂れ、従来のスタイルを崩そうとしていることが読み取れる。その内部は一階にオーダーの付いた木製柱が二本設置される。開口部は上げ下げ窓が用いられる。玄関の庇の持ち送りはセセッションに影響を受けたデザインになる。渡辺節建築事務所の設計であった。

乾燥室は昭和 12 年に大阪の小笠原建築事務所による増築がなされている。外壁は擬石仕上げで、屋上はアールデコ調の照明器具がパラペット上に設置される。製品の積み卸し用に、戦前期のオーチス社のエレベーターが使用されている。

大正期の工場の全景図およびに設計図からは、この工場構内には数多くの煉瓦造の建物があったことが判る。それらも含め一式の設計が渡辺節の建築事務所で担われ、施工は鴻池組で担当された。

当初の施設全体を設計した建築家・渡辺節は、わが国で様式建築のもっとも巧みな建築家で、代表作に綿業会館や大阪ビルディングがある。20 世紀の日本を代表する建築家・村野藤吾を育てた建築家としても知られる。

評価軸

渡辺節設計による木造事務所が残っていることが今回の調査で判明した。内部のインテリアも当時の面影を残しており、歴史的な建造物と位置付けられる。

22 日本エアリキード(株)関西サポートセンター尼崎工場 尼崎市東難波町

① 旧事務所：竣工年月日－昭和 28 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造平屋 設計者－竹中工務店 施工者－竹中工務店

② 工場：竣工年月日－昭和 28 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建て 設計者－竹中工務店 施工者－竹中工務店

会社概要 明治 40 年に大阪で、フランスのエア・リキード社がわが国最初の酸素製造を開始する。昭和 5 年、エア・リキード社日本法人、帝国酸素株式会社を設立する。昭和 28 年、わが国最初の液体酸素工場を尼崎に開設する。昭和 56 年テイサン株式会社と社名変更する。平成 10 年、日本エア・リキード株式会社と改名する。JR 東海道線に接するという立地条件だった。

建築概要 昭和 28 年当初の工場施設は、旧事務所と工場、荷さばきのプラットホームの 3 ヶ所がある。旧事務所は半円状の曲面を有する形態であり、モダニズム建築の影響を受けたスタイルになっている。工場については、縦長の矩形窓が並び、上階にいくに連れてセットバックする形状が採用される。このような外観からはこの建物の設計思想が戦前期のモダンスタイルの延長線上にあったことを示す。戦後間もないという竣工時期からは、スタイルにおいて戦前期のものと明確に線引きをするような決定的断層がないことを表している、好例と考えられる。おそらくは設計者は戦前期のモダンスタイルと同じようなスタ

ンスでつくったものと捉えられる。竹中工務店の設計施工であるが、同社にはモダンスタイルを得意とした石川純一郎などの多くの建築家を擁していた。

評価軸

戦後のモダンデザインの建築として、今回の調査対象のなかでもっとも完成されたスタイルと評価できる。

23 日本スピンドル製造(株)本社工場 尼崎市潮江 4-2-30

- ① 事務所：竣工年月日－昭和 11 年 構造・材質－木造平屋建、屋根は寄棟 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② 第一工場(改築)：竣工年月日－昭和 37 年 構造・材質－鉄骨造二階建、屋根はスレート葺き、壁は鉄板貼り 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ 工場：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造二階建、ヴォールト屋根はスレート葺き、壁はスレート板貼り 設計者－不詳 施工者－不詳
- ④ 共同浴場：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－コンクリートブロック造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 創業は大正 7 年、大阪の浦江製作所からはじまる。生産が順調にいき、大正 9 年に新工場を建設する必要にせまられ、現在の旧小田村に神崎工場が設置される。ここに日本スピンドル製造所が生まれる。昭和 9 年、組織が株式会社になる。昭和 11 年窒化用特殊鋼の事業化がおこなわれ、以後航空機用の各種補器類が生産される。昭和 16 年に日本内燃機と合併し、軍需生産に比重が移る。昭和 17 年に大同製鋼に窒化鋼及びに窒化鋳鉄に関する工場設備を譲渡する。昭和 18 年尼崎製造所、陸海軍の共同管理工場に指定される。

終戦後、紡績機械の生産を開始し、昭和 24 年、再び日本スピンドル製造株式会社が設立された。業務内容としては高度成長期まではスピンドル、リング、フルーテッドローラーという紡績機械の三部品であったが、高度成長期終盤以降は、産業機器や集塵機、エアフィルターなどの環境機器、油圧機器、サッシやパネルといった建材にいたるまで、多様な分野にわたりものづくりをおこなっている。工場の立地状況をみると、当初 JR 福知山線が工場の西方で接していた。のちには工場敷地を拡張したことで、JR 福知山線が工場構内をとおるようになる。また引き込み線があって、貨車による原料や製品の輸送をはかっていた。

建築概要 現存する戦前期の建物としては事務所がある。妻壁上部がジャーマンキャットといわれる角を落とした屋根の形態となり、その軒は洋風意匠によって装飾された木製の持ち送りで支えられる。外壁は腰までスクラッチタイルが貼られる。いわゆる洋風のスタイルである。内部も当時の面影が残っており、入口すぐ脇に応接間が用意されている。

工場施設として戦前期までのものは現在、残っていない。当時の写真からは第一工場は木造で、北側採光の鋸屋根のある建築であったことがわかる。工場全体の姿は、昭和 6 年の工場写生図にみることができる。そこからは、北側採光の鋸屋根の木造工場から構成されていたことが窺える。

戦前期までの建設沿革をみると、大正 9 年の第一工場を嚆矢とし、大正 10 年に第二工場、大正 15 年に第三工場(研磨)、昭和 4 年に第四工場(フルーテッドローラー)・第五工場(スピンドル)、昭和 8 年に第六工場と鍛造第一工場、昭和 9 年に第七工場、昭和 10 年に第八工場(研究)・第九工場(リング)・第十工場(熱処理)・第十一工場(研磨)・第十二工場(研磨)、昭和 11 年に新事務所、昭和 12 年に窒化鋼工場、昭和 14 年に製鋼第二工場、というように年々その規模を拡大していった。

さて、現在東側の道路から見える工場群は、外観上は昭和 10 年代の工場建築に多かったスタイルと共通するものがあるが、実は昭和 30 年代に建設された工場である。越屋根がある切妻屋根の建築という形態は、高度成長期までの間に建設される工場建築の、典型的なスタイルといえる。ここでは南北の両方向から採光がとられるタイプになる。

また、コンクリートブロック造の社員用共同浴場がある。

戦後期の建設の沿革をみると、昭和 28 年に第 13 工場、第 14 工場、昭和 30 年に第 15 工場とガス浸炭炉、昭和 36 年に第 16 工場と新研究室・食堂、昭和 37 年に第 1 工場改築、と高度成長前期にそれまでの工場施設の更新がおこなわれる。その結果、現在にみるものになったが、同時に大正昭和戦前期の工場は失われた。

評価軸

この事務所は軒下に洋風意匠に基づく木製装飾が付けられており、現存する戦前期の尼崎工場事務所のなかでは美しいもののひとつといえる。

24 日本油脂(株)尼崎工場 尼崎市大浜町 1-56

- ① 精製硬化油工場：竣工年月日－明治 43 年 構造・材質－煉瓦造、棧瓦葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② グリセリン精製工場(原料部備品倉庫も含める)：竣工年月日－明治 43 年 構造・材質－煉瓦造、棧瓦葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ 汽罐室 1：竣工年月日－明治 43 年 構造・材質－煉瓦造、棧瓦葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ④ 汽罐室 2：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑤ 守衛室：竣工年月日－昭和戦前期までに完成 構造・材質－木造、下見板貼、棧瓦葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 43 年に英国のリバーブラザース株式会社によって、大庄村又兵衛新田に設置された石鹼工場を嚆矢とする。大正 2 年より工場の操業が開始された。この地が選ばれた理由は定かではないが、日本の低廉な魚油と旧満州地方の大豆油を原料に、硬化油・石鹼・グリセリンの製造をおこなった。主な工場設備の硬化油装置や石鹼製造設備、グリセリン精製設備などの機械類は英国から持ち込まれて開業した。大正 14 年に神戸瓦斯が日本リバーブラザース社を買収し、大日本石鹼株式会社と改称するものの、翌年ベルベット石鹼と改称される。昭和 12 年に日産傘下の日本食料工業と合併し、日本油脂株式会社となる。昭和 20 年に空襲で被災する。昭和 21 年生産再開され、工業用石鹼をも製造する。現在の主要製品は工業用油脂、油剤・化成品、食用油脂である。開設時は立地として大阪湾に直面し、運搬の船が入る専用の港まで設けていた。

建築概要 現存する明治 43 年時の建築は、精製硬化油工場・グリセリン精製工場(原料部備品倉庫も含める)・汽罐室の 3 つである。いずれもが煉瓦造の建家で、二層分、一部三層の階高を有する。イギリス積みによって煉瓦が積まれており、開口部廻りに角部がアールになった役物の煉瓦が配されている。小屋組は木製トラスである。これらの建築の設計者名は不詳であるが、イギリス人幹部技術者の社宅が神戸北野町に多い下見板貼・棧瓦葺き・煉瓦表しの煙突・サンルームといった、いわゆる異人館の特徴を備えたものであることから、明治期神戸に在住していたイギリス人建築家が設計を担当した可能性も考えられる。当時、神戸で活躍していたハンセルという建築家はその候補にあがるだろう。

操業開始時の工場配置図からは工場、倉庫、事務所、社宅、船溜などから構成されてい

たことがわかる。また創立時の鳥瞰図からは工場と事務所本館が煉瓦造で、タンクは鉄製、社宅や食堂、クラブなどの厚生施設は木造になっていたことが読み取れる。昭和 17 年の工場配置図からは、船溜が埋められて煉瓦タンク置き場に、新たに購入された南西方面の土地が潤滑油工場と、敷地面積が倍増していることがわかる。現在までにこの工場は 90 年近い歴史を有するが、その間に昭和 9 年の室戸台風と昭和 20 年の空襲と、二度にわたる被災を受け木造の建築は失われた。この工場の顔ともいえる、もっとも巨大な三階建て煉瓦造建築であった石鹼工場は平成 2 年に解体された。現在はその壁面の一部が残る。

評価軸

明治 43 年当初の煉瓦造の工場が複数、現存していたことが確認された。当初の形態をとどめる建築では尼崎市内の工場のなかで、もっとも古いものといえる。これらは歴史的な建造物であり、貴重なものと位置付けられる。

25 阪神電鉄・車庫工場(倉庫・変電所) 尼崎市北城内

① 倉庫(旧発電所)：竣工年月日－明治 38 年 構造・材質－煉瓦造、小屋組は鉄骨と木造
設計者－不詳 施工者－不詳

② 変電所：竣工年月日－昭和 11 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造 設計者－阪神電鉄営繕係 施工者－不詳 これは後(平成 17 年)に大林組施工と判明した。

会社概要 明治 38 年、大阪と神戸間を結んだ都市間連絡電気鉄道で、本社は尼崎に置かれた。この場所は旧尼崎城の堀に接する場所であり、尼崎の中心地という立地条件にあった。

建築概要 明治 38 年につくられたこの建築は、現在倉庫として用いられるが、当初は発電所であった。外観の特徴は妻壁に丸い窓が穿たれ、壁面に煉瓦の壁の凹凸によってデザインがなされている点にある。とりわけ帯状の梁型から下部に垂れ下がり、途中で切れた柱型は、明治末から大正期にかけて流行したセセッションとよばれるスタイルに影響を受けたものと考えられる。また、開口部はアーチの形状になり、柱型と梁型が交差する柱頭部が幾何学的な取扱になる。全体的にいえることだが、この時期のものと同様に柱型が表していることも付け加えておく。煉瓦はイギリス積みである。内部は後に増築がなされ、鉄筋コンクリート造の床がつくられているが、そのスラブを支える鉄骨の柱と梁には次のような刻印がみられた。ひとつは米国・カーネギー社、もうひとつはイングランド・DORMAN LONG AND MIDDLES BROUCH とある。

昭和 11 年につくられた変電所は鉄筋コンクリート造によるもので、現在は PCB などを保管する倉庫として用いられている。その外観は開口上部に大きなアーチの形状を用いるなど、大正後期から昭和初期に日本で流行する洋風の折衷主義に位置付けられるが、全体の構成からは表現派などの広義におけるモダンデザインの影響をもみることができる。

評価軸

ここで対象となったふたつの建物はともに電気関連の施設であって、現在は倉庫として使用されるに過ぎないが、尼崎の中心に近い場所であって、近代尼崎の都市風景を構成するランドマークであり、貴重な産業遺産として位置付けられよう。

26 古河電気工業(株)大阪事業所 尼崎市道意町 7-6

① 事務所：竣工年月日－昭和 13 年 構造・材質－木造二階建て、鋸屋根、スレート葺き
設計者－不詳 施工者－不詳

② 工場：竣工年月日－昭和 13 年 構造・材質－鉄骨造、鋸屋根、スレート葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 13 年に尼崎伸銅が吸収合併され、古河電気工業の大阪伸銅所として、スタートする。古河合名会社は大正 2 年に尼崎に鍊銅工場を建設していた。主要製造品目としては、銅、銅合金管・板、チタン溶接管、コイル管、被覆銅管、フィンチューブ、ヒートパイプナドガアル。この場所は東側に藻川が接し、船で接岸し原料を運搬した。

建築概要 昭和 13 年当初の工場施設は事務所と工場がある。事務所は木造二階建ての建築で、モルタル塗りシン仕上げの簡素な洋風のスタイルである。車寄せがあり、玄関床は御影石が敷かれるなど、戦前期の洋館のつくられかたを踏襲している。車寄せ天井の照明器具も当初のものが用いられている。内部は一階は事務所で二階は応接室や会議室などがある。工場は北側採光の鋸屋根で、鉄骨造である。北側の側窓はすべてガラス面になり、きわめて有効な採光手法が観察できる。東洋精機と同様なコンクリートの重みで高压の水をつくり出し、金属を掘削する装置があった。

評価軸

昭和 13 年当初の工場と事務所をそのまま使用している。工場は広大な面積を有する鉄とガラスの箱である。また、東洋精機の水圧掘削機が撤去された現在、唯一水圧掘削機を有する。

27 三菱電機(株)各事業所(伊丹製作所) 尼崎市塚口本町 8-1-1

- ① **本館事務所(C101)**: 竣工年月日－昭和 29 年(第二期は昭和 33 年) 構造・材質－鉄筋コンクリート造四階建、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② **中央研究所(D101)**: 竣工年月日－昭和 19 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建(一部竹筋コンクリート)、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ **無線機工場(B801.B301)**: 竣工年月日－昭和 15 年 構造・材質－木造二階建 設計者－不詳 施工者－不詳
- ④ **第一精器工場(C106)**: 竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑤ **変圧器・遮断機・板金・溶接工場(F322.F323.F324.F326.F327)**: 竣工年月日－昭和 17 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑥ **倉庫(F738.L714.L716.F717.L318.)**: 竣工年月日－昭和 15 年 構造・材質－木造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑦ **倉庫(L467)**: 竣工年月日－昭和 17 年 構造・材質－木造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑧ **工場(F325)**: 竣工年月日－昭和 36 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑨ **発電機室(F702)**: 竣工年月日－昭和 10 年代後半 構造・材質－木造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 15 年、三菱電機神戸製作所の分工場として、現在地で生産開始される。17 年大阪製作所として独立する。昭和 19 年伊丹製作所に改称、工場立地としては敷地西側の JR 福知山線から引き込み線が工場構内に引き入れられていた。

建築概要 構造面から 3 つに分類できる。第一は鉄筋コンクリート造、第二は鉄骨造、第三は木造、によるものである。第一のものは本館事務所、中央研究所、第一精器工場、があり、研究所は戦時中にもかかわらず鉄筋コンクリート造であることに驚かされる。ただし間仕切りの壁面は竹筋コンクリート造になっており、戦中の鉄不足の際のひとつの実験的試みと捉えられる。また、工場のなかでただひとつ、鉄筋コンクリート造が実現された

第一精器工場は、当時重要な施設と認識されていたことが考えられる。第二のものは外観上から、工場と認識されるスタイルの建築である。第三のものは材料倉庫が多く、発電所の上屋にも用いられている。

次にスタイル、デザインの側面からみると、鉄筋コンクリート造のものはモダニズム建築の影響を受けたものが多い。中央研究所は水平線をモールディング上の窓台と庇が強調する。本館事務所は一階から四階までとおして窓の面積の大きな建築が実現される。玄関には車寄せが付き、コンクリート打ち放しの造形的な屋根がかかる。第一精器工場は装飾を排除した簡素なもので、全体に共通して装飾を排除した建築になっている点を指摘できる。

評価軸

昭和 19 年という戦中に中央研究所が鉄筋コンクリート造で建設されていたことが、今回の調査であきらかになった。これは珍しい事例で軍事施設であれば理解できるが、民間工場の研究所にそのようなことが許された背景に、この研究所が軍事的にいかに関心を持って研究をしていたかが窺える。また、そこでは竹筋コンクリートも併用されており、貴重な歴史的建造物と位置付けられる。

さらにスタイルをみると、水平線を強調したモダニズムの影響を受けた建築になっており、興味深いものといえる。

28 三菱電線工業・尼崎製作所 尼崎市東向島西之町 8

- ① 工場：竣工年月日－明治 40 年 構造・材質－煉瓦造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② 旧研究室：竣工年月日－明治 40 年 構造・材質－煉瓦造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ ボイラー室：竣工年月日－明治 40 年 構造・材質－煉瓦造 設計者－不詳 施工者－不詳
- ④ 研究所：竣工年月日－昭和 11 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑤ ゴム練工場：竣工年月日－昭和 29 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑥ 変電室：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 9 年横浜電線大阪工場と古河鋳業尼崎工場を譲り受け、日本電線製造尼崎工場設立される。翌大正 10 年大阪西区境川にあった本店を尼崎へ移転する。昭和 39 年大日電線と合併し、大日本電線となる。昭和 61 年三菱電線工業に社名を変更する。業務としては巻線やケーブルの製造をおこなう。工場立地としては旧佐門殿川左岸から入り込んだ入堀に面する。

建築概要 現在、この構内には明治期の建築が 3 棟、昭和戦前期の建築が 3 棟、存在する。明治期のものはいずれもが煉瓦造の建築であり、判明した明治 40 年という建設の時期から考えれば、日本醤油時代の建築と推察できる。日本醤油は明治 40 年に設立されている。つまり、従来は火災で全焼したと伝えられていたが、おそらくは煉瓦の壁は焼け残り、その一部を修繕して新しく工場とし再利用したものと推測される。昭和戦前期のものをみると、研究所や変電施設は鉄筋コンクリート造で、事務所は木造でというように、その施設の重要度によって使い分けがなされていた。

工場施設建設の沿革をみる。大正 10 年に鉛板工場・ゴム工場、大正 11 年に色物塗料工

場、大正 14 年に局内ケーブル工場、大正 15 年にエナメル工場、昭和 5 年に撚線工場・食堂・事務所、昭和 9 年に事務所、昭和 11 年に電気試験場、昭和 12 年に研究部、昭和 13 年青年学校、昭和 28 年に通信ケーブル工場、昭和 32 年に電力ケーブル工場、昭和 33 年に超高压ケーブル工場、という歴史を有する。

明治 40 年の煉瓦造の建築はイギリス積みの壁を立ち上げ、屋根部分は木製トラス構造になる。工場については鋸屋根で北側採光をおこなっている。昭和 12 年の研究所は鉄筋コンクリート造二階建となり、階段手摺に少しアールデコの意匠が見受けられる。

評価軸

明治 40 年建設の煉瓦造建築をベースとして屋根などをつくりかえ、そのまま工場施設として使用されていることが、今回の調査で解明された。すなわち、火災で焼け残った建物の再利用という手法は、その方が安くつくという経済上からなされたものと考えられるが、実際に現在も使用されており、貴重な歴史的建造物といえる。

29 森永製菓塚口工場 尼崎市上坂部 1-1-1

① 旧工場(ビスケット工場・チョコレート工場)：竣工年月日－大正 10 年 3 月 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建(後に増築して四階建て)、陸屋根 設計者－不詳(工務部長・大久保鶴吉) 施工者－大林組

② キャラメル工場：竣工年月日－大正 13 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造平屋建、三角形屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

③ 食堂：竣工年月日－昭和 20 年代 構造・材質－木造、瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 32 年に東京に設立された森永西洋菓子製造所を母体に、大正元年に森永製菓株式会社となる。現在日本を代表する総合菓子メーカーである。大正 7 年に大阪鷺洲町大仁に、関西進出の最初の工場をつくるが、敷地の狭隘ゆえに拡大できず、塚口に土地を求め、大正 10 年に工場は完成する。ビスケット生産は大正 12 年からはじまる。現在も塚口工場は森永製菓の関西における生産拠点である。この工場の製造品目としては、ビスケット、チョコレート、キャラメルなどがある。立地として JR 福知山線塚口駅前に位置する。また阪急電鉄神戸線と敷地の北側で接する。

建築概要

1)ファクトリーガーデンという思想

大正 10 年に 8 万 5 千坪の敷地が得られた塚口に工場を完成させる。その時のコンセプトに「ファクトリーガーデン」という思想があって、新鮮な空気、新鮮な水、十分な食物、美観、の 4 つキーワードが掲げられた。その考えは「森永タウン構想」を生み、それにもとづいて工場の施設配置がなされる。それは「欧米の製菓会社に匹敵するだけの近代的生産設備」にくわえて、「従業員の住宅をはじめ運動場、病院、学校などの構成施設」も完備させるという特徴があり、実際にこの広大な敷地には倶楽部や食堂、寄宿舎、社宅などが設置されていた。このような住宅から福利厚生までがセットになった工場のありようは、昭和戦前期から高度成長期が終盤する昭和 50 年頃までの時期をとおして、日本における大規模な工場のひとつの類型として確実に存在した。そのような意味で塚口工場は先駆的なものであったことが指摘できる。

塚口工場建設にあたって、専務・松崎半三郎は外遊をおこなっており、イギリス・バーミンガム郊外のボーンビルの、キャドバリ・チョコレート工場を訪れている。この工場は社宅を工場まわりに配置し、いわゆる「田園都市」を具現化したものとして、大正期に

は世界的に脚光を浴びていた。その印象を松崎は次のように記している。「この工場の食堂は優に二千人位は収容出来た。其の他学校、病院、図書館、運動場等の厚生施設の完備は驚くばかり」とある。森永製菓の工場建設のコンセプトである「ファクトリーガーデン」という思想は、イギリスの田園都市運動に影響を受けたものであると判断できる。なお、塚口工場は森永製菓の最初の近代的な工場であり、その成果は3年後に建設に着手される鶴見工場に反映されることになる。当初、機械は松崎専務の外遊の折りに英国ベーカー・パーキンス会社より購入し、イギリス人技師・アッシュェルを招聘し英国流のビスケット生産技術を導入した。

なお、この広大な敷地は工場設置までは広田一族が所有していた。

2) 建築特徴

約80年間の歳月のうちに、解体撤去を含む大幅な増改築がおこなわれ、現存する当初の建物は、旧工場(ビスケット、チョコレート)、キャラメル²の2工場がある。まず、旧工場をみる。後の増築によって、現在は左右対称性が崩されているが、竣工時の写真をみると、左右対称になり、中央部にパラペットをひときわ高く立ち上げ、勾配の緩いペディメント風のものとする。この部分は現在も存在する。この部分の装飾は様式に由来するものではなく、壁に柱型風の凹凸を付けたもので、セセッション的な味わいが加味される。

当時、この建築は「米国スタイル」の立体式とよばれた。それは多層式の建物の上階に原材料を置き、製造工程を垂直にレイアウトする方式であった。そのことは大正14年に完成する鶴見工場が、採光や通風、機械配置・作業管理を重視した平屋造りの「ヨーロッパスタイル」を採用したことと対比的である。また、大正10年に完成していることから、尼崎市内のもっとも古い鉄筋コンクリート造建築といえる。着工は大正9年1月であった。

キャラメル工場は鉄筋コンクリート造の三角形の妻壁が外観上の特徴をなす。それは縦線の柱型に、三角形の屋根形に沿った斜めの梁型で構成される。共通して、柱型が外壁面に露出しているという特徴がある。

また、昭和60年頃までは、赤い屋根に車寄せの付いた木造洋風の事務所棟があった。現在、戦後の昭和20年代につくられた木造による食堂がある。なお、敷地内を輸送用のモノレールが敷設されている。

評価軸

大正10年に完成した工場が現在も使用されている。この工場は鉄筋コンクリート造によるものであり、尼崎市内で現存するもっとも古い鉄筋コンクリート造建築であり、セセッションというデザインに影響を受けたただひとつの建築でもある。

30 ヤンマーディーゼル・尼崎工場 尼崎市長洲東通1-1-1

① 旧青年学校(現製造施設・倉庫): 竣工年月日ー昭和10年代 構造・材質ー鉄筋コンクリート造三階建、陸屋根 設計者ー不詳 施工者ー不詳

② 工場1: 竣工年月日ー昭和10年代 構造・材質ー木造 設計者ー不詳 施工者ー不詳

③ 工場2: 竣工年月日ー昭和30年代 構造・材質ー鉄骨 設計者ー不詳 施工者ー不詳

会社概要 昭和11年に現所在地、旧川辺郡小田村長洲で山岡内燃機の本社および工場として創業する。前身は明治45年に大阪市北区で創業の山岡発動機工作所である。尼崎工場は世界初の小型ディーゼルエンジン生産工場であった。昭和15年山岡発動機工作所を併合し、昭和18年に本社を大阪市北区茶屋町に移す。昭和27年に社名をヤンマーディーゼルと改称する。尼崎工場では船舶用ディーゼルエンジンを主に製造する。工場立地としては敷地北側にはJR東海道線が敷設されていた。

建築概要 尼崎工場は空襲によって建屋の70パーセントが被災し、その結果戦前期の工場施設の多くが失われた。現在、創業時の建築としては工場と旧青年学校が存在する。工場は北側採光の鋸屋根の形態を有する木造工場で、小屋組もトラス構造になる。外壁はモルタル塗で、鋸屋根の妻部分は壁となるが、その下部は木製建具によるガラス貼りの壁面となる。この工場は作業効率も含め、そこで働く人に対する室内環境工学が日照という観点では考慮されていたことが読み取れる。つまり、昭和10年代には室内環境工学は建築のスタイルやプランを決定するということが、注目を浴びはじめるということが関連する。この工場は平面的にも相当規模は大きい。

旧青年学校は鉄筋コンクリート造の建築で、一階は生産施設が当初より組み込まれており、複合的な建築であった。屋上の階段室塔屋には丸窓が穿たれ、窓枠廻りにはボーダーがまわされ、戦前期モダニズム建築の特徴を示す。この建築はL型の平面を有する。その東側の壁は前面がガラス貼りになる。作業をおこなう工場には一定の均一な照度が必要とされることで、このような全面ガラス貼りという開口が採用されたものと理解されるが、柱が内側に控えて配置されていたということを見ると、それだけではなく、モダンスタイルということも意識された結果だろう。開口部はスチールサッシにより、滑り出しで開け閉めができるようになっていた。

戦後の建築としては昭和30年代にできた鉄骨造の建築があって、そのスタイルは戦前期の影響もある。巨大な鉄製のラチス梁で構築されている。

評価軸

今回の調査で、青年学校という名称の戦前につくられたモダニズムの影響を受けた鉄筋コンクリート造建築の存在があきらかになった。また、戦前期の巨大な木造工場が現役で使用されていることも発見できた。

31 (株)ユニチカ(旧尼崎紡績)記念館 尼崎市東本町1-50

ユニチカ記念館(旧本館事務所): 竣工年月日—明治33年 構造・材質—煉瓦造二階建、
棧瓦葺き 設計者—不詳 施工者—不詳

会社概要 明治22年に尼崎で設立される尼崎紡績が前身であり、明治42年製造の中心は尼崎から津守工場に移る。大正6年本店が大阪市に移る。大正7年に摂津紡績と合併し、大日本紡績となる。昭和44年にニチポーと日本レイヨンが合併し、ユニチカとなる。工場立地としては当時は埋め立てられていなかった大物川左岸と、左門殿川右岸に面し、船による運搬のほかに、JR福知山線から引き込み線が工場構内に引き入れられていた。

建築概要 建築特徴をみれば、総煉瓦造であり、二階の床と小屋組などの水平方向は木軸によって構成される。屋根は寄せ棟で棧瓦葺きとなり、煉瓦造の煙突が立ち上がる。現在はその上にモルタル塗となる。おそらくはこれは後世の改修によるものと推測できる。壁には上部がアーチの形となった開口部がうがたれ、窓は上げ下げ式となる。二階まで煉瓦が立ち上がる壁面の構成は、モールディング状のモルタルによって、二階のコーニス部分と、一階と二階の間のニヶ所で水平に分割される。煉瓦の積み方はイギリス積みが採用される。玄関部にはポルティコが設置される。このような特徴からは神戸北野町に多く残るコロニアルスタイルの異人館とも共通する側面があるが、より格式が高い外観となっている。つまり、大工場の事務所としての権威性が必要とされたと考えられる。全体的にイギリスの影響が強い建築であった。設計については、史料的制約もあって詳しくは判明しないが、大阪を拠点に明治期、数多くの工場建築を手掛けた茂庄五郎の可能性が高い。

この工場の建設はふたつの時期に分けられる。ひとつは明治24年に完成する第一工場、

明治 27 年に第二工場、明治 30 年に第三工場がつくられる。生産を担う工場がすべて完成した後の明治 33 年に、本社事務所、現ユニチカ記念館が完成する。第二の建設が集中するのは大正 4 年からはじまる杭瀬工場建設時である。本社工場に隣接して建設されるが、やがて合体する。杭瀬工場建設に伴い、創建時の工場群は解体されていく。最初の解体は大正 6 年の第一工場(存続期間 28 年間)にはじまり、昭和 7 年に第二(存続期間 40 年間)・第三工場(存続期間 37 年間)が取り壊され、明治期の赤煉瓦造の工場群は木造などの工場に変身した。これらの工場は昭和 20 年の空襲で大半の 8941 坪(延床面積)を焼失する。翌昭和 21 年には焼け残った寄宿舎を利用した縫製工場として再出発するものの、昭和 40 年に閉鎖され、その跡地はゴルフセンターとなる。唯一遺されたものが、ユニチカ記念館である。なお、現存する鉄筋コンクリート造のニチボー尼崎冷蔵倉庫は昭和 41 年に建設された。

評価軸

外観の赤煉瓦造、各室に暖炉が設置されるなど本格的な洋風による内部空間、と、尼崎の近代化を象徴する建築といえる。明治中期の事務所の形態をよくとどめるものとしてきわめて重要性は高い。

32 利昌工業(株) 尼崎市南塚口町 4-2-37

- ① **本館事務所**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造平屋建、外壁下見板貼、屋根鉄板瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ② **商品陳列所**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造平屋建、外壁下見板貼、屋根鉄板瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ③ **工場 1・2・3**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造平屋建、トラス構造、外壁下見板貼り、屋根鉄板瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ④ **倉庫 1・2・3**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造平屋建、トラス構造、外壁下見板貼り、屋根鉄板瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳
- ⑤ **高圧実験棟**：竣工年月日－昭和 28 年 構造・材質－木造二階建、トラス構造、一部下見板貼り、屋根鉄板瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 10 年に大阪で利昌洋行として電気絶縁材料の国産化を開始し、昭和 4 年に大阪市大仁に工場を設置する。昭和 10 年にフェノール樹脂積層板および棒・管の生産をはじめ。軍需景気を背景に積層板の需要が急増する。昭和 13 年に尼崎工場、当時の名称は塚口工場建設に着工し、昭和 16 年に第一期工事完成し、操業開始する。昭和 18 年尼崎工場第二期工事完成する。昭和 19 年海軍艦政本部、陸軍兵器本部、軍需省などの管理工場となる。昭和 21 年より生産再開する。フェノール樹脂積層板や石綿セメント板を主とするが、絶縁強化木、ポリエステル樹脂モールド計器用変成器などプラスチックを主要原料に多くの商品化に成功し、昭和 47 年には F R P 製のレジューハウスを製造販売する。昭和 50 年尼崎工場内にエポキシ樹脂モールドトランス工場が完成する。現在創立 81 年をむかえた。資本金 4 億 5 千万円のエレクトロニクス材料、半導体パッケージ、エポキシモールド変圧器、コンデンサの製造販売の中堅メーカーとし位置付けられる。

建築概要 利昌工業の尼崎工場である。昭和 16 年および昭和 18 年の二度にわたり工事がおこなわれ、敷地は 3 万 3 千平米、建家数 53 棟、延べ床面積は 2 万平米、ある。戦前期当時のものは、事務所、商品陳列所、工場 1・2・3、倉庫 1・2・3 の 8 棟がある。

注目すべきは昭和 28 年につくられた高圧実験棟であって、昭和 16 年と 18 年とにつくられた工場建築にあわせたスタイルになっている。それは下見板部分は黒色、その上部の壁および一階部分の壁は白、窓など開口部廻りおよびに建具は茶色と、それぞれ塗り分け

られている。メンテナンスも行き届いており、先年の地震でも被害を受けなかった。ここで取り上げた昭和 30 年頃までに完成する建築は皆、木構造で、トラスによって大空間を構築する。

工場や倉庫の多くは平屋建てであって、それらが織りなす工場の環境はヒューマンスケールを感じさせるものになっている。

評価軸

今回の調査で、戦前期につくられた多くの木造建築が工場や事務所として、ほぼ当初のままに使用されている点が解明された。個々の建築としてはけっして価値が高いとはいえないが、それらを群と見るときに、その価値が理解される。

33 アマテイ(株) 尼崎市西高洲町 9

① 工場：竣工年月日－昭和 39 年 構造・材質－鉄骨造、屋根はスレート葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

② 倉庫：竣工年月日－昭和 39 年 構造・材質－鉄骨造、スラブは鉄筋コンクリート造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 34 年に尼崎に開設された岸本製鉄所に遡ることができる。明治 44 年に岸本製釘所が尼崎に設立され、日本で第二の製釘工場となる。翌明治 45 年、尼崎向島に工場竣工する。大正 8 年住友伸銅所が岸本製釘所を引き継ぐ。大正 13 年魚津要太郎、住友伸銅所より製釘設備を譲り受け、合資会社尼崎製釘所を設立する。昭和 12 年組織が株式会社となる。昭和 16 年、岸本商店に伊藤忠、丸紅が合併し三興株式会社がつくられ、その一事業所となる。昭和 19 年三興、呉羽紡績、大同貿易が合併し、大建産業株式会社となる。戦後 4 社に分離、尼崎製釘所になる。昭和 44 年、アマテイ株式会社に社名を変更する。現在、世界最大の釘の生産量を誇る。この工場は旧左門殿川に通ずる運河に面し、船舶によって運搬することを立地に工場が設置された。

建築概要 昭和 4 年新工場が完成する。設計は神戸製鋼所の武部政雄技師であった。昭和 39 年 2 月の火災で工場や事務所などほとんどの建物が焼失した。その後工場、倉庫、事務所と建設されるが、ここでは工場 1 棟倉庫が調査時期に該当する。

34 アルナ工機(株)尼崎工場 尼崎市東難波町 1-4-5

工場：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造、鋸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 22 年京阪神急行電鉄によって、鉄道車輛の製造のために設立されたナニワ工機が前身である。昭和 45 年にアルナ工機に改称される。業務内容としては、鉄道車輛・路面電車、ステンレス・アルミ製品、保冷・冷凍バンボディ、乗物用窓枠・ドアなどの製造をおこなう。この場所は JR 東海道線に接するという立地で、引き込み線が敷設されている。

建築概要 昭和 22 年当時の工場が残っているのかどうかは不明である。北側採光の鋸屋根の鉄骨造の工場がある。会社案内によれば、昭和 36 年に日本で最初のハニカムパネル工場が建設されたとある。

35 岩谷瓦斯(株) 尼崎工場 尼崎市大高洲町 10

旧研究所：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 22 年に東京で設立される東洋貿易株式会社を前身とする。昭和 43 年社名を岩谷ガス工業に名称変更し、昭和 53 年に大阪の岩谷ガス工業を吸収合併する。昭和 60 年、富士瓦斯工業および大阪水素工業を合併し、社名が岩谷瓦斯となる。尼崎工場は大阪水素工業の工場として、昭和 33 年に設立される。平成 5 年尼崎テクノセンターが建設される。営業内容としては、エアガス・水素ガス・溶断ガス・特殊ガスなどの製造販売をおこなう。工場立地としては中島川右岸に接し、隣接するダイソーからガス製造原料の供給をパイプラインで受ける。

建築概要 ここで該当するものは旧大日本ソーダの研究所である。昭和 30 年代に建設されたもので、簡素ながらも、戦後のモダニズム建築の影響を受けたスタイルになっている。

36 大阪ガス(株)兵庫事業本部東阪神営業センター 尼崎市東難波町 5-29-50

① 倉庫(工場)：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造、鋸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

② 塀：竣工年月日－大正期 構造・材質－ブロック 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 45 年に設立された尼崎瓦斯が前身である。尼崎の資本家、渋谷佐平・中塚弥平らによって設立される。大正 9 年頃から需要が急増する。昭和 20 年大阪ガスと合併する。平成 2 年、天然ガスへの転換により供給を停止する。工場立地としては敷地北側に庄下川があった。

建築概要 北側採光の鋸屋根の工場建築が倉庫として転用されている。この建設は昭和 30 年代と考えられ、このようなスタイルはこの時期までの工場建築の典型的なものといえる。また、平成 2 年までは円形のガスタンクが設置されていた。明治 45 年当時の工場施設は残っていないが、敷地西側の塀に大正期のブロックが用いられており、それは現在のものに比べて、高さ・長さ・幅ともに遙かに大きなサイズとなる。

評価軸

大正期のブロックはほとんど残っておらず、貴重なものといえる。

37 大阪酸素工業(株)近畿管理センター 尼崎市南塚口町 4-3-23

工場 5(充填場)：竣工年月日－昭和 35 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造、壁は打ち放し仕上げ、屋根は鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 9 年に大阪市に開設される。昭和 24 年に尼崎工場建設、昭和 29 年に尼崎工場が拡張される。親会社は英国 BOC 社である。業務内容は酸素・窒素・アルゴン、または液化ガスの製造をおこなう。工場立地としては産業道路に面する。

建築概要 設備の沿革をみると、次のような状況であった。昭和 29 年に液化酸素製造装置を米国エアプロダクト社より輸入し、製造開始する。昭和 42 年に神戸製鋼所製の液化酸素製造装置を増設し、さらに昭和 45 年に神戸製鋼所製の液化酸素製造装置を増設、昭和 58 年に半導体用材料ガスの製造工場を設置する。昭和 63 年に BOC クライオプラント社製の液体窒素酸素製造装置を入れる。

ガス製造業は日々設備の更新があつて、上屋も残りにくい状況にある。昭和 39 年までに完成し、現存するものとして、充填場である工場 5 がある。

38 (資)大阪鑄鋼所(旧吉永鉄工所) 尼崎市長洲西通 1-9-1

① 事務所：竣工年月日－昭和 10 年 構造・材質－木造二階建て、屋根 S 型瓦葺き、外壁タイル貼り 設計者－不詳 施工者－不詳

② **工場**：竣工年月日－昭和 10 年 構造・材質－木造平屋建て、下見板貼り 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 6 年に大阪市毛馬町で創業され、戦時中は海軍の指定工場となる。艦船用の高温・高圧バルブを製造する。昭和 18 年に尼崎市の吉永鉄工所を買収して、神崎機械工場とした。戦後は神崎機械工場が本社となり、住友金属尼崎鋼管製造所の下請けならびに、阪神電鉄の車輛部品の製造をおこない、昭和 36 年以降は B T A 方式およびにガンドリル方式の深穴明け加工と金型加工をおこなう。

建築概要 事務所は一見、長屋風の形状であるが、意匠面では次のような部位で洋風化の影響を受けている。屋根は S 型瓦葺きで、スパニッシュスタイルの要素を持つ。外壁はタイル貼りとなる。内部の造りはカウンターがあって、戦前期の小規模事務所建築の特徴を示す。工場はトロッコの引き込み線が入り込み、木造の小屋組はトラス構造になる。壁は下見板貼りである。

評価軸

戦前期の工場と事務所が現存し、戦前期までの小規模工場のひとつの典型例をみることができる。

39 川上塗料(株) 尼崎市塚口本町 2-41-1

① **事務所**：竣工年月日－昭和 11 年(平成 12 年解体) 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

② **新合成樹脂塗料工場**：竣工年月日－昭和 38 年 構造・材質－鉄筋鉄骨コンクリート造三階建て、屋根はヴェールト状鉄板瓦棒葺き 設計者－不詳 施工者－日産建設

会社概要 明治 34 年に創設者・川上保太郎、国産初のエナメル・ワニス製造に着手する。明治 43 年に大阪市西成区で川上塗料製造所を設立する。昭和 9 年の室戸台風で新工場予定地の堺の工場敷地が流出してしまったことにより、立花村塚口に総合塗料工場を建設する。工場予定地は尼崎産業道路に面しており、これからの利便性が期待できた。昭和 11 年の工場完成時に本社がここに移される。大和田にあったワニス工場もここに集約される。戦後は合成樹脂塗料の開発研究に着手、東京工場が設置される。次いで千葉工場も設置される。現在、創業 101 年目をむかえる。

建築概要 竣工時の写真からは事務所を中心に、多くの工場や倉庫から構成されていたことがわかる。事務所は矩形の開口部の簡素なスタイルであった。ここで対象となる合成樹脂塗料工場は屋根の形状がヴォールト状の形態であり、鉄板瓦棒葺き仕上げとなる。これは万が一に製造中に爆発しても、上部に吹き抜けさせるためのものである。

40 関西電力(株)尼崎第三発電所 尼崎市末広町 2-16

尼崎第三発電所：竣工年月日－昭和 38 年 構造・材質－鉄骨造 設計者－関西電力設計組織 施工者－間組

会社概要 昭和 14 年に発足した日本発送電株式会社を母体とするが、遡れば明治 20 年に設立の神戸電灯や明治 21 年に設立の大阪電灯がある。尼崎にはかつては 4 つの発電所があった。尼崎第一発電所は昭和 8 年から昭和 49 年まで、尼崎第二発電所は昭和 11 年から昭和 51 年まで、発電し続けた。尼崎第三発電所と尼崎東発電所は平成 14 年 3 月に閉鎖される予定である。

建築概要 尼崎第三発電所はわが国最初の原重油専焼火力発電所であった。延床面積は 2,588 m²で、工費は 9887 万円であった。

41 関西熱化学(株)(旧尼崎コークス) 尼崎市大浜町 2-23

① 旧本社事務所：竣工年月日－昭和 35 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造 4 階建て、コンクリート打ち放し 設計者－竹中工務店 施工者－竹中工務店

② 鉄塔：竣工年月日－大正期 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳 ※調査後に撤去

会社概要 昭和 31 年に尼崎コークス工業株式会社が設立する。三菱化成工業、神戸製鋼、尼崎製鉄の 3 社の出資によりつくられる。旧尼崎製鉄の既設 41 門日鉄式コークス炉で操業開始される。日本で最初の鉄鋼・化学・都市ガスの連携によるコンビナートの、中核をなす企業であり、最盛期には年間生産量は 400 万トンに達した。しかし、都市ガスの LNG 化や微粉炭混入によるコークス比の激減により、高度成長終盤期の昭和 47 年の第一号コークス炉廃止以来、次々と各コークス炉は廃止されていく。それに伴い付随する施設も撤去され、現在は事務所関係の建物が残るだけである。工場立地としては北掘運河があった。

建築概要 昭和 40 年までに建設されたもので現存するものは、旧本社事務所のみである。そのほかに大正期の鉄塔があったが、調査に訪れた際に解体をおこなっていた。昭和 31 年以降にいかにつくられていったのかをみる。昭和 32 年の第二号コークス炉完成以来、昭和 34 年に第三号コークス炉、昭和 36 年に第四号コークス炉、昭和 39 年に第五号コークス炉、昭和 41 年扇町第一号コークス炉、というように生産施設を次々と拡張していく。そのような右肩上がりの経済成長は、昭和 47 年の第一号コークス炉廃止以降は、逆方向に向かい始める。尼崎コークスの場合は昭和 43 年以来、加古川工場に生産のシフトが移されるという事情もあった。さらに昭和 46 年以降は尼崎公害対策第一期工事が完成し、尼崎でこれ以上生産施設の拡大は困難という状況もあった。第一号コークス炉が昭和 47 年に、第二号・第三号コークス炉が昭和 50 年、第四号・第五号コークス炉が平成元年、扇町二・三炉が平成六年、と廃止され、それに伴い付随する施設も撤去され、現在は事務所関係の建物が残るだけである。

旧本社事務所は鉄筋コンクリート造で、鉄筋コンクリート打ち放しが戦後最初に流行した時期のスタイルを有する。それはエントランスの庇の先端が上部に跳ね上がる点などに顕著に見られる。

42 関西ペイント(株) 尼崎工場 尼崎市神崎町 33-1

① 研究所(旧技術本館)：竣工年月日－昭和 31 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建 設計者－日建設計工務 施工者－竹中工務店

② 倉庫：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造、屋根がシェル構造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 7 年に尼崎市神崎に関西ペイント設立。大正 15 年国産初のラッカー「セルバ」を発売する。現在の業務内容としては、各種塗料の製造販売をおこなう。立地として神崎川右岸に位置し、船による原材料の運搬がおこなわれていた。

建築概要 昭和 30 年代に描かれた鳥瞰図からは多くの施設が存在したことが読み取れる。木造や煉瓦造など様々な構造・スタイルの建築から成り立っていた。現在は大正・昭和戦前期につくられた建造物は残っていない。現存するなかでもっとも古いものは、昭和 31 年に建設された研究所である。鉄筋コンクリート造建築の研究所は水平連続窓を配したモダニズム建築である。また、屋根がシェル構造の鉄筋コンクリート造倉庫も、昭和 30 年代につくられたもので、モダニズムの影響を受けた建築である。

43 (株)神崎高級工機製作所尼崎工場 尼崎市長洲西通 1-5-1

① 工場 1: 竣工年月日－昭和 20 年代 構造・材質－木造 設計者－不詳 施工者－不詳

② 工場 2: 竣工年月日－昭和 20 年代 構造・材質－木造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 22 年尼崎に神崎高級工機工作所の本社工場として設立される。山岡内燃機社(現、ヤンマーディーゼル)が 100 パーセント出資した系列会社としてつくられ、当初は戦争で被災した工作機械などの修理をおこなう。翌昭和 23 年からは歯車およびに船舶用クラッチの生産を開始する。

建築概要 創業時は 3 棟の木造建家と 2 階建て事務所と、社宅からなった。現在も当時の工場が 2 棟残る。

44 (株)神崎高級工機製作所・本社工場 尼崎市猪名寺 2-18-1

① 食堂: 竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－木造平屋、切妻鉄板葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

② 工場 1: 竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－木造、鋸屋根、壁はスレート板 設計者－不詳 施工者－不詳

③ 工場 2: 竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－木造、切妻屋根、壁はスレート板 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 22 年尼崎に設立の神崎高級工機工作所の伊丹工場として、昭和 35 年に現所在地に設置される。当初は歯車専門工場であった。この敷地にあった山恵鑄造の建物をそのまま転用した。工場立地としては藻川右岸に位置する。

建築概要 創業時に山恵鑄造時代の建物をそのまま使用した。山恵鑄造は昭和 10 年代に工場を建設していた。この時期の建物で残っているものは、食堂と、鋸屋根の工場、切妻屋根の工場の 3 棟である。平成 7 年の地震で木造洋風二階建ての旧事務所(開発棟)が半壊した。食堂はトラス構造により大空間を実現している。木でつくられた工場の構築の手法が用いられている。

45 キューピー (株) 伊丹工場 尼崎市猪名寺 3-4-1

マヨネーズ工場: 竣工年月日－昭和 35 年 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建、ヴォールト屋根 設計者－東海興業 施工者－東海興業

会社概要 大正 8 年に東京中野で設立される食品工業を前身とし、大正 14 年キューピーマヨネーズの製造を開始する。昭和 32 年、社名をキューピー株式会社に変更する。尼崎の伊丹工場は昭和 13 年にジャム製造などを目的として建設される。工場立地としては産業道路に面する。

建築概要 昭和 13 年当時の建築は改築によって現存しない。もっとも古いものは、昭和 35 年につくられたマヨネーズ工場である。屋根の形状がヴォールト屋根になっている点に特徴がある。この時期の工場建築に流行して表れるスタイルのひとつである。

46 キンセイマテック(株)尼崎工場 尼崎市元浜町 1-94

事務所: 竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－木造平屋、屋根寄せ棟、瓦は茶褐色 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 14 年大阪で金生海運商会在設立される。昭和 19 年金生興業合資会社と改称し、業務を溶剤業と変える。昭和 41 年尼崎精錬所を設置する。昭和 45 年尼崎工場に改称する。業務内容は主に窒素原料の珪酸ジルコニウム乳濁剤の製造である。立地条件とし

ては北掘運河に近接する。

建築概要 キンセイマテックの尼崎工場の敷地には、昭和 41 年に工場が設置される以前にすでに別のメーカーである、尼崎鉄鋼興業株式会社の工場や事務所などがあって、キンセイマテックはその建家を引き継ぐ。工場はその後改築されたが、事務所は既存の建物をそのまま、現在も使用する。事務所建築は洋風の屋根が設けられ、簡素な洋風スタイルと位置付けられる。戦後、昭和 40 年頃までの建築が戦前期の、とりわけ昭和 10 年代に一般化する簡素な洋風意匠を引き継いでいたことが窺える。

47 クリオン(株)大阪工場 尼崎市西向島町 252

製造工場：竣工年月日－昭和 38 年 構造・材質－鉄骨、外壁・屋根ともに人造スレート貼り 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 37 年に設立された日本シポレックス工業株式会社を母体とする。同社は旭硝子株式会社と大日本インキ化学工業株式会社が、スウェーデンのインターナショナルシポレックス AB 社から、軽量気泡コンクリート「シポレックス」の製造技術を導入し、つくった会社である。翌昭和 38 年、尼崎工場でシポレックスの生産販売を開始する。平成 12 年に小野田エー・エル・シー株式会社に合併され、クリオン社と名称が変更される。この工場の敷地には以前は旭硝子の工場があった。事業内容としては、エー・エル・シー、すなわち軽量気泡コンクリート板の製造である。

建築概要 昭和 38 年当時つくられた建築が現在もほとんどそのまま、使用されている。製造工場のなかに、気泡を入れた軽量コンクリート板をオートクレーブする圧力用容器が 7 つある。両開きで長さが 28 メートルある。工場屋根は北側採光である。従業員の食堂や休憩所が鉄筋コンクリート造でつくられていた。

48 シオエ製薬(株)尼崎工場 尼崎市潮江 3-1-11

① **旧事務所**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造二階建、S 型瓦茶褐色、スタッコ壁 設計者－不詳 施工者－不詳

② **工場**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造、トラス構造、屋根スレート葺き、鋸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

③ **倉庫**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造、トラス構造、屋根スレート葺き、ジャーマンキャット風の屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 12 年大阪道修町で創業する。和漢薬の販売開始し、明治 33 年に製薬所を設置し、日本薬局方医薬品の製造販売を開始する。大正 13 年に黒石商会を設立し、昭和 16 年に尼崎に工場設置する。昭和 35 年に日本新薬株式会社との業務提携をおこなう。昭和 51 年、工場の所在地である潮江の地名にちなみ、シオエ製薬株式会社に社名変更する。業務内容は主に殺菌消毒薬をつくる。立地として JR 福知山線が近接する位置にある。

建築概要 旧事務所棟は現在は研究棟として用いられているが、S 型瓦茶褐色、スタッコ壁により、スパニッシュスタイルの影響が窺える洋館である。また、丸窓が填りモダニズム色も表れている。工場は鋸屋根で北側採光になる。倉庫は切妻屋根で換気のために越屋根がつく。

評価軸

工場事務所にスパニッシュスタイルが採用された事例は珍しく、そのような意味では歴史的建造物といえる。

49 昭和精機工業(株) 尼崎市塚口本町 5-3-1

① 食堂：竣工年月日－昭和 10 年代 構造・材質－木造平屋、切妻鉄板葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

② 工場：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造三階建て 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 12 年に昭和精機は精密機械器具製造を目的に創業する。当初は小型旋盤の製作をおこない、次いで航空機・発動機などの部品生産をにない、昭和 14 年に住友金属工業のグループ子会社となる。戦後昭和 22 年より、ヤンマーディーゼル社と資本提携し、小型船舶用ディーゼルエンジンを製造する。昭和 25 年プラスチック用金型の製作をおこない、精密鑄造用金型を製造する。平成 12 年にエンジン事業はヤンマーディーゼルに営業譲渡する。平成 13 年株式会社アークのグループに入る。現在、総合金型メーカーとして製造をおこなう。工場立地としては敷地東側には JR 福知山線が敷設され、敷地の西側には産業道路がある。

建築概要 食堂は唯一、戦前期の建築であり、木造である。工場は鉄筋コンクリート造二層に鉄骨造の三階部分のがせられるという構造になっている。一階は縦長の開口部だが、二階は横長窓になる。さらに三階部は完全に繋がった水平連続窓が実現されている。これは戦前期のモダニズムが昭和 30 年代までは影響を与えていたことを示すものと考えられる。

50 白石工業(株)本社 尼崎市元浜町 4-78

① 倉庫(旧事務所)：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造、モルタル塗 設計者－不詳 施工者－不詳

② 倉庫 1(旧工場)：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造、下見板貼り、鋸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

③ 事務所：竣工年月日－昭和 30 年 構造・材質－鉄骨二階建て、外壁は石綿スレートにペイント仕上げ 設計者－大成建設設計部 施工者－大成建設

会社概要 明治 42 年に創業の白石兄弟商会にはじまる。白石式軽微性炭酸カルシウム製造法を完成させ、当初は歯磨用を主としたが、大正 3 年にゴム工業用のものを開発し、大正 8 年に株式会社となる。昭和 2 年に白艶華の製法特許を得て、昭和戦前期の段階でわが国有数の炭酸カルシウムメーカーとなる。戦後は昭和 25 年に尼崎に本社と研究所を設置、昭和 30 年に消費地工場として尼崎工場が建設される。業務内容としては、ゴム・プラスチック用、ペイント・インキ用、製紙用、シーライト用、の炭酸カルシウムの製造業である。立地条件としては武庫川左岸に面する。

建築概要 戦前期の建築としては旧工場と旧事務所がある。戦前は本社ではなく、白石工業の社宅と工場がこの場所にあった。旧工場は北側採光の鋸屋根で、旧事務所は車寄せが付いた建築である。一方、戦後期の建築としては、昭和 30 年に完成する鉄骨造の事務所があって、装飾を排除したスタイルで、戦後間もないころの簡素なモダニズムの建築といえる。本社事務所の前庭には創業者の銅像がある。

評価軸

事務所建築は鉄骨造によってつくられており、戦後のモダニズム建築の大半が構造として鉄筋コンクリート造を採用するなかで珍しいものといえる。

51 住友鋼管(株)大阪事業所(旧日本パイプ製造) 尼崎市東塚口町 2-4-65

倉庫：竣工年月日－昭和 15 年 構造・材質－木造平屋、下見板貼り 設計者－不詳 施

工者－不詳

会社概要 明治 44 年に千葉県市川市で電線管の製造を開始する。大正 7 年冷間引抜鋼管の製造を、大正 15 年住友金属工業と資本技術提携をおこなう。昭和 15 年に尼崎工場が完成し、操業をはじめ。11 年に住友鋼管株式会社と社名変更する。工場立地としては敷地西側の JR 福知山線から引き込み線が工場構内に引き入れられていた。また産業道路に面する。**建築概要** 現存するものは木造倉庫がある。屋根は木製トラス構造によるものである。

52 住友ベークライト(株)尼崎工場 尼崎市東塚口町 2-3-47

① **倉庫**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建 設計者－不詳 施工者－不詳

② **危険物倉庫**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造平屋 設計者－不詳 施工者－不詳

③ **電気室**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄筋コンクリート造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 13 年、住友化学工業株式会社と日本ベークライト株式会社が合併し、合成樹脂工業所が設立される。その最初の工場として、昭和 15 年に塚口工場の工場建家が完成する。昭和 19 年に住友化工材工業となる。翌昭和 20 年日本加工材工業となる。昭和 30 年に住友ベークライト株式会社となる。業務内容としては、塩化ビニル樹脂成形材料シートや包装用複合シート、エンブラ成形材料フィルムなどの製造で、反応を伴わない樹脂加工が主である。この場所は前面が産業道路に面する。また裏面が JR 福知山線に接するという立地条件だった。

建築概要 昭和 15 年当初の工場施設は現存しない。平成 7 年の地震時までは事務所棟が使用されていたが、被災を受け、平成 8 年に建て替えられた。旧事務所は木造二階建て、壁はモルタル塗の棧瓦葺き屋根の建物であった。この工場の建築用材は住友化学新居浜製造所の不要品の転用であった。

ここで対象となる昭和 40 年までの建築としては、倉庫、危険物倉庫、電気室がある。いずれも鉄筋コンクリート造であり、柱型が外壁面に表れている。化学工場は技術革新が激しく、生産のシステム変更に伴い工場の設備が日々更新されるために、建物としては残らず、それに対して事務所や倉庫、変電設備はその内容の変化がより軽微なものであったから、残ったとみることができる。

53 第一電工(株) (旧尼崎工場) 尼崎市猪名寺 2 丁目

① **伸線工場**：竣工年月日－昭和 30 年代後半 構造・材質－鉄骨造 設計者－不詳 施工者－不詳

② **塗装工場**：竣工年月日－昭和 30 年代後半 構造・材質－鉄骨造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 21 年に新潟県妙高高原で創業の第一電工が、昭和 35 年に尼崎に設置した工場である。この工場では銅を延ばし伸線を製造していた。平成 11 年に尼崎工場は閉鎖され、その機能は滋賀県の信楽工場に移転し、現在は建家が残る。

建築概要 尼崎では伸線工場と塗装工場がある。いずれもが鉄骨造の建築である。

54 大陽東洋酸素(株) 尼崎営業所(旧尼崎工場) 尼崎市元浜町 1-95

プラットフォーム：竣工年月日－昭和 32 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－

不詳

会社概要 昭和 21 年に設立された大阪の大陽酸素を前身とする。昭和 32 年尼崎工場が開設される。平成 7 年に東京を拠点とする東洋酸素と合併し、大陽東洋酸素株式会社となる。東洋酸素は大正 7 年に東京で設立される。工場立地としては北堀運河に近接する。

建築概要 敷地は 5346 坪あり、そこに事務所 15 坪、発生器室 15 坪、充填工場 45 坪、カーバイト工場 30 坪、倉庫 9 坪から構成された。尼崎工場は昭和 30 年代初頭の鉄鋼業の好景気のなかで、アセチレンは需要が伸びる。事務所以外は昭和 30 年代の工場施設が残る。スタイルとしては簡素なものである。

55 高田香料(株) 尼崎市塚口本町 7-22-2

① **事務所**：竣工年月日－昭和 30 年代後半 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

② **工場**：竣工年月日－昭和 30 年代後半 構造・材質－鉄筋コンクリート造二階建て、陸屋根 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 10 年に創業者・高田亀治郎が子息・高田正二とともに高田香料工業所を創設する。まず製菓用香料を発売し、次にエッセンスを製造する。亀治郎はカナダで、正二はブリテッシュコロンビア大学で応用化学を専攻した。昭和 26 年に株式会社に改める。翌昭和 27 年、乳化香料の製造技術を開発し、コロイド系商品を発表する。昭和 34 年噴霧乾燥法粉末香料の製造技術を開発し、ドライコート系商品を発売する。

建築概要 竣工時の工場や事務所は改築され、残存しない。現在の事務所と工場は昭和 30 年代後半から昭和 40 年代前半につくられたもので、この時期に多かったスタイルを有し、モダニズムの影響を受けたものになっている。

56 (株)棚橋工作所 尼崎市久々知西町 2-2-32

① **事務所**：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造二階建、下見板貼り 設計者－不詳 施工者－不詳

② **工場 1**：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造、下見板貼り 設計者－不詳 施工者－不詳

③ **工場 2**：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造、下見板貼り 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 2 年に神戸市兵庫区東出町で船舶機器製造業として操業する。昭和 12 年に事業拡大のために尼崎市に移転、合名会社となる。昭和 14 年に株式会社となり、現在にいたる。業務内容としては、最初は捕鯨船の蒸気バルブを製造し、近年は冷凍船のバルブを、また、水力・原子力・火力の各発電用の高圧バルブの製造をおこなう。

建築概要 昭和 12 年に現所在地に工場を設立するが、建物はそれまでにすでにあつた既存の工場施設を使用した。その建物が事務所と工場 2 棟である。工場は北側採光の鋸屋根になっている。外壁はペイント仕上げがなされていない、下見板貼りの外壁を示す。

評価軸

外観上からは、戦前期までの木造工場のイメージを尼崎市内の工場のなかでもっとも強く残したもののひとつと判断できる。

57 (株)谷坂鉄工所本社 尼崎市長洲西通 1-9-16

① **工場事務所**：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造二階建、モルタル塗 設計

者－不詳 施工者－不詳

② 工場：竣工年月日－昭和戦前期 構造・材質－木造二階建、下見板貼 設計者－不詳
施工者－不詳

会社概要 大正 3 年に尼崎で創業し、昭和 3 年以来、伸線機および減速機の製造に従事し、昭和 28 年に谷坂電機製作所と合併し、株式会社組織となる。現在、製品として、伸線機、製釘機、ローリングマシーン、潤滑オイルのクリーニングリサイクル装置、ヘッダー、鬼針機、浪付機、薄板亜鉛メッキラインなどがある。立地としては住友金属と近接する場所に位置する。

建築概要 昭和 40 年以前の建築としては、工場と工場事務所がある。ともに木造二階建ての切妻屋根で、工場は下見板貼り、事務所はモルタル塗仕上げとなる。

58 日亜鋼業(株)本社工場 尼崎市中浜町 19

工場：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 明治 41 年に尼崎で田中亜鉛鍍金工場が創立する。大正 7 年平浪板合名会社の事業を継承し、日本亜鉛鍍として発足する。昭和 10 年日本亜鉛鍍鋼業に改称、昭和 16 年日亜製鋼第三工場として、二次製品専門工場となる。昭和 27 年日亜製鋼より分離独立し、日亜鋼業として新発足する。現在は新日本製鐵の直系会社とし、その業務内容は普通線材、鋳螺・丁番、特殊線材、亜鉛鉄板製品を製造する。工場立地としては北堀運河に面する。船舶による原材料の運搬がおこなわれていた。

建築概要 日亜鋼業本社工場とは、昭和 16 年につくられた日亜製鋼・尼崎第三工場を母体とするが、この工場は現在改築されて存在しない。この工場は亜鉛鉄板製造工場であった。昭和 30 年代につくられた鉄骨造工場がある。採光は壁面の水平連続窓からおこなわれている。

59 日新製鋼(株)尼崎製造所 尼崎市鶴町 1

① 工場(製品倉庫・造管工場)：竣工年月日－昭和 9 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳
施工者－不詳

② 工場(造管工場)：竣工年月日－昭和 13 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 昭和 9 年に、日本亜鉛鍍の尼崎工場として発足する。昭和 14 年日亜製鋼に社名変更する。昭和 34 年に日本鉄板と日亜製鋼が合併し、日新製鋼が成立する。日本亜鉛鍍は明治 41 年に尼崎で発足する田中亜鉛鍍金工場が前身である。大正 6 年田中亜鉛鍍金工場は平浪鉄板鍍金を設立し、翌 7 年には日本亜鉛鍍設立され、平浪鉄板鍍金の事業一切を吸収する。当初は帯鋼を生産したが、昭和 30 年代後半には、従来の平炉・帯鋼といった旧設備を廃止し、特殊連続亜鉛めっき設備、連続塗装設備、帯鋼亜鉛めっき設備を新設し、熱間部門から加工部門へと変身をはかる。昭和 57 年からはステンレス鋼管の専門工場となる。工場の立地としては中堀運河に面し、船舶による運搬をおこなった。

建築概要 戦前期の工場は次のようにつくられていく。昭和 9 年に尼崎工場が完成し、亜鉛鉄板製造設備が備えられる。昭和 10 年帯鋼工場が完成する。昭和 12 年に第二帯鋼工場が、昭和 13 年に一号平炉、二号平炉、帯ブリキ工場、溶接鋼管工場、8 トン電気炉、みがき帯鋼工場、昭和 15 年に鋼片工場が、というような建設の様態であった。すなわち、昭和 13 年には平炉熱延帯鋼の一貫生産工場となる。

戦後、地盤沈下により敷地全体が沈み、そこにジェーン台風が来て、水没するなどの被

害を受けた。その結果、各工場はジャッキアップされ、新しくつくられた巨大なコンクリートの基礎の上に乗る。戦前期につくられた工場は製品倉庫と造管工場 2 棟が現存する。いずれも鉄骨造の建築である。大空間を支えるために鉄骨柱は巨大なラチス梁になる。昭和 13 年につくられた造管工場は越屋根状の南北採光の形態をとる。

60 日本鍛工(株)尼崎工場 尼崎市大浜町 2-1

① **事務所**：竣工年月日－昭和 16 年 構造・材質－木造二階建て、半地下付き 設計者－不詳 施工者－銭高組

② **鍛造工場**：竣工年月日－昭和 30 年代 構造・材質－鉄骨造、鋸屋根、スレート葺き 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 13 年に大阪で創業の恩加島鉄工所を前身とする。昭和 12 年に日本鍛工設立、創始者・紫柳新二は久保田鉄工が尼崎に開設した関西製鉄の初代専務をつとめた。昭和 16 年に尼崎工場建設される。昭和 23 年尼崎工場は西日本鍛工になる。昭和 29 年に日本鍛工に名所変更される。業務内容としては、自動車部品が主でエンジン、トランスミッション、シャーシ、クランクシャフトなどである。立地条件としては

建築概要 昭和 16 年につくられた当初の工場施設の多くが失われている中で、事務所は唯一当時のものである。その建築特徴は柱だけが鉄筋コンクリート造の半地下になり、その上に木造二階建て建物が乗る。外壁はモルタル塗、寄せ棟で鉄板瓦棒葺きとなる。内部の階段には流線形をした手摺が付けられ、アールデコの影響が窺える。

評価軸

この事務所は鉄筋コンクリート造による半地階と、木造による一階・二階という珍しい構造を有する。

61 日本ヒューム(株) 尼崎市丸島町 32

① **事務所**：竣工年月日－昭和 34 年 構造・材質－木造平屋、モルタル塗 設計者－不詳 施工者－不詳

② **パイル工場**：竣工年月日－昭和 35 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳

③ **PS 工場**：竣工年月日－昭和 35 年 構造・材質－鉄骨 設計者－不詳 施工者－不詳

④ **鉄網製造工場**：竣工年月日－昭和 34 年 構造・材質－木造、小屋組トラス構造、モルタル塗 設計者－不詳 施工者－不詳

⑤ **食堂**：竣工年月日－昭和 34 年 構造・材質－木造平屋一部二階建て、モルタル塗 設計者－不詳 施工者－不詳

会社概要 大正 14 年に創立される日本ヒュームコンクリート株式会社に遡れる。本社および工場は現在の横浜市鶴見区に設置された。この会社は英国のヒューム社が日本で製造販売のために設立した会社であった。ヒューム管とは鑄鉄管に代わるものとして誕生し、遠心力によって鉄筋コンクリート管を製造したものである。翌大正 15 年には浅野財閥の影響下に入り、昭和 3 年に日本ヒューム管株式会社に改称する。昭和 8 年には関西での拠点として、西成区にあった大阪工場を尼崎に移し、尼崎工場が建設された。日本ヒューム管社は昭和 30 年代には各地に工場を新設し、急成長を遂げる。そのようななかで尼崎工場は大庄の中浜から、大庄の丸島に昭和 34 年に移転し新設される。業務内容はヒューム管をはじめパイル、ウェル、ボックスカルバート、セメント二次製品などの製造をおこなう。工場立地としては西堀運河に接岸し、船による運搬がおこなわれる。武庫川左岸にある。

建築概要 昭和 8 年に建設された尼崎工場は戦災で焼失することなく残るものの、敷地の狭隘(33.000 m²)と機械設備の老朽化、さらには地盤の不同沈下を理由として、現在の場所(66.000 m²)に移転する。現在の工場はほぼ昭和 34 年当時につくられたままにある。建築構造により二つに分けられる。木造系のものとしては事務所、食堂、鉄網製造工場がある。スタイルとしては戦前期の簡素な洋風建築の系譜に位置する。鉄網製造工場には昭和 30 年代の鉄網製造機が使用される。鉄骨系のものにパイル工場と PS 工場がある。

62 ヤンマーディーゼル(株) 塚口工場 尼崎市塚口本町 5-3-1

① 旧青年学校(現.倉庫): 竣工年月日-昭和 10 年代 構造・材質-木造二階建て、下見板貼り、切妻棧瓦葺き 設計者-不詳 施工者-不詳

② 工場: 竣工年月日-昭和 30 年代 構造・材質-鉄筋コンクリート造二階建て 設計者-不詳 施工者-不詳

会社概要 平成 12 年に設置されるヤンマーディーゼル塚口工場は、昭和 12 年に現所在地に創業する昭和精機のエンジン部門を引き継いだものである。ヤンマーディーゼルとは旧川辺郡小田村長洲で山岡内燃機として創業する。塚口工場は中形ディーゼル機関の専門工場である。工場立地としては敷地東側には JR 福知山線が敷設され、敷地の西側には産業道路がある。

建築概要 旧青年学校は木造によるもので、一階は一続きの空間として、二階は黒板の付いた教室 2 部屋からなる。工場は鉄筋コンクリート造による。一階は縦長の開口部だが、二階は横長の開口部になる。一階は上階の荷重を負担させられるが、二階は上階がないために荷重がかからないということで、横長の窓でも可能という、構造的に理にかなった開口部の取り方である。

63 レンゴー(株) 尼崎工場 尼崎市杭瀬南新町 1-4-1

原質棟: 竣工年月日-昭和 30 年代 構造・材質-鉄筋コンクリート造三階建 設計者-不詳 施工者-不詳

会社概要 レンゴー株式会社尼崎工場は、昭和 22 年創業の摂津板紙の本社工場が前身である。平成 11 年に摂津板紙はレンゴーに吸収合併された。板紙工場としては西日本随一の規模を有する。最初は黄板紙、段ボール中芯原紙を主製品としたが、その後段ボール原紙の生産に比重は移り、現在は中芯、ライナー、紙管原紙を製造する。立地として左門殿川右岸に位置し、左門殿川を利用した船舶によって運搬をおこなう。

建築概要 昭和 22 年創業当時の工場施設は現在までの間に改築が進み、ほとんど残っていない。昭和 33 年に東海興業の設計施工によってつくられた 6 階建ての工場は構成主義風の形状を呈したものであったが、すでに撤去されている。唯一現存が確認されるものは、鉄筋コンクリート造の原質棟であり、昭和 30 年代につくられたものである。

(5) 工場建築のもつ意味

産業遺産に対する調査研究の成果によって、近年は「古い機械」の価値も定まってきたが、その上物である工場建家についてはいまだ仮設建築と捉える考えが支配的である。平成 13 年度に実施した産業遺産に関する調査研究によって、尼崎の工場に数棟の煉瓦造の建築が見出せた一方で、数多くの鉄筋コンクリート造建築や木造建築、鉄骨建築の存在が確

認された。前者は紡績工場を改造した倉敷のアイビースクエアにみられるように一定の価値が認知されている。後者は見慣れたスタイルを呈し、とりわけ木造や鉄骨は外壁の薄さもあって、仮設のバラック建築と同一視される視点から逃れたとはいいがたい。それが工場全体のイメージに繋がっているのだろう。そんななかで、所有者にその建築的価値をいかに認識してもらうかが今後の課題としてある。

研究者のなかでもこのような建築に価値を見出す見方は少ない。なぜなら、このような工場とは一般的に規模が大きく単調なスタイルゆえに、保存の対象とはなりにくい。そんななかでロンドンのテートモダンという現代美術館は、古い火力発電所を再生させたものであり、このような工場建築のありように新しい手法を提示した。

たしかに、工場とは「建築」ではなく、機械などの生産施設を収納するただの容器にすぎないという見方がある。しかし20世紀の建築を振り返れば、その初頭に立ち現れた工場建築こそが20世紀の建築を予告していたことが諒解される。すなわち、それまでの様式建築を否定した建築として成立する。モダニズム建築である。その事例は20世紀初期のドイツのベーレンスのタービン工場やグロピウスの工場などに見出せるが、この時点で生産性を口実に、ガラス張りの建築が実現されていた。つまり、モダニズム建築とは装飾をほどこす必要のない工場建築から開始されていた。そのような意味では、工場とは完成された様式建築からもっとも遠い位置にあったからこそ、その桎梏から逃れモダニズムのさきがけになり得た。そうして20世紀には世界中に機能性や合理性を拠り所にし、装飾を排除した近代主義建築が広まっていく。そのように考えると、機能重視の工場建築にこそ、近代を席卷したスタイルの建築を解く鍵が隠されていたのだ。ならば、21世紀を決定するスタイルは今眼前にする、一見仮設ともみえるような工場建築に現れている可能性もある。

(6) 産業遺産調査で得られた意義

尼崎の産業遺産に関する調査をおこなうことで、次のふたつの収穫を得た。

ひとつは相当数の工場で工場の設計をおこなった建築家が特定でき、新しい構造技術の導入の事例が判明したこと、もうひとつは工場の履歴が判明し、背景としての地域開発史が発掘できたという2点である。前者は建築技術史的内容であり、後者はこれまであまり知られることのなかった新しい工場成立史へと繋がる。

前者からみると、王子製紙や日本油脂では外国人技術者、ダイセルでは河合浩蔵、東リでは渡辺節、朝日オートセンターでは和田貞治郎、東洋精機では古塚正治、住友金属では長谷部竹越建築事務所、塩野義製薬では坂倉準三と、大正昭和前期に大阪や神戸、阪神間を拠点に活躍した著名な建築家が設計に関わっていたことが判明した。河合は神戸地裁、渡辺は綿業会館や大阪ビルディング、和田は芦屋精道小学校、古塚は宝塚ホテル、長谷部竹越は戦後の日建設計となる。つまり、これらの建築家たちはこれまではここに紹介したような華麗な建築の設計者としてのみ知られてきたが、実は尼崎市内の工場の設計を担っていたことが判明した。今は亡き発電所を設計したのは三越大阪店の設計者でもあった横河工務所だった。

技術史的には次のことが判明した。すなわちこれまでは戦時中になると鋼材統制令などにより、鉄筋コンクリート造などは建設されなかったという図式があったが、三菱電機などの事例で確認されたように、軍需産業と認定されれば、昭和19年にも鉄筋コンクリート造の工場が建設されていたことが判明した。なおここでは、ラーメン構造とスラブだけが鉄筋入りで、それ以外の部分、ここで判明した壁は竹を芯とした竹筋コンクリート造であ

った。また、東洋精機では腰壁や地下室の壁は無筋のコンクリート造となっていることが確認できた。

さらにこれまでの調査ではすでに失われていると考えられていた建造物が現地調査の結果、残っていたことが判明した。王子製紙やダイセル、日本油脂、三菱電線工業などの煉瓦造建造物である。

後者をみると、それまでは隠されていた工場成立の意義が浮上した。大正中期に鉄筋コンクリートの菓子工場を完成した森永製菓では、ファクトリーガーデンという経営思想が日本でもっとも早い時期に展開されていた。すなわち、工場と従業員住宅およびに福利厚生施設をひとかたまりの土地につくりあげるといったものだった。職住近接の本来の意味での「田園都市」であったのだ。

また朝日オートセンターのように、金井重要工業の工場や事務所を撤去せずに別の機能として使用している事例もあり、持ち主の金井重要工業側にも一定の評価がなされていることが現地調査の結果、判明した。

4 文化財としての産業遺産

わが国では文化財保存のための法律として「文化財保護法」があり、事実「近代化遺産」とされるものいくつかは「重要文化財」として「指定」を受けているものもある。しかし1996年の法改正により重要文化財の定義に「土木構造物」が「建築物、土木構造物およびその他に工作物」のように明文化された。また、新たに創設された「登録文化財制度」により、文化財としての評価が不確定ではあるが将来の重要文化財の候補となる「近代化遺産」を文化財対象とする途が広がることとなった。「指定」文化財が保存志向であるのに対して「登録」文化財は活用指向で、所有者の自主的保護に期待する緩やかな保護措置となっている。国の助成措置は指定文化財ほどではないが、固定資産税・地価税の減免、保存修理の設計監理費の補助がある。登録文化財の基準としては、①国土の歴史的景観に寄与しているもの、②造形の規範となっているもの、③再現することが容易でないもの、となっている。

(1) 文化財の種類

文化財保護法では、文化財を「有形文化財」、「無形文化財」、「民俗文化財」、「記念物」及び「伝統的建造物群」と定義している。これらの文化財のうち、重要なものを重要文化財、史跡名勝天然記念物等として国が指定選定し重点的な保護の対象としている。

また、無形文化財、無形民俗文化財では、指定のほかに記録作成等の措置を講ずべきものを文化庁長官が選択し、その記録の作成に努めている。

このほか、土地に埋蔵されている文化財（埋蔵文化財）、文化財の保存・修理に欠くことのできない伝統的な技術・技能（文化財保存技術）も保護の対象とされている。

文化財の指定・選定及び登録は、文部大臣が文化財保護審議会に諮問し、その答申を受けて行うこととされている。

有形文化財とは建造物、絵画、工芸品、彫刻、書跡、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいる。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に価値の高いものを国宝に指定して保護している。

(2) 産業遺産の文化財としての保護

1 国における調査

文化庁では「近代化遺産（建造物等）総合調査」事業を進めている。事業は平成2（1990）年度から開始され、都道府県別に2カ年の継続事業で行われている。事業の主体は各都道府県で、文化庁から各都道府県に事業費用の補助並びに調査の指導・助言が行われている。

この調査において、建造物と一体をなして価値を形成する物件についても調査の対象としているが、単独で保存されている機械類等は調査の対象とならない。

2 重要文化財の指定

1993年（平成5）、国の重要文化財に新たに「近代化遺産」という種別がもうけられた。

近代化遺産は幕末から戦前にかけて、日本の近代化を担った各種の構築物、工作物をいい、土木遺産・交通遺産・産業遺産の3種類がある。これには、施設に係る設備、機械、家具、備品類や機関車、車両、自動車なども含まれ、従来の指定物件とちがって、単体としてではなくシステム保存するのが大きな特徴になっている。

具体的には、

- 造船所や鋳山、製鉄所、製糸工場、れんが製造工場、ビールやワインの醸造工場等の産業関係
 - 駅舎、機関庫、橋梁、トンネル、軌道等の鉄道施設、道路橋、灯台、船舶などの交通関係
 - 護岸や埠頭、防波堤などの港湾施設、灌漑用水、運河、ダム、発電所施設、上下水道施設
- などであり、このほか、これらの施設に関わりのあった設備、機械、家具、備品類や機関車、車両、自動車なども含むとなっている。

こうした分類が作りだされた背景には、江戸時代までのものに関しては、幅広く保存保護されているが、近代化遺産と呼ばれる産業施設や交通施設などは、産業構造の変革や開発等により、取り壊しが猛烈に進んでいる状況がある。このまま放置すれば、日本の科学技術を築いた記録、近代化の記録が、単なる写真とか文字でしか残らず、この時代を物語る文化遺産は失われてしまうだろうと懸念される。

現役の近代化遺産としてはじめて重要文化財に指定されたのは1995年の長野県南木曾町にある読書発電所施設である。

3 文化財登録制度

平成8（1996）年10月1日に文化財保護法の一部を改正する法律が施行され、文部大臣が保存と活用の措置が特に必要とされる文化財建造物を文化財登録原簿に登録する「文化財登録制度」が導入された。この登録制度は、近年の国土開発、都市計画の進展、生活様式の変化等により、社会的評価を受けるまもなく消滅の危機に晒されている多種多様かつ大量の近代の建造物を中心とする文化財建造物を後世に幅広く継承していくため、届出制と指導・助言・勧告を基本とする緩やかな保護措置を講じる制度であり、従来の指定制度（重要なものを厳選し許可制等の強い規制と手厚い保護を行うもの）を補完するものである。

登録の対象になるのは、建設後50年を経過し、かつ、「国土の歴史的景観に寄与している」「造形の規範となっている」「再現することが容易でない」といった一定の価値をもつ（平成8年8月30日文部省告示第152号「登録有形文化財登録基準」）もので、具体的に主な対象として想定されているものは、産業構造・生活様式・都市構造の変化等により文化財としての評価を受ける間もなく滅失の危機にさらされている多種多様で大量に存在する近代の建造物である。

4 文化財の指定と登録

指定文化財は文化財としての価値が定まったすぐれたもので、所有者にある程度の制約を課しても、国民的財産としても守らなければならないもの。したがって指定制度は物件を厳選して強い規制を課し、それに代わる手厚い保護を行うことにより永久的な保護を行う仕組みである。指定を受けた場合の優遇措置としては保存修理補助金交付、敷地を

含めた固定資産税の免除、改修工事費用の低金利融資がある。

登録制度は一定の価値を持つものを幅広く登録して緩やかな規制を課し、所有者等による自発的な保護を促進するという考え方にたっている。所有者が保護を図りやすいように規制を必要最小限にしながら、その価値を公認し、保護の必要性を喚起しその実をあげようとするものである。登録された場合は固定資産税、敷地地価税の減税や、保存修理をするときの設計管理費の補助金などを受けられ、改修工事費に対し低利融資が可能などの優遇措置がある。

5 東洋精機本館事務所が登録文化財に

平成 15 年（2003 年）12 月、東洋精機株式会社本館事務所が、大庄公民館とともに尼崎市内で初めて国の登録有形文化財に登録された。

<参考>

◎文化財保護法の 1 部を改正する法律要綱

第一 文化財登録制度の導入

一 有形文化財の登録（第 56 条の 2 関係）

文部大臣は、重要文化財以外の有形文化財（地方公共団体が指定を行っているものを除く。）で建造物であるもののうち、その文化財としての価値にかんがみ保存及び活用のための措置が特に必要とされるものを文化財登録原簿に登録することができるものとする。

二 告示、通知及び登録証の交付（第 56 条の 2 の 2 関係）

- 1 登録は官報で告示するとともに、登録有形文化財の所有者に通知することとし、官報の告示があった日又は所有者に通知が到達した時から効力が生ずるものとする。
- 2 登録をしたときは、文部大臣は、所有者に登録証を交付するものとする。

三 登録有形文化財の登録の抹消（第 56 条の 2 の 3 関係）

- 1 文部大臣は、登録有形文化財について重要文化財に指定したとき、又は地方公共団体が指定を行ったときは、その登録を抹消するものとする。
- 2 文部大臣は、登録有形文化財についてその保存及び活用のための措置を講ずる必要がなくなった場合その他特殊の事由があるときは、その登録を抹消できるものとする。
- 3 登録の抹消をしたときは、官報で告示するとともに、所有者に通知することとし、この通知を受けたとき、所有者は登録証を文部大臣に返付しなければならないものとする。

四 登録有形文化財の管理（第 56 条の 2 の 4 関係）

- 1 登録有形文化財の所有者は、特別の事情があるときは、適当な者を自己に代わり登録有形文化財、の管理の責に任ずべき者に選任することができるものとする。
- 2 登録有形文化財について、所有者が判明しない等の場合には、文化庁長官は、適当な地方公共団体その他の法人を、当該登録有形文化財の保存のため必要な管理を行う団体（以下「管理団体」という。）に指定できるものとする。

五 登録有形文化財の滅失又はき損（第 56 条の 2 の 5 関係）

登録有形文化財の全部又は一部が滅失し、又はき損したときは、所有者等は、その事実を知った日から 10 日以内に文化庁長官に届け出なければならないものとする。

六 登録有形文化財の修理（第 56 条の 2 の 6 関係）

登録有形文化財の修理は、所有者が行うものとするが、管理団体がある場合は管理団体が行うものとする。

七 登録有形文化財の現状変更の届出等（第 56 条の 2 の 7 関係）

- 1 登録有形文化財の現状を変更しようとする者は、原則として、30 日前までに文化庁長

官に届け出なければならぬものとする。

2 登録有形文化財の保護上必要があると認めるときは、文化庁長官は、届出に係る現状の変更に関し必要な指導、助言又は勧告をすることができるものとする。

八 登録有形文化財の管理又は修理に関する技術的指導（第56条の2の8関係）

登録有形文化財の所有者等は、文化庁長官にその管理又は修理に関し技術的指導を求めることができるものとする。

九 登録有形文化財の公開（第56条の2の9関係）

1 登録有形文化財の公開は、所有者が行うものとするが、管理団体がある場合には管理団体が行うものとする。

2 管理団体が行う公開には、観覧料を徴収することができるものとする。

3 登録有形文化財の活用上必要があると認めるときは、文化庁長官は、その所有者等に対し、必要な指導又は助言をすることができるものとする。

十 登録有形文化財の現状等の報告（第56条の2の10関係）

文化庁長官は、必要があると認めるときは、登録有形文化財の所有者等に対し、その現状等につき報告を求めることができるものとする。

十一 所有者変更に伴う登録証の引渡し（第56条の2の11関係）

登録有形文化財の所有者が変更したときは、旧所有者は登録有形文化財の引渡しと同時に登録証を新所有者に引き渡さなければならないものとする。

十二 文化財保護審議会への諮問（第84条の2第1項関係）

文部大臣は、登録有形文化財の登録及びその抹消について、あらかじめ、審議会に諮問しなければならないものとする。

十三 登録有形文化財についての国に関する特例（第97条の2～第97条の5関係）

国の所有に属する有形文化財である建造物を登録したときの通知又は登録証の交付は各省各庁の長に対して行うものとする。関係各省各庁の長が登録有形文化財を取得したときの通知の取扱い等、登録有形文化財についての国に関する所要の特例を定めること。

第二 指定都市等への権限の委任等及び市町村の役割の明確化

一 指定都市等への権限の委任等（第98条の3、第99条及び第100条の2関係）

文化庁長官が行うこととされている重要文化財等の現状変更の許可等及び埋蔵文化財の鑑査等について、都道府県の教育委員会に加えて指定都市及び中核市の教育委員会にも委任できるものとする。発掘調査により発見された文化財について都道府県の教育委員会と同様の処理を指定都市及び中核市の教育委員会にも認めること。

二 市町村の役割の明確化（第104条の2及び第105条関係）

都道府県の教育委員会と同様に、市町村（市町村の組合及び特別区を含む。）の教育委員会について、文化財の保存及び活用に関する文部大臣又は文化庁長官に対する意見具申及び地方文化財保護審議会の設置に関する規定を整備すること。

第三 重要文化財等の活用の促進

一 重要文化財等の所有者等による公開（第 51 条第 7 項、第 56 条の 7 第 2 項及び第 3 項、第 56 条の 16、第 56 条の 19 第 2 項並びに第 83 条の 11 関係）

国庫負担により、重要文化財若しくは重要有形民俗文化財をその所有者等が公開しようとする場合、重要無形文化財をその保持者等が公開しようとする場合又は重要無形文化財、重要無形民俗文化財若しくはついで、文化庁長官への申出及び文化庁長官の承認を要しないものとする。選定保存技術の記録をその所有者が公開しようとする場合に

二 重要文化財等の所有者等以外の者による公開（第 53 条第 1 項及び第 2 項並びに第 56 条の 15 第 1 項関係）

重要文化財の公開について、国の機関及び地方公共団体が文化庁長官の承認を受けた博物館等の施設において展覧会その他の催しを主催する場合に加えて、当該博物館等の施設の設置者が主催する場合にも、重要文化財の公開について許可を要しないものとし、観覧に供した期間の最終日の翌日から 20 日以内に文化庁長官に届け出るものとする。また、重要有形民俗文化財の公開についても同様とする。

三 重要文化財の海外への輸出の許可（第 44 条及び第 84 条の 2 第 2 項関係）

文化の国際交流のための重要文化財の輸出の許可については、文化財保護審議会への諮問を要しないものとする。

第四 その他

一 罰則（第 106 条} 第 111 条関係）

登録有形文化財の現状の変更等の届出等の規定に違反した等に対する過料を定めるとともに、法に定める罰金、科料及び過料の額の引上げを行うこと。

二 その他関係規定の整備を行うこと。

三 この法律は、公布の日から起算して 9 月を超えない範囲内において政令で定める日から施行すること。

5 尼崎の産業遺産発掘シンポジウム

平成 13 年度の産業遺産調査の結果を踏まえ、平成 14 年度、財団法人あまがさき未来協会は「尼崎の産業遺産発掘シンポジウム」を開催した。

○実施日 平成 15 年 1 月 16 日（木）午後 2 時～4 時 40 分

○実施場所 中小企業センター1 階ホール

○プログラム

1 尼崎の産業遺産（映像：パワーポイントで作成したものをプロジェクターで投影）

2 産業遺産調査報告
建築史家 川島智生氏

3 産業遺産活用事例（映像：パワーポイントで作成したものをプロジェクターで投影）

4 講演
武庫川女子大学教授 三宅宏司氏

5 ディスカッション
渡邊申孝氏（東洋精機社長、尼崎経営者協会会長）、三宅宏司氏、川島智生氏、吉田

哲氏（京都大学大学院工学研究科・建築計画学講座助手）

6 展示

▽日本醤油醸造株式会社看板（明治期）▽大正 5 年に尼崎に所在した各種工場の写真▽大正 7 年ごろの尼崎の工場分布図▽尼崎第 1・第 2 発電所の建物・発電機の写真▽尼崎第 1・第 2 発電所タービン・発電機の製造プレート▽解体直前の旧尼崎製鉄の高炉の写真▽昭和 14 年ごろの尼崎の工場分布図・・・など▽東洋精機模型

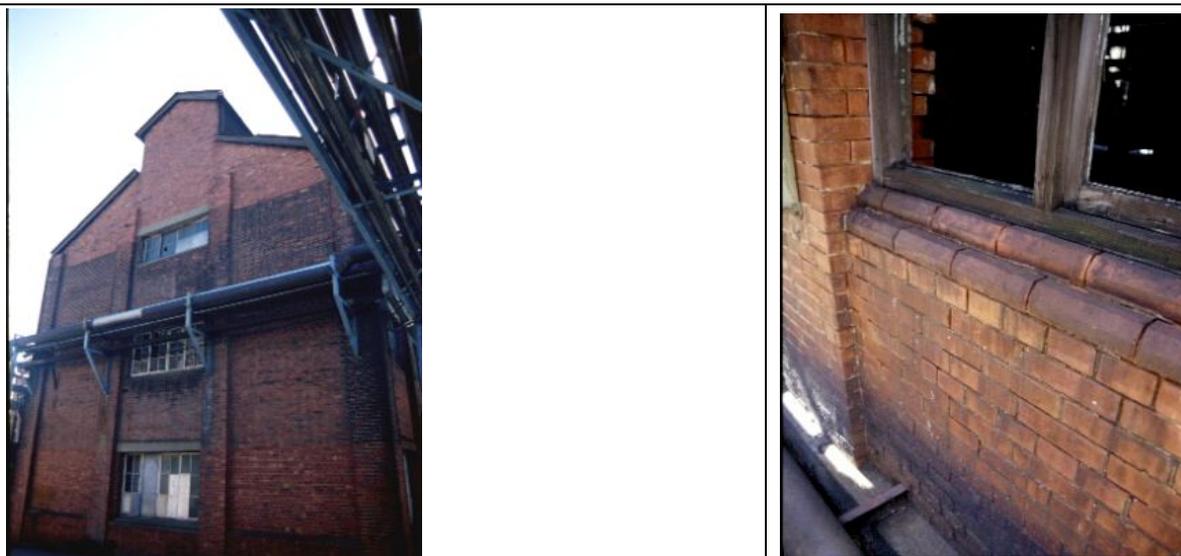
このシンポジウムで紹介した尼崎の産業遺産は次のとおりである。

王子製紙 常光寺4-3-1



神崎川に面する王子製紙。明治27年創業当時の工場施設は昭和20年の空襲で被災し、大半が壊滅したが、赤レンガの加工室は残っている。これが、現在のところ尼崎で最も古い工場建築であると思われる。アーチ状になった窓のまわりが白いレンガと赤いレンガを交互に積んだゼブラ模様になっており、このようなデザインのレンガ建築は非常に珍しいものである。

日本油脂 大浜町1-56



大浜町1丁目の日本油脂株式会社尼崎工場にもレンガ造りの工場がある。現在残っているのは明治43年に建設された精製硬化油工場とグリセリン精製工場。特に写真の精製硬化油工場は尼崎市市内では珍しく当初の形をとどめている貴重なもの。外観ではレンガによる柱型が外部に表れ、窓台までがレンガでつくられ、角部は丸みを帯びた形になっているなど、工夫をこらしたレンガを生かしたデザインがほどこされている。

東リ株式会社伊丹工場 猪名寺1-29 半分は伊丹市



東リ、旧東洋リノリュームの旧本館事務所は大正8年創設時の建築。現在はリノリュームのサンプルや会社の文書資料の保管用倉庫として使われている。設計は大阪を拠点に大正から昭和戦前期に活躍した渡辺節設計事務所によるもの。柱やハリが表に見えるようにしたハーフティンバーというスタイルが採用されている。内部のインテリアも当時の面影を残しており、趣きのある建物である。

クボタ尼崎工場 西向島64



西向島のクボタ尼崎工場には、大正期に建設された、木造の工場としては尼崎市内でもっとも古い建物が3棟ある。写真はその中の一つの木型工場。外観は典型的な工場の姿であるが、足元にレンガが使われているところが時代を感じさせる。内部は、細い木のはりで強度を確保しながら広い空間が形づくられており、その連続した木組みの形に独特の美しさがある。

森永製菓株式会社塚口工場 上坂部 1-1-1



森永製菓株式会社塚口工場では、大正10年に完成した工場がビスケット、チョコレート工場として今も働いている。尼崎市内で現存するもっとも古い鉄筋コンクリート造工場になる。中央部の妻壁に縦線の装飾があり、これは、大正期に流行したセセッションというデザインに影響を受けたものと思われる。

朝日オートセンター 大庄北5-2-1



国道2号線ぞいにある朝日オートセンターは、金井重要工業尼崎大庄工場のあとで、かつて工場であった建物をそのまま事務所とオークション会場に利用している。利用方法はかわったものの、昭和初期の鉄筋コンクリート工場建築の形がよくとどめられている。写真左のオークション会場は旧熱処理工場で、2階には当時の機械が設置されたままとっている。ポールトと呼ばれるアーチ状になった屋根の形や3つ続いたアーチ型屋根の谷間にあるコンクリート製の樋のデザインが特徴的。これは、ドイツ表現派という当時日本建築界を席卷したスタイルに影響をうけたとみられる。

神鋼鋼線工業 中浜町10-1



神鋼鋼線工業の旧中浜変電所は昭和10年前後に建てられた元日本発送電の変電所であった。装飾を排除したモダンスタイルの建築で、鉄筋コンクリート造の2階建て。外観の特徴は全面ガラスの連続窓とタイルによる構成主義的なスタイルが用いられている。ガラスの壁面が柱の位置よりも外にとびだしており、タイルは薄茶色のモザイクタイルを使うなど、モダンデザインの色彩が濃い建築である。

精機工業所 東塚口町1-7-33



精機工業所は、事務所以外のすべての工場施設が昭和14年竣工時のままに使用されているきわめて珍しい工場といえる。木造で、屋根は人造スレートぶき、木の部分には白色系のペイントが塗られるなどメンテナンスがいきとどいており、木造ならではの柔らかい空間が作りだされている。中央部の屋根は採光と換気のために一段と高くなっている。トップライトから差し込む太陽光が淡く反射し、屋根を支える木造トラス構造ならではのダイナミックな空間となっている。

東洋精機 長洲本通1-14-37



長洲本通1丁目の東洋精機株式会社。写真左下の昭和16年に建てられた事務所は木造モルタル塗りながらも、鉄筋コンクリート造に見えるよう設計されている。上の第2倉庫は屋根中央部が立ち上がった越屋根と呼ばれるものが2層になっているのが特徴。木製小屋組みの大空間はいまでは倉庫として利用されているが、まだ動くクレーンも残されており、トラス構造の連続した木組みがおもしろいデザインになっている。この倉庫の模型が同社にあるが、これはあまがさき未来協会が作成し尼崎の産業遺産発掘シンポジウムで使用したのち、同社に寄贈したもの。また、守衛室なども含めて竣工時の工場施設が多く残っている。設計者の古塚正治は大正昭和戦前期に活躍した建築家で代表作に宝塚ホテルがある。

ヤンマーディーゼル株式会社尼崎工場 長洲東通1-1-1



ヤンマーディーゼル株式会社尼崎工場には昭和11年創業時の工場と、現在、製造施設・倉庫として使われている旧青年学校が残っている。写真の旧青年学校は鉄筋コンクリート造で、1階は当初から製造施設が組み込まれている複合的な建築であった。ガラス窓が連続し、屋上の階段室には丸窓が配されるなど戦前期モダニズムの特徴があらわれている。

神崎高級工機製作所本社工場 猪名寺 2-18-1



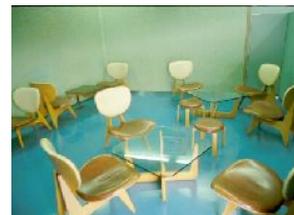
神崎高級工機製作所本社工場には、昭和10年代に建設された食堂とのかごり屋根の工場、切妻屋根の工場が残っている。食堂は木造トラス構造により、広い空間が確保されている。ある年代のかたがたにとっては、懐かしいのかごり屋根の工場は、北側から安定した光をとりいれるように工夫された形である。

シオエ製薬株式会社尼崎工場 潮江 3-1-11



シオエ製薬株式会社尼崎工場で、現在研究棟として使われている旧事務所は木造2階建てでスパニッシュスタイルの外観をもつ珍しいもの。大理石に似た表面に仕上げたスタッコ壁やスパニッシュ瓦と呼ばれる茶褐色のS字型瓦、丸窓、丸柱などに特徴がある。

塩野義製薬 杭瀬寺島 2-1-3



塩野義製薬株式会社杭瀬工場には、敷地面積48,000平方メートルの中に大正15年完成のものから平成10年に改築された工場まで建設時期が異なるさまざまな建物がある。その中でも戦後の日本の建築をリードしてきた坂倉建築研究所大阪事務所によって設計された一連の施設が目を引く。2階から5階までつながる螺旋階段や巨大なひさし。事務所内部をみても、階段の曲線が造形的で、応接スペースに置かれた椅子とテーブルも坂倉建築研究所のデザイン。その完成度の高さに加え、築40年を経た建築は価値あるものである。

また、国内外でのいろいろな産業遺産の活用のしかたを紹介した。

東田第1高炉



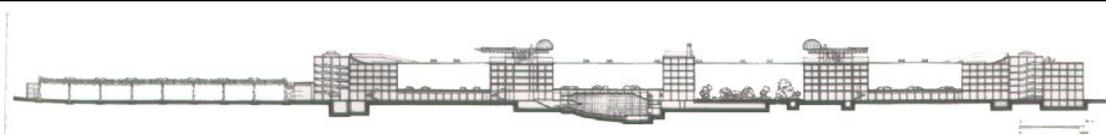
JR 鹿児島本線のスペースワールド駅を出ると、すぐに巨大な構築物がたっているのがみえる。産業遺産として保存されている東田第一高炉である。日本ではじめてつくられた近代的製鉄所の東田第1高炉は新日本製鉄の主力工場として昭和53年まで働いていたもの。高炉は、老朽化のため取壊される運命にあったが、保存を求める市民の声が高まり、北九州市の指定文化財として保存され、見学用の施設が設けられている。

デュースブルグ北景観公園



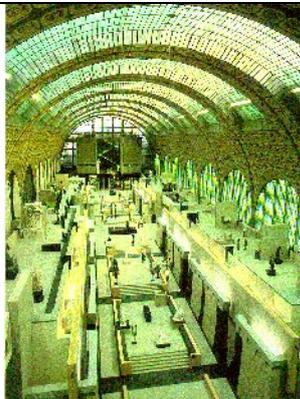
これは、ドイツのデュースブルグ市にある操業を中止したテッセン社の製鉄所を、高炉など稼働時の機械設備・建屋をモニュメントとして全て保存して、公園化したもの。公園全体の面積は200ヘクタールに及ぶ広大なもので、公園としてだけでなく、バザーやコンサートの会場などに使われている。

リンゴット



イタリア北部の工業都市トリノを本拠地とするイタリア最大の自動車メーカーフィアットの工場だったのがこの建物である。1920年に自動車メーカーのフィアットのヨーロッパにおける第一工場として建設され、1982年まで稼働していた大規模な工場で、全長は500mもある。屋上には1.1kmにも及ぶ自動車のテスト・コースがある。1階に見本市会場とコンサートホール、2階が商業施設とホテルになっている。様々なイベントに対応し、国際会議、国際ビジネスセンターとしての業務機能を盛り込むとともに、商業施設や教育機関、多様な生活・都市機能を複合的に立地させた空間づくりとなっている。

オルセー美術館



パリの中心部、セーヌ川沿いにオルセー美術館がある。1900年の万博時にできたオルセー駅が美術館として生まれ変わったものである。1900年にオルレアン鉄道会社が、ホテルを備えた駅を誕生させた。しかし、近代的な駅としてスタートしたオルセー駅も、時代の流れに取り残され、1960年代には国際的な巨大ホテルの建設が決定してしまった。ところが、取り壊し反対の声が強く叫ばれ、建設大臣が建築許可の交付を拒絶する事態にまでなった。そして、1973年、オルセー駅は歴史的建造物の公式リストに登録された。設計と技術面の研究が行われ、1986年、オルセーは美術館として再生したのである。

ギャラリーユニヴァース 2



東京都江東区新木場では、銘木を扱う倉庫が半分だけ改装されて彫刻専門のギャラリーとなっている。イタリアの現代彫刻の一級品が展示されている。天井が高く大空間であったこと、展示室内ではフォークリフトが動かせ、また、レール式のクレーンが設置してあった、など建物がもともと持つ強みを生かしたものである。京都大学大学院宗本順三教授らの設計によるもの。

北浜アリー



「北浜アリー」は昭和初期の倉庫群を利用した商業施設で、香川県高松市の高松港にある。高松港は、香川県のほぼ中央部に位置し、四国と本州を結ぶ海上交通の要衝として重要な役割を果たしている。古びた倉庫や事務所、民家が立ち並ぶなかに北浜アリーはあり、カフェやレストラン、バー、雑貨店、美容室など 8 店舗がはいつている。錆びた外壁をそのままに残し、構造補強はしてあるものの大幅な改造はみられない。冷暖房の屋外機は古い鉄板で隠してあり、看板は一見してわかりづらいほど存在を主張していない。長年、潮風に耐えてきた味わい深い倉庫の壁をいかし、できる限りその風情をそこなわない改造がほどこされており、建物全体に漂う懐かしい雰囲気若者の人気を呼んでいる。

黒壁ガラス館、



滋賀県長浜市の黒壁ガラス館は、明治33年に「百三十銀行」として建てられた木造2階建の建物を利用している。黒漆喰でつくられたその姿から、地元住民からは「黒壁銀行」「黒銀行」として親しまれてきた。現在、「株式会社黒壁」の1号館として、ガラス細工やグラス等を販売する店舗となっている。

小樽運河



大正3年に着工し9年後に完成した小樽運河は、かつて北海道経済の中心として栄えた港町・小樽を象徴するものである。この小樽運河ぞいには、明治・大正期の石造り倉庫が今も建ち並び、数十万個の御影石を敷きつめた散策路や夕暮れとともに灯る63基のガス燈がロマンチックな風情をかもしだす。倉庫群は飲食店などに生まれ変わり多くの観光客を集めている。

門司港レトロ

税関



門司港は明治 22 年の開港以来、九州の玄関口として、また神戸、横浜に並ぶ国際貿易の拠点として、近代日本の発展を支えてきた。商社などのビルが建ち並び、門司港の街を華やかに盛り上げていた。そうした当時の面影を偲ばせる古い街並みが残されており、この古い街並みと新しい都市機能をミックスさせた都市型観光地をめざし、「門司港レトロ」と名付けられた整備が進められている。

この建物は、明治 45 年に門司税関庁舎として建てられたが、その後、民間に払い下げられ、事務所や倉庫などに使われていたものを、北九州市が買い取り、平成 6 年に修復したものである。現在、1 階はコンサートホールに利用できる休憩室や展示室、2 階はギャラリーと展望室になっている。室内の復元は無理に行わず、漆喰が剥げ落ちたレンガの壁面をそのまま残しており、それが独特の雰囲気をもたらしている。

門司港レトロ

旧・三井倶楽部



三井物産門司支店の社交クラブとして、大正 10 年、建築された門司三井倶楽部。洋館の本館と和館の附属屋から構成されている。現在、1 階にはイベントホール、レストランがあり、このレストラン「三井倶楽部」は門司港レトロ関連施設の中で最大の売り上げを誇っている。

門司港レトロ

大阪商船



大阪商船三井船舶株式会社門司支店は大正6年に建てられた木造二階建てで、国の登録有形文化財。門司港の象徴的な建物であり、大陸航路の待合室として賑わっていた。現在では1階が多目的に使用される海峡ロマンホールで、門司港レトロ関連施設の管理運営を行う観光協会の事務所がある。2階は海事資料室となっている。

新居浜

広瀬記念館



新居浜市は、四国の中央部、愛媛県の東部に位置し、北に瀬戸内海、南に四国山地を仰ぐ人口12万8,000人の都市。元禄4年の別子銅山開坑以来、四国屈指の工業都市として発展している。

新居浜市では市民運動の盛り上がりを受け、平成9年度に「近代化産業遺産のロマンの息づくまちづくり」を市政の重点課題に掲げ、近代化産業遺産の活用調査事業の実施など取り組みを強めている。

広瀬歴史資料館は別子銅山開発の近代化を推進した広瀬幸平の足跡を通して新居浜の生い立ちと日本の近代産業の歩みをたどる施設。隣接する広瀬邸との調和を図り、小規模ながら細部にこだわった展示は郷土への誇りに裏打ちされた強い意志が感じられる。また、広瀬歴史資料館に隣接して広瀬幸平の居宅であった広瀬邸が保存されている。母屋は明治10年に、新座敷と庭園は明治22年に建築、造園されたもの。伝統的な日本建築様式をもちながらもマンテルピース、洋式便器、板ガラス、避雷針といった新しい文化がとりいれられている。

新居浜

別子銅山記念館



別子銅山記念館は、別子銅山の意義を長く後世に伝えるために、住友グループの協力によって建設、運営されている。半地下構造の館内には別子銅山の歴史をたどる歴史資料や、その間の主な出来事及び生活風俗、技術などに関する資料が展示されている。周辺の景観を損なうことなくデザインされた記念館の外観や質の高い展示物に配慮が感じられる。

新居浜

マイントピア別子



鉱山に関するテーマパーク、マイントピア別子は、赤煉瓦風の本館、本館から鉱山鉄道で結ばれた観光坑道、および本館近くの砂金採り体験パークなどからなり、また本館4階はヘルシーランド別子という温泉施設がある。

赤いクルマはダイハツ・ミゼット。新居浜の北方20キロにある四阪島で消防自動車として使われていたもの。廃棄直前に当時の新居浜市の商工観光課長が譲り受け、マイントピア別子銅山においたものである。

6 産業遺産の観光資源としての活用

平成 15 年度、尼崎地域・産業活性化機構において、「産業遺産の観光資源としての活用に関する研究」に着手した。

経済活動の低迷による総需要の伸び悩み、国際化の進展による海外旅行と国内観光との競合等、国内観光を取り巻く環境は厳しい。

産業遺産の観光資源化には多くの経費をかける必要もなく、身近なところで実現できるものが多い。そして、それを保存・展示するものと、見るものが先人の「物づくりの心」に触れてひとつの心になるとき、底に新しい交流と新しい文化が生まれる。

研究会には、これまでの産業遺産に関する取り組みを通して知り合った多くの人が無報酬で参加してくれた。

産業遺産の観光資源としての活用研究会名簿

会 長	三宅宏司	武庫川女子大学教授
	齊藤成人	日本政策投資銀行関西支店企画調査課
	森賀盾雄	新居浜市情報政策課長
	吉田哲	京都大学建築計画学
	若狭健作	(株)地域環境計画研究所
	植野洋治	阪神南県民局地域振興部商工課
	北尾 琴	武庫川女子大学生生活環境学部生活環境学科建築都市設計学研究室
	清水陽子	奈良女子大学 大学院 人間文化研究科 中山研究室
	田村良二郎	尼崎市産業経済局産業振興課
	桃谷和則	尼崎市教育委員会事務局歴博・文化財担当
	西谷俊一	尼崎地域・産業活性化機構事業課
事務局	田中正郎	尼崎地域・産業活性化機構調査課
事務局	荻野和子	尼崎地域・産業活性化機構調査課

(1)「観光」の現状

産業遺産の活用を考える前に、「観光」そのものについて見ておくこととする。

1 21世紀は観光の世紀

21世紀はまさに交流の時代である。観光は交流を演出する。つまりは交流の世紀＝「観光の世紀」ともいえる。

国と国との垣根が低くなった現在、自由で広範囲の人的交流の輪が広がることが期待され、21世紀のキーワードである「国際化」にとっても、観光が重要な役割を担う。

次に、情報化の時代は、価値観の多様化を生み出し、当然、観光ニーズも多様化するな

かで、産業観光が注目されている。多くのテーマパークが破綻していく中で TDL 一人勝ちが続いている。この TDL もノスタルジーがキーワードとなっている。ミッキーマウスは戦前から存在し、戦後急速に日本社会に浸透したアメリカ文化の象徴として、ほとんどの日本人の幼児体験に深く影響をおよぼし、思い出として残っているのである。

2 経済情勢からみた観光への期待

今後日本経済は、右肩あがり成長していくとは考えにくく、産業構造の転換が必要である。ある意味では日本の基幹産業のひとつである観光産業が、日本の新しい経済の牽引役として、大きな期待がかかっている。

新産業の創出、既存の産業の持続のためにその活性化、後継者育成も大切な問題である。その意味でも、観光、特に産業観光の果たす役割は大きいといえる。「観光」とは、地域の優れたものを世に問い、人的交流を図るもの。産業文化財を通じて「ものづくり」の心に触れ、その発展について知ること、これからの産業発展の示唆、教訓を得ることができる。産業後継者育成にも大きな効果をもたらす。

(2) 産業遺産の観光資源としての活用を検討する意義

産業遺産を観光資源として活用することを検討するのは、実際に観光事業を起こすというのではなくとも、地域資源としての有用性をみきわめ、またそのアイデアを考えることにより、新たなまちづくりの方途ともなる。

産業遺産を保存し活用することは、わが国の発展を支えてきた各種技術を後世に伝えるという重要な役割を果たすとともに、それが当地あるいは当社で行われたということで、地域及び地元住民に誇りを抱かせることにもなる。そして、外部の人が訪れ学習・交流する（これをヘリテージツーリズムという）ようになれば、地域の活性化につながる。

産業遺産の観光資源化には多くの経費をかける必要もなく、身近なところで実現できるものが多い。そして、それを保存・展示するものと、見るものが先人の「物づくりの心」に触れてひとつの心になるとき、そこに新しい交流と新しい文化が生まれる。

しかし、観光の基盤がない尼崎市においては、産業遺産を観光に活用しようとするとき、まず観光の基盤を整えていかなければならないことに留意する必要がある。

(3) ツーリズムにおける産業遺産のポテンシャル

近代化遺産或いは産業遺産が持っている、新しいツーリズムの素材としてのポテンシャルについて、既述の内容と重複するところもあるが、ここで整理しておきたい。

1 産業遺産が注目される社会的背景

近代化産業遺産が注目される転機になったのは、オイル・ショックや産業構造の急激な変化があった 1970 年前後であろうと考えられる。1960 年代の末から各地で街並み保存の動きが活発になっている。世界遺産条約の批准と、ローマクラブの「成長の限界」が 1972 年。1975 年には、伝統的建造物群の保存地区の指定といった文化財保護法の改正も行われている。海外では 70 年前後に急激に、社会や価値観、生活スタイルが変わってきたものと思われる。

わが国では1980年代の半ばから、その中で産業系の遺産が注目され始め、各地で地元のNPOやJC（青年会議所）などが活動を始めた。

わが国が世界遺産条約を批准したのは1992年。その後、例えば原爆ドームの登録には、これを世界に見てもらふことへの抵抗感が払拭されたという価値変化がある。その3年後に水俣にできた「水俣病資料館」では、患者たちが自分の生活史、体験、公害病のことを子どもたちに伝えるガイド・ボランティアを行なっている。1970年代頃であれば、水俣病の資料館をつくるなどという、社会的バッシングを受けたであろう。近代というものに対して持たれていたマイナスの面が徐々に変わってきた証左だと思われる。

文化庁は平成2年から「近代化遺産総合調査」をスタートした。この調査そのものが近代化遺産に対する地元の意識を目覚めさせた。

2 近代化産業遺産の活用事例

国際観光との関連でいうと、これまで日本では欧米向けに奈良や京都を売り出してきたが、アジアの人から見ると、産業技術や近代都市、TDLのほうが面白く、より高い集客性を持っているのではないかと指摘がある。

それでは近代化遺産の活用事例を、活用の用途別に分類している。ただ現実の事例にはこれらがミックスされており、逆にいうとそういう多様な要素がないと魅力が高まらないというのが現実であろう。

①まちづくりのシンボル（景観）的活用

まちづくりのシンボル、あるいは景観を活かすというような活用の仕方。宮沢賢治ゆかりの岩手県東山町の旧炭カル工場と歴史的景観整備の例がある。登録文化財としては、このジャンルの第1号である。旧炭カル工場自体は賢治が晩年の6ヵ月を働いた石灰工場の当時の様子をそのまま再現しただけであるが、旧炭カル工場を拠点にして、面としてのネットワークをうまく作り上げていこうという試みをしている。賢治ゆかりの場所ということが集客の非常に大きな装置になっている。このほかには、旧銀行建物や蔵づくり商家を活用した滋賀県長浜市、深谷の煉瓦を活かしたまちづくりなどの例がある。

②日々の生活ニーズに基づく機能転換

栃木県足利市では石造りの旧撚糸工場をスポーツクラブに転用した。足利は繊維の街で、近代の産業遺産がいたるところに残っているが、その一つに足利の模範撚糸工場というものがある。のこぎり屋根と採光窓のある典型的な繊維工場を、そのままスポーツクラブに使っている。非日常的なものを日常の用途として活用している。

③産業技術博物館などによる技術継承や学習的活用

技術継承とか学習という視点からの活用を図ろうというもの。旧発電所などの事例が多く見られる。名古屋の産業技術記念館では旧織機工場を、展示スペース1万平米の巨大な企業博物館に転用した。トヨタグループ13社が共同して設立し、旧豊田紡績時代の織機から自動車製造にいたるまで約三千点が展示されている。トヨタのOBが動体展示のオペレーターをしている。

④新しいタイプのツーリズム拠点としての活用

秋田県の小坂鉱山では、鉱山の芝居小屋を復活させて観光拠点化した。小坂鉱山の事務所を移築し、その横に「康楽館」という芝居小屋をそのまま復活して、今また芝居小屋として使っている。鉱山には必ずこういう芝居小屋があり、かつては鉱山労働者の娯楽の聖地であった。

このほか海外では、フランスのエコ・ミュージーゼ、イギリスのトラストのような形で運用している場合が多い。イギリスでは、アイアンブリッジの例のように、非常に広大な歴史的面积を住宅開発などの再開発事業の中に位置づけ、その中で産業遺産の整備を進めるなど、日本とは整備の基本的考え方が違う。イギリスでは産業革命の出発点において日本とは200年の開きがあるが、その点ランメルスブルグ鉱山やフェルクリンゲン製鉄所などのドイツの例が、むしろ日本に近いようである。日本では鉱山と母都市のかつての関係は切り離されてしまうことが多いが、ランメルスブルグでは、母都市のゴスラーと鉱山のあるランメルスブルグを一体として世界遺産に登録し、運用している。

3 産業遺産活用の視点と類型

(1) 活用のための基本的視点

財団法人自由時間デザイン協会の丁野朗氏は近代化産業遺産活用のための基本的視点を5点指摘している。

①地域の個性を表現する素材であるということ。

②断片的な近代化遺産に対して、想像力をどう刺激して全体像が見えるようにするか。

③見る人の視点を育てるということ。視点の高さ、深さが産業遺産の面白さ、興味を倍加させる。

④歴史と日常というもののギャップをうまく活かす。

⑤近代化産業遺産には、原材料の流通、河川、資源、技術移転などの様々なネットワークがある。そういう多様なネットワークを活かす。

⑥産業遺産のテーマをうまく伝えるための語り部、ガイドキュレーターをどう育てるか。

(2) 産業遺産活用の視点と類型

産業遺産の所有は多くが民間企業、個人なので、所有という問題と、活用、運用という問題をいったん切り離して、多様な組み合わせを工夫しなければならない。

さらに、産業遺産の種類、集積度、歴史的文化的価値、立地条件、建設年代などがそれぞれ違うため、適切なシステムの組み合わせを考えなければいけない。

活用の類型としては、昔からあった機能をそのまま活かす「継続的活用」。失われた機能を別の機能に置き替える「転用型活用」。いったん機能がなくなったものをもう一回復活して使う「復活型活用」。そのほかには、例えば巨大な倉庫空間をイベント空間として利用するといったことも考えられる。

また、活用の形態（空間的広がり）では、個別的に点として活用するものと、それから地域単位で面として活用するということがある。面としての活用には地区型、ネットワーク型、野外博物館型などがある。

近代化産業遺産を活かすということを考える時の課題としては、第1点として、遺産を保全し活用することに対する法制度的な整備が必要である。所管官庁が明確でなく、基本的な法的フレームが何もできていない。長期にわたって保全することへのプラスの価値を制度的に創出することも重要である。2点目は、持続的な活用や保全をやっていく上での情報や経験交流とか、あるいは事例の紹介、人材の育成、共同調査、コンサルティングなどがきちんとできるような推進体制の整備。3点目は、産業遺産を保全し活用するということをやるためには、補修、移築、復元、展示、コンサル、イベントなど、いろいろな民

間の既存の産業を含めた協力が必要になってくる。したがって産業遺産ではなくて、「遺産産業」をどうやって育てるかというのが大きな課題になってくる。

<資料>我が国における産業遺産の保存活用例

■ 鉱山・鉱業

- 中小坂鉄山（坑口、坑道、鉱石運搬軌道路盤、石宮）群馬県甘楽郡下仁田町中小坂
- 生野銀山（兵庫県朝来郡生野町）
- 足尾銅山
 - ▽ 旧小滝坑入口▽初期の小滝坑跡▽小滝製錬所、選鉱所跡▽足尾製錬（株）足尾製錬所
 - ▽古河機械金属（株）足尾事業所▽本山坑跡▽旧・宇都野火薬庫（煉瓦造1棟、御影石造3棟）
- 白石工業（株）白艶華工場 炭酸カルシウム乾燥小屋
群馬県甘楽郡下仁田町青倉

■ 石炭・石油

- 三井・田川炭鉱
 - ▽大煙突（1908（明治41）年3月竣工）▽伊田第一竪坑櫓（1909（明治42）年竣工）▽伊田第二竪坑櫓跡
- 大牟田・三井三池炭鉱跡めぐり（福岡県大牟田市）
 - ▽大牟田市立石炭産業科学館▽旧・三池炭坑宮原坑▽旧・三池炭坑宮浦坑（宮浦石炭記念公園）
- 金谷油田（新潟県新津市）
- 相良油田・・・1873（明治6）年開坑
静岡県榛原郡相良町菅ヶ谷
相良油田資料館（静岡県榛原郡相良町菅ヶ谷2861-1 相良油田の里公園）

■ 材料

- 京セラ・ファインセラミック歴史館 京都府京都市伏見区竹田鳥羽殿町6番地 京セラ株式会社・本社

■ 製鉄・金属

- 尚古集成館・仙巖園（鹿児島市吉野町9700-1）
 - 集成館機械工場（1865（慶応元年）竣工）
 - 反射炉跡（嘉永5年着工・1857（安政4年）5月竣工）
- ミュージアム知覧（鹿児島県川辺郡知覧町郡17880）
 - ※ 水車ふいごシミュレーション模型、発掘された羽口・鉄滓・砂鉄など
 - 厚地松山製鉄遺跡（知覧町厚地松山柵場）
 - ※ 江戸時代、鹿児島県知覧町厚地川上流一帯で操業されていた石組製鉄炉での砂鉄による製鉄所跡
 - 二ツ谷製鉄遺跡（知覧町東別府二ツ谷）
- 中小坂製鉄所跡（焙焼炉）群馬県甘楽郡下仁田町中小坂
- 八幡製鉄所・東田第1高炉 1901（明治34）年操業（福岡県北九州市）
- トーマス転炉（NKK・日本鋼管・京葉製鉄所で使われていたもの）
神奈川県川崎市等々力 川崎市民ミュージアム
- 日本鋼管京浜製鉄所
- ラウト式三重厚板圧延機減速大歯車
 - ※ ・日本製鋼所室蘭製作所・新日鐵八幡製鉄所第一製鋼所製造？
 - 新日本製鐵八幡製鉄所から移設（（株）中部鋼板 工場内）

大谷重工（大阪）製 （（株）中部鋼鉄 正面玄関前 展示）
愛知県名古屋市中川区小碓通5丁目1番地 中部鋼鉄株式会社

■原動機

- ヤンマーディーゼル尼崎工場（特機事業本部）
兵庫県尼崎市長洲東通1丁目1番1号
※ドイツMAN社（創業者：ルドルフ・ディーゼル）から贈られた実用的な世界最古のディーゼルエンジン、
ヤンマーディーゼルエンジン1号機など展示・・・
- 大阪砲兵工廠製蒸気機関（1881（明治14）年製造）
※太平洋セメント株式会社・小野田工場 山口県小野田市大字小野田6276番地
- 朝倉揚水車（菱野三連水車）・堀川用水（国指定史跡）福岡県朝倉町
- 野口水車保存館
屋内型水車（直径5.64m） 1910（明治43）年製・動態保存（製粉・精米用）
群馬県山田郡大間々町小平（親水公園内）
- 親子孫水車<直径13.6m!の巨大水車>（岡山県阿哲郡神郷町）

■工具・工作機械・測定機器

- 尚古集成館・仙巖園（鹿児島市吉野町9700-1）
集成館機械工場（1865（慶応元年）竣工）
※形削盤（オランダ製）、電気模造機（電気による鋳型加工機・・・電胎法）、電気メッキ、梳綿機（1866年イギリス・プラット兄弟会社<PLATT BRO. RS&Co. OLDHAM>製）・・・
- 日本工業大学附属工業技術博物館
- 株式会社 池貝・史料館／川崎工場
神奈川県川崎市幸区神明町1-80株式会社池貝・川崎工場テクニカルセンター内
※史料館には1889（明治22）年に製作された現存する国産のものとして最も古い旋盤が展示されている。
- ミットヨ博物館 ミットヨ・沼田記念館
<http://www.mitutoyo.co.jp/jpn/culture/museum/index.html>
神奈川県川崎市高津区坂戸1-20-1 株式会社ミットヨ本社
- ミットヨ・宇都宮事業所・歴史館
栃木県宇都宮市下栗町2200 ミットヨ宇都宮事業所内
- ミュージアム氏家・「鋸」展示室（栃木県氏家町）
- 旧・横須賀製鉄所（造船所）スチームハンマー（1865年オランダ製）
国指定重要文化財
神奈川県横須賀市深田台95 横須賀市自然・人文博物館 公園内
- 博物館・明治村 愛知県犬山市内山1番地
～鉄道寮新橋工場（機械館）
- ヤマザキ マザック株式会社 デジタルコミュニケーションプラザ
愛知県丹波郡大口町乗船1番地
※創業当時に使われていた貴重な工作機械から最新のマシンまで展示
- トヨタ博物館 愛知県長久手町
- 産業技術記念館（旧・豊田紡織本社工場）

愛知県名古屋市中区則武新町4丁目1番35号

- ハカリの小歴史館京都府京都市左京区聖護院山王町44 (株) イシダ
- 竹中大工道具館 兵庫県神戸市中央区中山手通四丁目18番25号
- 発電・電力・エネルギー
- 尚古集成館・仙巖園 (鹿児島市吉野町9700-1)
 - ▽集成館機械工場 (1865 (慶応元年) 竣工) ▽発電所貯水槽跡※「就成所」 (29代島津忠義が建造した工場) に電力を供給するための発電所貯水槽跡▽島津家・水天淵発電所記念碑
- 足尾銅山
 - ▽「間藤水力発電所跡」～日本で最初の水力発電所～1890 (明治23) 年竣工▽旧・古河鉱業 日光発電所 煉瓦造▽古河機械金属 (株) 細尾発電所
- 電気の史料館 (神奈川県横浜市鶴見区江ヶ崎町4-1)
- 東京電力 八ツ沢発電所一号水路橋 (山梨県大月市猿橋町猿橋) 国登録有形文化財
- 東京電力 駒橋発電所 (山梨県大月市大月町駒橋)
 - ▽旧・水圧鉄管路アンカーブロック▽排水門▽旧・桂川電力公司 鹿留発電所フランス水車 (1912年フォイト製)
- 東京電力 (旧・利根発電株式会社) 岩室発電所・・・1915 (大正4) 年竣工
群馬県群馬県利根郡白沢村岩室
- 旧 前橋電燈会社・植野発電所 取水口跡
1894 (明治27) 年竣工 群馬県で最初の水力発電所、日本で5番目の水力発電会社 群馬県前橋市総社町植野344番地 (立石橋下流)
- 須田貝発電所・・・地下発電所で稼働中の発電機・主軸・フランス水車を見学
群馬県利根郡水上町大字藤原6152
- 東京電力・鹿沢発電所 旧・水車、発電機
横軸単輪複流渦巻フランス水車・横軸回転界磁型交流三相同期発電機
製造年 1925 (大正14) 年 製造所 日立製作所
TEPCO電源PR館・須田貝 (群馬県利根郡水上町大字藤原6152)
- 矢木沢発電所・旧 揚水発電用ランナ (立軸フランス形ポンプ水車)
1966 (昭和41) 年から1986 (平成61) 年まで20年間稼働
TEPCO電源PR館・須田貝 (群馬県利根郡水上町大字藤原6152)
- 須田貝発電所・旧 水車ランナ (立軸フランス形水車)
1954 (昭和21) 年から1997 (平成9) 年まで43年間稼働
TEPCO電源PR館・須田貝 (群馬県利根郡水上町大字藤原6152) 屋外展示
- 東第1発電所・旧 横軸ペルトン水車 1910 (明治43) 年製造
東第2発電所・旧 横軸フランス水車 1925 (大正14) 年製造
TEPCO電源PR館・須田貝 (群馬県利根郡水上町大字藤原6152) 屋外展示
- 矢木沢発電所・旧 立軸蝶形入口弁 1965 (昭和40) 年製造
TEPCO電源PR館・須田貝 (群馬県利根郡水上町大字藤原6152) 屋外展示
- 信越線碓氷峠鉄道施設 旧・丸山変電所、横川火力発電所跡・貯水池跡
- 白石工業 (株) 碓氷第1工場 水力発電施設 水圧鉄管
▽旧・電業社水車製造所製 ペルトン水車・フランス水車▽旧・東京芝浦電気製 直
流発電機
- 吉岡風力発電所 (群馬県吉岡町)

新エネルギー産業技術総合開発機構・群馬県企業局

- 群馬県天狗岩発電所（群馬県吉岡町）
- 旧 名久田水力発電所放水口
1911（明治44）年竣工 群馬県吾妻郡中之条町横尾1329-2
- 日本原子力研究所・東海研究所（茨城県那珂郡東海村白方字白根2-4）
※運転中の原子炉（JRR-3、JRR-4）や中性子ビーム実験装置などの見学
- 茨城県立原子力科学館（茨城県那珂郡東海村村松225-2）
- 名古屋市科学館 愛知県名古屋市中区栄2丁目17-1（白川公園内）
大同電力（現・関西電力）大井発電所フランスス水車
- 蹴上発電所
日本で最初の事業用水力発電所
京都府京都市左京区粟田口
- 関西電力夷川発電所
竣工：1914（大正3）年
京都府京都市左京区聖護院蓮華蔵町 ※琵琶湖疎水関連施設
- 旧 京都電燈伏見発電所
煉瓦造切妻屋根二棟（東棟・・・ワーレントラス屋根二階建、西棟・・・フィンクトラス屋根）
竣工：1902（明治35）年頃 設計：イギリス人技師？
京都府京都市伏見区東浜南町680 （株）モリタ製作所本社工場
- 電気・通信・コンピューター
- 足尾銅山・銅山電話資料館
- 旧 京都中央電話局上京分局庁舎
竣工 1924（大正13）年 設計 吉田鉄郎 鉄筋コンクリート造（京都市登録文化財）
京都府京都市上京区丸太町通中筋東入ル
- シャープ株式会社 歴史ホール・技術ホール
奈良県天理市櫛本（いちのもと）町2613-1
- 松下電器産業株式会社・歴史館
大阪府門真市門真1006
- 三洋電機・記念資料館（兵庫県加西市北条町北条323 三洋電機回転機事業部）
- 尚古集成館・仙巖園（鹿児島市吉野町9700-1）
集成館機械工場（1865（慶応元年）竣工）
※電信機用電線、電気模造機（電気による鋳型加工機・・・電胎法）、電気メッキ・・・
- 鉄道
- 旧・新橋停車場復元駅舎、旧・新橋-横浜間鉄道創設起点跡「0哩標識」東京都港区東新橋1丁目
- ダブス社（イギリス・1891年製）2100形蒸気機関車
日本工業大学で動態保存
- 信越線碓氷峠鉄道施設
▽隧道（トンネル）▽橋梁、溝渠（カルバート）▽旧・丸山変電所▽横川火力発電所跡・貯水池跡▽碓日嶺鉄道碑▽旧 横川機関区検修庫、電気機関車EC40（1000形）▽電気機関車ED42-2▽信越線碓氷峠保守専用ディーゼル機関車TMC500A(DB201)、189系

- (旧) 軽井沢駅舎記念館
- 電気機関車 E F 1 6 - 2 8 (群馬県利根郡水上町)
- JR 上越線・第 1 湯桧曾川橋梁
- キホハニ 5 6 旧・佐久鉄道 ガソリンカー (長野県佐久市大字中込 成知公園)
※旧・佐久鉄道 (現在の JR 小海線) で使われていたガソリンエンジンを搭載した旅客用
鉄道車両、C56-101 とともに公園内に展示。
- 沼間隧道 (煉瓦造・JR 横須賀線)
- 横須賀駅舎
- 長崎電気軌道※長崎の路面電車
- 三池炭鉱専用鉄道・電気機関車
- 門司港駅 (1 9 1 4 (大正 3) 年竣工)
国重要文化財 (旧・門司駅 鉄道の駅舎としては初めて指定される) 1988 (昭和 63) 年
指定
- わたらせ渓谷鐵道・足尾駅構内
- 1 9 2 4 年製造 (ドイツ) シーメンス・シュッケルト社製電気機関車 (上信電鉄デキ I
型)
群馬県富岡市もみじ平総合公園いこいの広場
- 名古屋市科学館 愛知県名古屋市中区栄 2 丁目 1 7 - 1 (白川公園内)
2 4 0 0 形蒸気機関車 (1 9 0 4 年・ドイツ・ハノーファ社製造)
- 旧 東海道本線 稲荷駅ランプ小屋
竣工: 1 8 8 0 (明治 1 3) 年
設計・施工: 不詳
煉瓦造平屋建 棧瓦葺 切妻屋根
京都府京都市伏見区深草稲荷 JR 奈良線・稲荷駅
- 自動車・オートバイ・自転車
- トヨタ博物館 愛知県長久手町
- 船舶・船渠
- 三菱重工・長崎造船所 史料館 長崎県長崎市飽之浦町 1-1
(旧・三菱合資会社・三菱造船所 鋳物工場木型場 1 8 9 8 (明治 3 1) 年 7 月竣工)
※日本最古の堅削盤 (1 8 5 6 年 ロッテルダム・オランダ汽船会社<NSBM>製造)、
国産第 1 号蒸気タービンほか
▽旧・船型試験場▽水槽建家、事務所(1908 (明治 41) 年 5 月竣工 現在は三菱病院健康
管理課)
- 日本郵船歴史資料館
神奈川県横浜市中区海岸通 3 - 9
- ヴェルニー記念館
(旧・横須賀製鉄所 3 t スチームハンマー 0. 5 t スチームハンマー 1 8 6 5 年
オランダ製)
神奈川県横須賀市東逸見町 JR 横須賀駅前 ヴェルニー公園
- 旧・横須賀製鉄所 ドライドック 1・2・3 号 神奈川県横須賀市
- 住友重機械浦賀工場 (造船所) 正門、煉瓦塀、旧・川間ドック
- 記念艦・三笠
横須賀港 (新港) 神奈川県横須賀市新港町

■航空機

- ANA（全日空）機体整備工場
- 石川島播磨重工業（IHI）田無工場・史料館
東京都西東京市向台町3-5-1 石川島播磨重工業・田無工場

■橋梁

- 港一号橋梁（AMERICAN BRIDGE COMPANY 1907 製造）
1909（明治42）年竣工（鉄道院） 飯桁橋（ばんげたきょう）+鋼プラット・トラス橋（クーパー型トラス橋）
- 港二号橋梁（AMERICAN BRIDGE COMPANY 1907 製造）
1909（明治42）年竣工 トラス橋（複線の鉄道橋）
明治30年代以降に登場した重量のある機関車の荷重に耐えられるようなアメリカ系トラス橋の遺構として貴重な橋梁
- 港三号橋梁（旧・大岡川橋梁）
旧・大岡川橋梁は北海道の夕張川橋梁（1906（明治39）年竣工）と総武鉄道江戸川橋梁（1907（明治40）年製作）を転用し、3連の100フィート・ポニー形ワーレン・トラス橋として、1928（昭和3）年に旧・生糸検査所引込線に架設された。この橋は、そのうちの旧・夕張川橋梁の橋長を短縮し、1997（平成9）年に移設したもので、イギリス系トラス橋の遺構として貴重なもの。
- 浦賀船渠株式会社製造鉄道橋梁 1921（大正1）年製造
浦賀船渠株式会社は、現在の住友重機械工業株式会社
日本造船発祥の地ともいえる浦賀に浦賀船渠株式会社が設立されたのは1897（明治30）年
- 足尾銅山
▽旧・小滝橋 大正15年竣工▽足尾橋▽渡良瀬橋▽「古河橋」～1890（明治23）年12月竣工 国内では初期の道路用鉄橋（ドイツ人の設計）
- 両毛線・赤坂川橋台 1889（明治22）年 イギリス積煉瓦造1連アーチ橋
群馬県伊勢崎市安堀町 JR両毛線・赤坂川橋梁
- 旧・坂東橋 橋台
煉瓦造 1901（明治34）年竣工
群馬県勢多郡北橋村
- 鷲石橋
1929（昭和4）年竣工 群馬県に現存する唯一の「鋼プラットトラス橋梁」
群馬県沼田市下川田町・戸鹿野町 利根川
- 旧・吾嬬橋ペンシルバニア型トラス鉄橋（ペチット型トラス橋）
旧・坂東橋として1901（明治34）年竣工後移設 群馬県六合村（村道小雨生須線・白砂川）
- 千歳新橋鋼スパンドレルブレストアーチ橋
1933（昭和8）年竣工 群馬県長野原町川原畑-湯河原
- 善地大橋鉄筋コンクリート・ローゼ桁橋
竣工：1953（昭和28）年
構造形式：鉄筋コンクリート・ローゼ桁橋・・・群馬県内唯一のローゼ桁橋
群馬県群馬郡箕郷町善地・町道4-250号線
- 信越線碓氷峠鉄道施設

橋梁、溝渠（カルバート）

- 東京電力 八ツ沢発電所一号水路橋
山梨県大月市猿橋町猿橋 国登録有形文化財
- 猿橋（山梨県大月市猿橋町猿橋）
伝統的な桔木技術を伝える奇橋
- 博物館・明治村
愛知県犬山市内山1番地
▽六郷川鉄橋▽隅田川新大橋
- 生野鑄鉄橋群
現存するものでは日本最古の鑄鉄アーチ橋
※神子畑川上流の明延鉦山～生野鉦山間の鉦石運搬用鑄鉄橋
▽神子畑鑄鉄橋（兵庫県朝来郡朝来町 現存最古の鑄鉄製単径間アーチ橋 国指定重要文化財）▽羽瀨鑄鉄橋（兵庫県朝来郡朝来町 現存最古の鑄鉄製2径間アーチ橋 兵庫県指定文化財）
- 通潤橋
1854<嘉永7>年7月竣工 灌漑用サイフォン式石造単アーチ水路橋
熊本県上益城郡矢部町大字浜町6番地
- 砥用町石橋群
▽霊台橋(1847年竣工 熊本県下益城郡砥用町) ※日本最大の石造アーチ橋 径間（スパン）27.5m ▽大窪橋（1849（嘉永2）年竣工 熊本県下益城郡砥用町）▽馬門橋（熊本県下益城郡砥用町）
- 眼鏡橋（中島川・第10橋 国指定重要文化財 長崎市栄町～諏訪町）
- 石橋記念館鹿児島県立石橋記念公園（鹿児島市浜町1-3）
▽西田橋▽高麗橋▽玉江橋
- 隧道（トンネル）
- 沼間隧道（煉瓦造・JR横須賀線）
- 信越線碓氷峠鉄道施設 隧道（トンネル）
- JR 上越線・清水トンネル、新清水トンネル内・土合駅地下ホーム ほか（群馬県利根郡水上町）
- ねじりまんぼ
京都市左京区南禅寺福地町
琵琶湖疎水関連施設
- 用水
- 琵琶湖疎水
水路閣 京都市左京区南禅寺福地町
- 河川・砂防
- 八幡川砂防堰堤群
竣工：1881（明治14）年～1885（明治18）年竣工
構造形式：デ・レイケ式石積堰堤4基（堤高 5～10m）
設計者：ヨハニス・デ・レイケ（Johannis de Rijke 1842-1913）・・・明治政府お雇いオランダ人技師
施工者：内務省直営
群馬県北群馬郡榛東村新井・八幡川

■水道・ガス

- 東京ガス・がす資料館（東京都小平市大沼町2-590）
- 九条山浄水場ポンプ室（琵琶湖疎水） 京都府京都市山科区日ノ岡朝田町
- 山之内浄水場導水管（琵琶湖疎水） 京都府京都市

■灯台・港湾・運河

- 三池港・開門式水門（明治41年）
※開門扉、機械室、スルースゲート、三池式快速石炭船積機3号機、蒸気式クレーン船
- 横浜開港資料館（旧・英国総領事館）
1931（昭和6）年竣工 神奈川県横浜市中区日本大通3
- 観音埼灯台・灯台資料展示室
- ペリー公園（ペリー上陸記念碑・じょうきせんの碑・ペリー記念館）
- 御前埼灯台（1874（明治7）年竣工）
- 御前埼見尾火燈明堂（復元）（1635（寛永12）年設置）
- 50トン定置式電気起重機（1914（大正3）年竣工・横浜新港埠頭8号岸壁）
- 琵琶湖疎水・インクライン
京都市左京区栗田口山下町、南禅寺福地町、草川町、京都市東山区東小物座町
- 三栖開門、三栖開門資料館 京都市伏見区三栖町

■建築

- 旧・新橋停車場復元駅舎 東京都港区東新橋1丁目5番地
日本最初の本格的な洋風駅舎（木骨石張2階建）で、1871（明治4）年竣工、設計はR. P. ブリジェンス（米国人技術者）
- 旧・岩崎家茅町邸 洋館、和館、撞球室、庭園、袖塀、煉瓦塀<重要文化財>三菱財閥岩崎家本邸（のち最高裁判所司法研修所）1896（明治29）年竣工（洋館・撞球室）設計：ジョサイア・コンドル 東京都台東区池之端一丁目3番1号、一丁目3番45号
- 旧・東京音楽学校奏楽堂
- 江戸東京たてももの園（東京都小金井市桜町3-7-1・都立小金井公園内）
- 横浜税関 1934（昭和9）年竣工
- 日本新聞博物館（旧・横浜商工奨励館 1929（昭和4）年竣工）
神奈川県横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
- 横浜開港資料館（旧・英国総領事館）1931（昭和6）年竣工 神奈川県横浜市中区日本大通3
- 横浜開港記念館 1917（大正6）年竣工
- 旧・逸見波止場衛門（旧・日本海軍横須賀軍港表門）
神奈川県横須賀市東逸見町 JR横須賀駅前 ヴェルニー公園
- 足尾銅山
▽「掛水倶楽部」～古河鋳業（現在の古河機械金属）足尾事業所迎賓館 木造洋風建築 1899年竣工▽鋳山電話資料館▽旧・古河鋳業足尾鋳業所事務所書庫 明治43年竣工 煉瓦造▽足尾銅山渡良瀬社宅
- 旧・時報鐘楼
1915（大正4）年 鉄筋コンクリート造煉瓦張り建造物 伊勢崎市指定重要文化財 群馬県伊勢崎市曲輪町28番地
- 黒羽根内科医院
▽旧・本館 1912（明治45）年竣工▽旧・今村医院 1904（明治37）年竣工（群馬県内）

- 最古の木造洋風医院建築 木造 2 階建寄棟造瓦葺 伊勢崎市重要文化財) 群馬県伊勢崎市曲輪町 3 1 番地
- 旧・大間々銀行営業所本館
設計：小林力雄 1912 (大正 10) 年竣工 木骨石積タイル張り 2 階建寄せ棟造洋風建築
群馬県山田郡大間々町 1 0 3 0 大間々町歴史民俗館 (コノドント館)
 - 旧・アメリカンボード宣教師館 群馬県指定重要文化財
群馬県前橋市小屋原町 1 1 1 5 番 3 (共愛学園小屋原キャンパス)
 - 旧・沼田貯蓄銀行本店 群馬県指定重要文化財
木造瓦葺二階建 1903 (明治 36) 年頃または 1908 (明治 41) 年頃に竣工
群馬県沼田市材木町 2 2 1 番地の 2
 - 旧・利根農林同窓会館 群馬県沼田市材木町
 - 旧・吾妻第三小学校・校舎
1885 (明治 18) 年竣工 設計：樋田栄太郎 木造平屋建寄棟鉄板瓦葺
群馬県指定重要文化財 1978 (昭和 53) 年 10 月 13 日指定 群馬県吾妻郡中之条町中之条 9 4 7 - 1
 - 旧・碓氷社 本社事務所
1905 (明治 38) 年竣工 設計・施工 阿部七太郎 木造瓦葺入母屋造二階建
群馬県指定重要文化財 1991 (平成 3) 年 2 月 26 日指定
群馬県安中市原市二丁目 1 0 番 1 6 号
 - 旧・中込学校 国指定重要文化財・国史跡
(長野県佐久市大字中込 1 8 7 7 番地)
1875 (明治 8) 年竣工、設計・施工 市川代治郎、木造二階建寄棟造棧瓦葺
 - 旧・和学校校舎
(1979 (昭和 54) 年 3 月 22 日 長野県宝指定) ※1879 (明治 12) 年竣工の和洋折衷様式の学校建
 - 春原家住宅 (国指定重要文化財) (長野県小県郡東部町和 7 1 9 2 - 1)
※長野県東南部の特徴を示す住宅 (農家) 様式
 - 旧 京都中央電話局上京分局庁舎
竣工 1924 (大正 13) 年 設計 吉田鉄郎 鉄筋コンクリート造 (京都市登録文化財)
京都府京都市上京区丸太町通中筋東入ル レストラン「カーニバルタイムズ」
 - 富士ラビットスクーター (旧・日光社社屋)
竣工：1925 (大正 14) 年 鉄筋コンクリート造 (国登録文化財)
京都府京都市下京区七条通新町西入夷之町 7 2 1 「なか卯」七条新町店
 - 松本酒造 酒蔵・煉瓦建造物 (倉庫・煙突) 京都府京都市伏見区横大路三栖大黒町 7
 - 大蔵省造幣局造幣博物館 大阪府大阪市北区天満 1 - 1 - 7 9
 - 門司港周辺の歴史的建造物 (福岡県北九州市門司区)
▽門司港駅(1914 (大正 3) 年竣工) 国重要文化財 (旧・門司駅 鉄道の駅舎としては初めて指定される) 1988 (昭和 63) 年指定▽旧・門司税関庁舎 旧・大阪商船三井船舶株式会社門司支店(1917 (大正 6) 年竣工) 文化庁・登録有形文化財・第 40-0008 号) ▽旧・門司三井倶楽部(1921 (大正 10) 年竣工) ▽旧・三井物産門司支店 (昭和 11 年竣工 現在は J R 九州第一庁舎) ▽旧・東清鉄道汽船会社事務所 (北九州市立国際友好記念図書館) ※大連市にある旧・東清鉄道汽船会社事務所(1902 年竣工) を複製 (1994 年 12 月竣工) した

もの▽旧・ホームリンガー商会

- 旧・日本生命福岡支店（福岡県福岡市中央区天神町1-15-30）
※1909（明治42）年竣工 設計：辰野金吾 国重要文化財 現在は福岡市赤煉瓦文化館
- 旧・長崎税関下り松派出所
- 旧・香港上海銀行長崎支店（香港上海銀行長崎支店記念館）煉瓦建造物
- 日本ペイント 明治記念館
（日本最古<1909（明治42）年>の煉瓦造 油・ワニス工場）
東京都品川区南品川4-1-15 日本ペイント株式会社・東京事業所内
- 横浜赤煉瓦倉庫1号館、2号館（横浜新港埠頭保税倉庫）
1911（明治44）年竣工 設計：妻木頼黄 神奈川県横浜市中区新港1-1-1
- 旧・上毛燃糸工場 1912（明治45）年 煉瓦造平屋建鋸屋根工場
- 群馬県前橋市内の煉瓦倉庫
▽旧・安田銀行担保倉庫 1915（大正4）年竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根▽上毛倉庫
会社 表町2号・3号倉庫 1895（明治28）年竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根▽旧・山賀
酒造 倉庫 1926（大正15）年竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根▽旧・大竹酒造 倉庫・煉
瓦煙突 1913（大正2）年竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根▽本町二丁目煉瓦倉庫 1
904（明治37）年以前の竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根▽日吉町二丁目 煉瓦倉庫
大正初期竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根▽平和町一丁目 煉瓦倉庫 昭和初期竣工 煉
瓦造二階建・瓦葺屋根▽さわや酒店 倉庫 1920（大正9）年竣工 煉瓦造二階建・
瓦葺屋根▽千代田町一丁目 煉瓦倉庫 大正初期竣工 煉瓦造二階建・瓦葺屋根・座敷
蔵
- 岡醬油醸造株式会社・煉瓦煙突 群馬県高崎市常盤町
- 旧・茂木銀行 煉瓦門柱・煉瓦塀（財団法人・山田文庫） 群馬県高崎市常盤町25
- 米庄商店 旧・米貯蔵倉庫 群馬県安中市3丁目16-15
- 信越線碓氷峠鉄道施設 旧・丸山変電所
- 旧・官営富岡製糸場 1872（明治5）年竣工
群馬県富岡市富岡1番地 片倉工業株式会社・富岡工場
- 旧・小幡組製糸工場 繭倉庫 1926（大正15）年竣工
群馬県甘楽郡甘楽町大字小幡852-1 甘楽町歴史民俗資料館
- 旧・小野蚕糸倉庫（小野農業倉庫）（旧・下高尾農協・繭倉庫） 煉瓦造倉庫
群馬県富岡市下高尾485-1
- 吉野組製絲所・煉瓦煙突（大正時代竣工）群馬県渋川市川原町2216番地
- 旧・吾妻倉庫（株）煉瓦倉庫
（群馬県吾妻郡中之条町伊勢町942（株）光山倉庫）
- 旧・日本煉瓦製造会社・煉瓦製造施設
▽旧・事務所（日本煉瓦史料館）1888（明治21）年 国指定重要文化財▽ホフマン輪窯
6号窯 1907（明治40）年 国指定重要文化財▽旧・変電室 1906（明治39）年 国指
定重要文化財▽備前渠鉄橋（深谷上敷免間鉄道）1895（明治28）年 国指定重要文化財
埼玉県深谷市大字上敷免89番地 日本煉瓦製造株式会社
- 旧・本庄商業銀行担保倉庫 1894（明治27）年 国指定重要文化財
埼玉県本庄市銀座1-5-16 ローヤル洋菓子・本社工場売店
- 旧・古河鋳業 日光発電所 煉瓦造
- ノリタケ（日本陶器）旧製土工場（瓦葺煉瓦造3階建）

- 愛知県名古屋市中区則武新町3 (株)ノリタケカンパニーリミテド
- 産業技術記念館 (旧・豊田紡織本社工場)
愛知県名古屋市中区則武新町4丁目1番35号
 - 水路閣 (琵琶湖疎水) 京都市左京区南禅寺福地町
 - ねじりまんぼ 京都市左京区南禅寺福地町
 - 琵琶湖疎水関連施設
▽九条山浄水場ポンプ室 (琵琶湖疎水) 京都府京都市山科区日ノ岡朝田町▽蹴上発電所日本で最初の事業用水力発電所 京都府京都市左京区栗田口▽関西電力夷川発電所
竣工:1914 (大正3)年 京都府京都市左京区聖護院蓮華蔵町
 - 旧 東海道本線 稲荷駅ランプ小屋
竣工:1880 (明治13)年 煉瓦造平屋建 棧瓦葺 切妻屋根
京都府京都市伏見区深草稲荷 JR奈良線・稲荷駅
 - 旧 京都電燈伏見発電所
煉瓦造切妻屋根二棟 (東棟:ワーレントラス屋根二階建、西棟:フィンクトラス屋根)
竣工:1902 (明治35)年頃 京都府京都市伏見区東浜南町680 (株)モリタ製作所
本社工場
 - 松本酒造 酒蔵・煉瓦建造物 (倉庫・煙突) 京都府京都市伏見区横大路三栖大黒町7
 - 舞鶴市立赤れんが博物館 (旧・日本海軍舞鶴鎮守府兵器廠倉庫 (魚形水雷庫))
京都府舞鶴市浜2011番地
 - 舞鶴市政記念館
京都府舞鶴市北吸1039-2
 - 舞鶴市赤煉瓦倉庫群 (舞鶴倉庫、海上自衛隊舞鶴地方総監部)
京都府舞鶴市
 - 三井・田川炭鉱・大煙突 (1908 (明治41)年3月竣工)
 - 旧・三池集治監外壁 (福岡県立三池工業高校外壁)
 - 三菱重工・長崎造船所 史料館 (旧・三菱合資会社・三菱造船所 鋳物工場木型場 1898 (明治31)年7月竣工)
※日本最古の豎削盤 (1856年 ロッテルダム・オランダ汽船会社<NSBM>製造)、国産第1号蒸気タービンほか
三菱重工・長崎造船所 旧・船型試験場 水槽建家、事務所 (1908 (明治41)年5月竣工
現在は三菱病院健康管理課)
 - 寶製網株式会社煉瓦倉庫
 - 窯業・煉瓦製造
 - 旧・下野煉化製造会社ホフマン式輪窯
(1890 (明治23)年築窯・1979 (昭和54)年国指定重要文化財)
栃木県野木町野木大手箱3324-1 ロイヤルホースライディングクラブ内
 - 舞鶴市立赤れんが博物館 (旧・日本海軍舞鶴鎮守府兵器廠倉庫 (魚形水雷庫))
京都府舞鶴市浜2011番地
 - 旧・神崎煉瓦ホフマン式輪窯
(旧・京都竹村丹後製窯所・ホフマン式輪窯 明治末~大正頃?築窯)
京都府舞鶴市西神崎918 神崎コンクリート株式会社神崎工場内
 - 関西電力・大井発電所
岐阜県恵那郡蛭川村奥渡

- 旧・日本煉瓦製造会社・煉瓦製造施設
 - ▽旧・事務所（日本煉瓦史料館） 1888（明治 21）年 国指定重要文化財▽ホフマン輪窯 6 号窯 1907（明治 40）年 国指定重要文化財▽旧・変電室 1906（明治 39）年 国指定重要文化財▽備前渠鉄橋（深谷上敷免間鉄道）1895（明治 28）年 国指定重要文化財 埼玉県深谷市大字上敷免 8 9 番地 日本煉瓦製造株式会社
- 日本ペイント 明治記念館
 - （日本最古<1909（明治 42）年>の煉瓦造 油・ワニス工場）
 - 東京都品川区南品川 4-1-15 日本ペイント株式会社・東京事業所内
- 工業化学・応用化学
- （株）三井化学大牟田工場・J 工場
- 日本ペイント歴史館
 - 大阪府大阪市北区大淀北 2-1-2 （株）日本ペイント・本社ビル 1 階
- 日本ペイント 明治記念館
 - （日本最古<1909（明治 42）年>の煉瓦造 油・ワニス工場）
 - 東京都品川区南品川 4-1-15 日本ペイント株式会社・東京事業所内
- 醸造
- 松本酒造 酒蔵・煉瓦建造物（倉庫・煙突）京都府京都市伏見区横大路三栖大黒町 7
- 繊維
- 旧・内務省勸業寮屑糸紡績所
 - （旧・製品倉庫 1877（明治 10）年竣工 木造煉瓦造
 - 設計・施工：佐々木長淳、グレーフェン、山添喜三郎）
 - 群馬県多野郡新町 2330 カネボウ・フーズ株式会社・新町工場内
- 旧・上毛撚糸工場（富士重工業・旧伊勢崎製作所第 2 工場）群馬県伊勢崎市平和町 19 番地
- 碓氷製糸農業協同組合 群馬県碓氷郡松井田町新堀甲 909
- 吉野組製絲所 群馬県渋川市川原町 2216 番地
- シルク博物館 神奈川県横浜市中区山下町 1 番地 シルクセンター内
- 群馬県立「日本絹の里」
- 産業技術記念館（旧・豊田紡織本社工場）
 - 愛知県名古屋市中区則武新町 4 丁目 1 番 3 5 号
- 農林水産
- 北国街道・海野宿
 - 海野宿資料館 （長野県小県郡東部町 281-2）
 - ※重要伝統的建造物群保存地区、明治以降の養蚕のための養室づくり
- 印刷
- 日本新聞博物館（旧・横浜商工奨励館 1929（昭和 4）年竣工）
 - 神奈川県横浜市中区日本大通 1-1 横浜情報文化センター
- 熊本日新聞・新聞博物館
 - 熊本県熊本市世安町 172 熊本日新聞社 2 号館 5 階
 - ※マリノニ型輪転機、国産ワープロ 1 号機、活字ケース、ゲーテンベルクの印刷機<複製>

(4) 産業観光

産業遺産にとどまらず、産業そのものを観光に活かす「産業観光」という概念があり、近年注目を集めている。そこで、ここでは「産業観光」について見てみる。

旅行スタイルの変化に伴い、旅行ニーズは多様化・個性化しはじめている。従来型のマストツーリズムから新しい観光への模索がなされ始めている。

マストツーリズムは観光地にごみや混雑などの社会問題や環境破壊・環境汚染、文化の変容などの多くのダメージをもたらしてきた。最近では、こうしたあり方を改めて、持続可能な新しい観光の展開が唱えられているが、ニーズの側面からも、観光客が成熟化してきたことや子どもの教育などの観点からも新しい観光が模索されている。

新しい観光の形態として注目されているのは、産業観光、グリーンツーリズム、エコツーリズムなどで、これらの観光形態は学習と交流という機能を兼ね備えている。

経済活動の低迷による総需要の伸び悩み、国際化の進展による海外旅行と国内観光との競合等、国内観光を取り巻く環境は厳しい。しかし、だからこそ今これまでとは違ったかたちのツーリズムに関心がよせられており、さらにいえば、これまで純粋な意味での観光がなかった尼崎においても新たな観光の芽を育むことができるということにもなるのではないか。その一つとして提案したいのが、産業遺産観光であり産業観光である。

産業観光とは、交通経済用語辞典によると「産業の内容を対象とする観光」とされ、「自然・文化・社会などの観光資源とならんで重要な観光資源の一つであり、工場・工業施設・農業施設などを内容とするものである。造船所・自動車工場・港湾設備等を外国人旅行者に見せることは、国自身のPRにも役立ち、商品・技術の輸出、企業の輸出の増進にも寄与し、国内的には教化の面で重要な意義がある。」とされている。

近年の観光動向は、団体旅行が減少し、家族旅行や少人数による個人旅行へと移行が進んでおり、これに伴い、従来が頼ますツーリズムから様々な個人ニーズに対応した観光形態が求められるようになってきている。また、観光の成熟化により、自然景観などを見る銃ら鶴方の観光形態以外に、交流、体験、学習など観光の概念の幅を広げる新しい慣行形態へのニーズが増大している。

また、近年では経済社会の構造変化の波が地域に強く影響を与えている中で、観光が地域活性化のツールとして注目を集めており、観光による地域活性化のために、新しい視点から地域の資源を観光に生かすことが求められている。

産業観光自体は、以前から食品工場や伝統工芸等の見学や視察という形態が行われており、産業観光という言葉自体は知らなくても一般に親しみがあると思われるが、最近では、新しい観光資源としてとらえられている近代産業遺産を対象とした産業観光が注目されている。

1 産業観光の社会的・経済的意義

産業観光は観光形態の一つであるが、一般の観光と比べると単独では直接的な経済波及

効果は小さい場合が多い。

しかし、観光振興のほかに、地域産業野活性化、街づくり、文化振興、人づくりなど地域の社会面、経済面のさまざまな分野に相乗的な効果をもたらすものと考えられる。

○社会的意義

・まちづくり

産業の歴史や風土を活かした町並みの創出と地域全体の売り出しにより来訪者の増加が可能であるなど賑わいのあるまちづくりが期待できる。

また、住民にとって地域の魅力の再発見やアイデンティティの確立に寄与する。

・歴史・文化の保存と活用

産業観光により、伝統産業などが地域固有の文化として継承されることが期待できる。また、近代産業遺産の発見や保存への働きかけが観光への活用により容易になる。

・人材育成

産業に対する誇りが高まることにより、事業系商社の確保や育成が容易になる。また、住民の地域固有の歴史、文化に対する認識が醸成される。子どもたちの教育にも効果的であり、さらに、地域の歴史・文化を語り伝える人材を育てることも可能となる。

○経済的意義

・観光の振興

自然資源や観光、職などの既存または新しい観光資源と近代産業遺産や工場見学等の産業観光資源を融合することにより、地域の新しい魅力を発信でき、観光客の誘致に繋がる。また、産業観光により来訪者が地域を良く知ることができ、リピーターの増加にも繋がる。

・地域産業の活性化

工場見学や技術見学、さらに体験や学習を通して生産者と消費者の交流が進むことにより、生産者にとって消費者の製品に対する反応を見ることができ、こうしたことは、産業野担い手にとって自らの産業に誇りを持てる機械でもあり、農林業や地場産業など担い手不足の対策ともなりえる。

また、来訪時に購入した消費者が製品の固定客となる可能性があるなど販路拡大にも寄与する。

2 産業観光の情報発信

産業観光は注目を集めているとはいえ、いまだに研修や学習というイメージがつよいといえる。主要なターゲットとしては、まず修学旅行などを行う賞・中・高校である。学校では総合的学習に力を入れており、体験や学習が可能である。最初は県外など遠方からの修学旅行の誘致よりも日帰りも含めた身近な教育旅行を推進することも一つの方策である。

また、一般の観光客も取り込んでいくためには、エンターテインメント性―地域文化を楽しむということ押し出した情報発信が必要であろう。それには旅行会社のツアー企画者などの体験ツアーをしてもらい、魅力を感じてもらうとともにプロの目からの意見を得ることも必要である。

体験・交流に関心を持つ家族、これまでの物見遊山的な観光では飽き足らない高齢者そう、アクティブな女性グループは企画の仕方によっては有望なマーケットと考えられる。

マップや冊子の作成

様々な体験は、エンターテインメントの要素が加わると楽しみが増す。また、産業遺産の探索は吸収やロマンを感じさせる要素を備え持っている。こうしたレジャー感覚としても

楽しめ、ロマンを感じさせるようなマップや冊子が必要である。

最近では「サライ」など大人向けの雑誌で産業遺産の紹介がされていたり、産業遺産にかかわる書籍が数多く出版されていたりする。しかし、ガイドブックについてはまだ見られない。

旅行商品開発

産業観光は、個々の資源単独では魅力を発揮することはできない。産業観光資源間やその他の観光資源、他地域の観光地と関連させ、物語性のある商品開発がなされることが必要である。

こうした商品開発は地域の観光事業者が主体となって取り組まなければならない。地域の観光事業者をまとめる観光協会などの機能がきわめて重要であり、来訪者への情報提供やホームページの作成という「待ち」の姿勢ではなく、商品開発や大手エージェントへのプロモーションなどの「攻め」を積極的に展開していくことが大切である。また従来、観光協会は観光事業者のみが会員となっているが、産業観光ではこのほかにも様々な主体が関与する。必要に応じてこれらの機能を持つ地域旅行会社を作るべきであろう。すでに官民共同出資で設立された長野家に出だしの南信州間航行者や観光協会を国内で始めて株式会社化した北海道ニセコ町など地域旅行会社が設立されている地域がある。

平成 16 年 4 月 13 日の日刊工業新聞に掲載された「社説―地域活性化」を引用する。

「産業観光を軸にした施策を」

政府が 03 年を「訪日ツーリズム元年」と位置づけ、観光振興に取り組みだしたことから、地方自治体の熱意も盛り上がり始めている。一方で、経済産業省・中小企業庁が 04 年度からジャパン・ブランド創出支援事業に乗り出したことで地域のブランド創出熱も高まっている。この二つの施策をつなぐ「産業観光」という考え方を軸にした、有機的な施策の展開が望まれる。

政府は昨年 7 月の第 2 回観光立国関係閣僚会議で環境立国行動計画を決定、①21 世紀の進路「観光立国」の浸透②日本の魅力・地域の魅力の確立③日本ブランドの海外への発信―などを掲げ、今年 1 月の小泉潤一郎首相の施政方針演説では 2010 年に訪日外国人旅行者を倍増させる政策目標を打ち出している。

一方で、中小企業庁は中小企業や地場産業などが地域特性を生かした製品の開発や、製品の高付加価値化を図ることなどにより、海外を含む広域的なブランドを確立しようとの活動を支援することになっている。

二つの施策に今のところ接点はない。政策の重複を回避する意味から、ビジット・ジャパン・キャンペーンを展開している国土交通省は従来型の観光で、ジャパン・ブランド創出に取り組む中小企業庁は産業的視点で、観光的支店は除外して政策を組み立てている。だが、2つの政策は産業観光という新しいツーリズムの考え方に立つと、一体のものともなる。産業観光とは歴史的・文化的価値を持つ産業文化財や生産現場、さらには工業製品などを観光資源と使用というもの。そのためには、ブランド化が必要となる。

現在、最も熱心に産業観光と取り組んでいるのが愛知県。トヨタ自動車のトヨタ

博物館や産業技術記念館、また則武の祖説などを利用、キャンペーンを展開している。16日から開催される「旅フェア 2004 愛知・名古屋」でも各種イベントを計画、修学旅行や公害学習の誘致活動にも取り組んでいる。

こうした産業観光は積極的に推進する必要がある。特に疲弊している地方経済の建て直しのためにも、産業に関連したブランド作りを施策の中心に据え、各省庁が一体となって推進すべきだ。

<参考>

新聞記事 【省略】

「産業観光のいま 1 食品工業団地」

「産業観光のいま 2 地場産業」

新聞記事 【省略】

「産業観光のいま 3 「参加型」工場」

「産業観光のいま 4 素材重視」

新聞記事 【省略】

「産業観光のいま 5 苦悩の重工業」

(5) 産業遺産の活用のための課題

産業遺産を活かすということを考える時の課題としては、次のようなことが考えられる。

- ① 遺産を保全し活用することに対する法制度的な整備が必要。
- ② 持続的な活用や保全をしていく上での情報や経験交流、あるいは事例の紹介、人材の育成、共同調査、コンサルティングなどができるような推進体制の整備。
- ③ 産業遺産を保全し活用するためには、補修、移築、復元、展示、コンサルタント、イベントなど、いろいろな民間の既存の産業を含めた協力が必要になってくる。

従って、産業遺産ではなくて、「遺産産業」をどうやって育てるかというのが大きな課題になってくる。遺産産業を基礎に観光を企てなければ、社会見学レベルにとどまってしまう。

◎工場見学に関するアンケート調査結果

平成15年9月26日から10月にかけて、58社（平成13年度に財団法人あまがさき未来協会で実施した産業遺産調査の対象工場）にアンケート調査票を配布、1回の督促を行った。アンケートでは対象工場に産業遺産が存在することを説明したうえで、工場見学の受け入れについて「受け入れる」「条件によって受け入れる」「受け入れない」の選択とその理由を尋ねた。

その結果58件中、19件の回答を得られた。以下はその結果と自由筆記欄での回答である。

■受け入れる 3件

- ▽ 事前に総務部まで連絡申込み。10人以内でお願いしたい。

■条件によって受け入れる 10件

- ▽ 建築物の見学は受け入れておりません（一部の工場なら可）。＜理由＞構内通行車両多く、危険であり、また案内対応者が不足。
- ▽ 構内のみなら可。
- ▽ 事務所のみ、学術的な調査、視察であれば可。
- ▽ 条件は特別に決めておりません。お話を聞き判断させていただきます。
- ▽ 構内にはグループ企業以外のテナント企業もあり、また、顧客及び秘密保持の観点から希望に添えない場合もある。
- ▽ 当社は4月上旬の桜満開時（第1週の土・日）に工場開放しております。その時の利用を受け入れます。

■受け入れない 6件

- ▽ 受け入れは非常に労力を要するので、ただの見学では受入れ難い。
安全管理・知的財産管理の観点から一般の工場見学は受入しておりませんのでご了承願います。
- ▽ 受け入れに際しては事業所としてもある程度の準備が必要となります。対応者の

問題等、安全面も考慮し、現在事業所運営上必要最低限の工場見学を実施しております。事情ご賢察ください。

尼崎産業遺産に関する調査研究報告書を同封し、貴重な産業遺産を見学したい旨書き添えてアンケート調査を行ったものの、望ましい成果は得られなかった（「受け入れる」「条件によって受け入れる」あわせて13件は予想より多かったともいえる）。このアンケートはあくまでも調査として行ったものであり、見学実施にむけて再度のアプローチは行っていない。しかし、産業遺産についての認識が浸透し、市民ニーズが高まり、公共或いは公共的機関が主体となって見学を組むなど、体制が整えられ、条件を提示して依頼すれば更なる可能性はあると思われる。

（２）克服しなければならない状況

検討を加えていく段階で認識した、尼崎市において産業遺産を観光資源として活用していくために解決すべき課題は次のとおり。

- 見学できる工場が少ない。大半の工場が素材型であり、危険施設が多く、工場見学を受け入れがたい状況にある（次項アンケート結果参照）。休日は工場が稼動していないため、見学ができないばかりでなく、機械設備が動いておらず、ダイナミックな景観をみることができない。
ある程度観光事業を実施する主体や受け皿、協力体制が固まり、可能性が出てきた時点で各工場に協力を求めなければ、現時点で場当たりに見学可能な工場をあたっていくのは観光を育てるためにはあまり意味を持たない。
- ほとんどの産業遺産が工場の奥部にあり、見るのが難しい。（ただし、事務所棟は入り口近くにあることが多く、見学を受け入れていない工場でも外観のみを見ることは可能。）
- 産業遺産として活用しようとした場合、郊外にある工場であれば、保存活用しやすいものの、尼崎のように利便性の高い立地であれば、すぐに取り壊され、他用途に転用されてしまう。
- 公的機関が主体となって、市民等をつのり工場に見学を依頼するなら、受け入れてもらえる可能性はあるが、現在のところその体制は組みがたい。（従って、今後の取り組みとして、試行的なツアーを組むことを提案したい。）
- 自動車、ましてや観光バスを駐車できるスペースがない。

そのほか、たとえば、観光コースを例示して自家用車、自転車、バス、徒歩などで周遊してくださいというPRをしても、トラックが多くて危険、お茶を飲む場所もないなどの問題があり、見学コースを示したパンフレットを作成し、自由に見学してくださいとPRするのも躊躇がある。

とはいえ、こうしたネガティブな要素を克服することによって、従来の観光行動とは違った視点での楽しさを演出できる可能性がでてくる。

ただし、現状をそのままに、スポットを紹介し、無理やりにモデルコースを選定するのではなく、来た人に満足してもらえる、仕組みや装置を整備することが不可欠である。

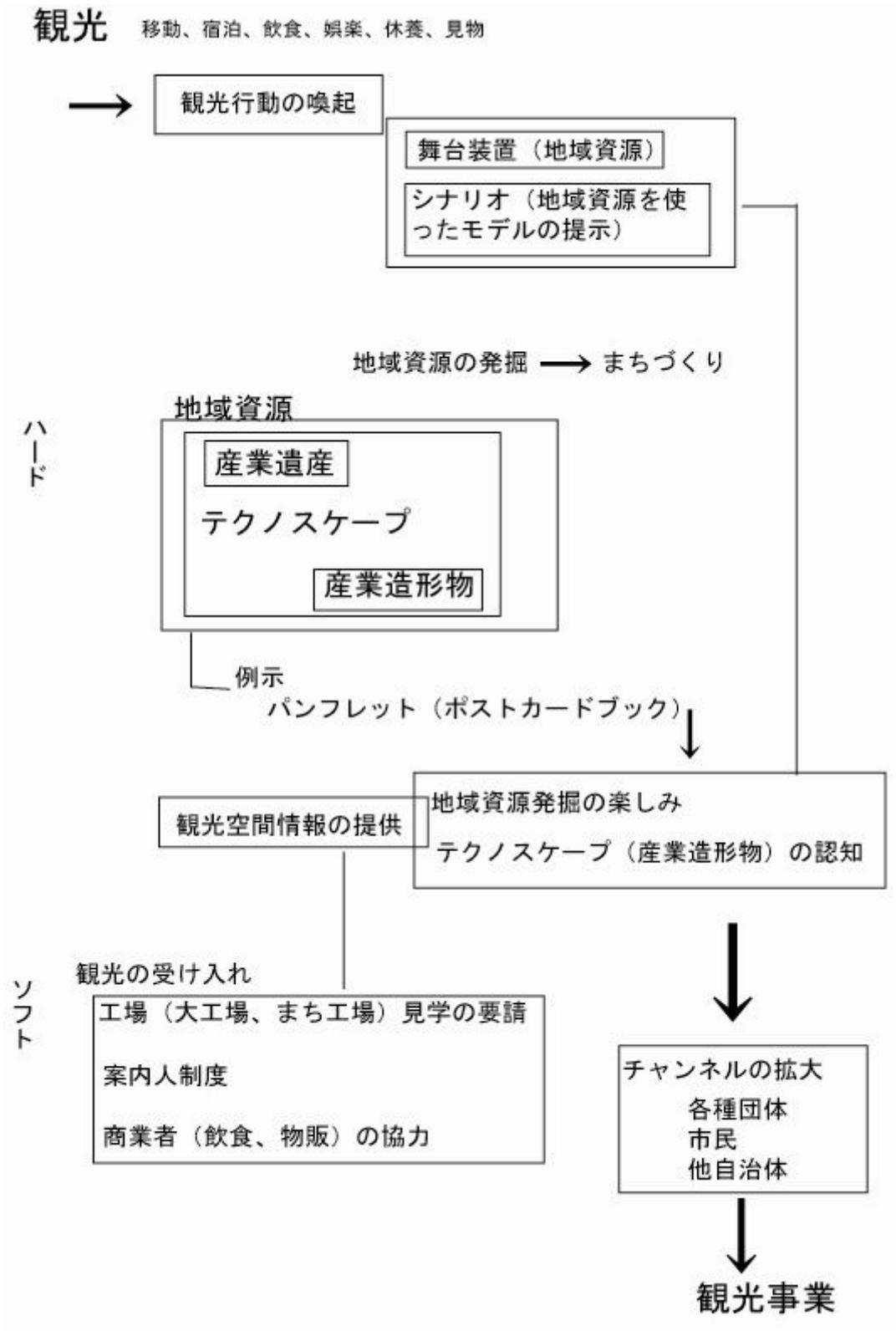
尼崎において観光を事業化することは現時点では非常に困難であることが分かったが、もし観光事業を実施するとしたらどのような取り組みが必要かをまとめておくこととする。

＜次ページ図参照＞

観光は移動、宿泊、飲食、娯楽、休養、見物といった行動を伴う。こうした行動を喚起することによって、観光行動のもたらす効果が生まれ、経済活動が活性化する。

尼崎市において、産業遺産やテクノスケープといった地域資源をシーズとして観光行動を喚起するためには、この産業遺産やテクノスケープのもつ価値（面白さ）をパンフレット等によって例示するなど、観光空間情報の提供を積極的に行わなければならない。というよりも、こうした情報提供がなければ、誰の目にも尼崎のもつ地域資源の存在は見えてこないのである。そして、この地域資源の存在をより効果的にアピールするために、産業遺産やテクノスケープ（次章に詳細を記述）を利用した観光のシナリオを作る必要がある。そのためには、例えば見学を受け入れてくれる工場や飲食やみやげ物を提供する商店の協力が不可欠であろう。ただ、誰が見ても分かりやすい観光の目玉があるというわけではないので、各種団体や市民の協力も必要であろう。（次ページ＜概念図＞参照）

<尼崎市における観光事業の概念図>



産業遺産を活用する研究をとおして、特に工場地帯を見て歩くにつれ、産業遺産のみではなく（産業遺産というインパクトは強いが）、工場のもたらす風景そのものに大きな価値があるのではないかという思いが研究会の会員それぞれに強くなっていくとともに、そうした工場の景観を「テクノスケープ」と呼んで評価したり、工場関係の造形物をホームページにしたりしている動きがあることがわかってきた。

そこで、研究会においては産業遺産にとらわれず、工場景観そのものの美しさ、面白さを評価することとし、議論を繰り返すこととなった。

そして、会員からの発案により、一度工場地帯で絵葉書の風景をさがしてみようということになり、自転車を連れ、あるいは個別に、国道43号以南の臨海部を中心に美しい、あるいは面白い工場風景を渉猟することとなった。その結果、研究会のレポートをまとめて印刷物にするために用意していた予算を使って、広く市民に日ごろなじみの薄い工場景観を紹介し、その良さをPRする冊子を編集することとした。

冊子には「工都の情景」というタイトルをつけ、産業遺産にととまらず「テクノスケープ」という概念を説明するものとし発行した。このことについては次章で詳述する。

7 産業造形物或いはテクノスケープ

(1) 地域資源としての産業遺産

すでに見てきたように、現状において、産業遺産を活用することは理想論にとどまり、その可能性は限りなく低い。しかしながら、こうした地域資源が存在することの価値は、市民が共有しておきたい。

工場は日常生活からは隔絶された存在であり、環境の面からは忌避されるものであったが、尼崎市においては、歴史的にも物理的にも大きな存在であり、そのまま無視してしまうのはあまりにももったいない。社会的評価を受けるまもなく消滅の危機に晒されているこれらの地域資源を認識し、市民や各種団体に広めていくことによって、時宜を得たときに、活用できる基盤をつくっておくことが今できる最良の策であると考えられる。

ニーズが高まってきた時点で、産業観光を実施するための基礎資料をもっておく。工場が廃止されるときに、状況が許せば、産業遺産としての建築物や機械あるいはその一部を保存活用することもできる。

そこで、産業遺産が多く存在する尼崎南部臨海部の工場地帯を実地調査することによって、次のような視点をえた。

- 産業遺産とは休止あるいは打ち捨てられたものとのイメージがあるが、必ずしもそうではない。現在稼働中のものも含まれる。だとしたら、南部臨海部の工業専用地域全体が産業遺産であるとのとらえかたもできるのではないか。
- 産業遺産だけをありがたがるのではなく、その他新しいものも含めて、造形的に面白いものが多い。また、風景のある部分を絵葉書のように切り取ると、日常的には目にすることのない新鮮な景観があることがわかる。
- パイプや煙突、クレーンなど工業地帯を象徴するような各種造形物を産業造形物と呼んで分類してみれば、景観をみる目にも深まりがでて面白いのではないか。

(2) 地域資源の認知

産業遺産の観光資源としての活用ということで検討を進めてきたが、既述のとおり、現状では社会教育的見地からの見学はなりたちうるであろうが「観光」に即むすびつけることは難しい。

観光は明らかな経済活動をともなうものであり、そのための仕組みを用意しなければならない。

将来、観光に活かすための要素として、比類なき地域資源としての「工業都市の風景」の持つ価値を認識し、資料を準備しておくことが、今できる最善の手段であると考えられる。

そこで、テクノスケープという考え方、そして、その中に含まれる産業遺産の価値ということについて、次に考えておくこととする。

(3) 工場景観の価値

特に尼崎南部工業地帯には工場の持つ独特の景観があり、全体として産業遺産といっ

てもいいのではないか。大きな風景（テクノスケープ）を構成する各種造形物や構造物があり、その中に一定の評価を受けた産業遺産が潜んでいるという構造である。

産業遺産とは法的規範のなかでとらえることもできるが、ある程度古びて、しかも残しておく価値があるものといってもいい。懐古趣味や廃墟趣味から、その語感になにかしらの雰囲気がかまわりついてきたのも否めない。

工場地帯或いはそれを構成する様々な要素を持つ価値を認識し、その中から特に残しておきたいものを、みんなで守っていく、またはそうした議論がおこなわれるという環境をつくっていききたい。

物の価値というのは絶対的なものではなく、それをとらえる主体に内在するものである。高価なダイヤモンドであっても、今日の食事に事欠く人にとっては無価値（売れば別）である。

産業遺産に価値を認める。一部では市民権をえた価値観であろう。では、産業遺産とはなにか。法体系に組み込まれたことによって、価値を生じたことは間違いのない事実にはせよ、まだまだひとつによってニュアンスの違った言葉ではある。

今はそれを論じるよりも、尼崎市の中に厳然として存在する工場街の風景、それが形作るテクノスケープやそこに存在する、産業遺産をふくむ構造物を評価し、価値を認めることが大切なのではないだろうか。

（４）テクノスケープ

産業遺産についての調査から始まり、その活用方策を考える過程で、産業遺産を大切な地域資源としてとらえるならば、産業遺産と規定されるものにとどまらず、産業都市尼崎に現存する「産業の風景」そのものに価値を見出すことこそ、まちづくりにおける本来の意義であろうことに気づいた。そして、その産業の風景を仮にテクノスケープと呼び、評価してみることにした。

近畿大学理工学部社会環境工学科景観工学研究室講師の岡田昌彰氏は、著書「テクノスケープ 同化と異化の景観論」の中で、次のように述べている。

『今、私たちの身の回りにある構造物、例えば工場とか、橋脚とか、煙突などには、このように綿密な計算を用いた「テクノロジー」によってできたものが多い。もちろん、美しくつくろう！と花などのレリーフを施した建築や橋などもあるが、基本的な形や大きさは計算によってできている。例えばガスタンクは典型的だ。球や円柱などさまざまな形があるが、これらの形や大きさは、中に入っているガスや液体の圧力によって決まるのである。「ガスはだいたいこれくらい入れればいいだろう」などというアナログ感覚では、効率よくしかも安全にガスを供給することなどできない。

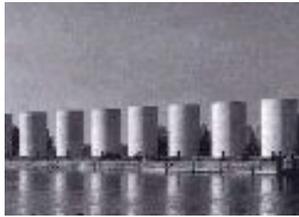
私たちが日ごろ使っているインフラストラクチャーや移動手段などさまざまな構造物をつくりだしたり、管理したりするためにはテクノロジーは欠かせないし、必然的に、その任務を担っている構造物はテクノロジーによって計算されてできた形をもっているのである。

このようなシステムによって人間が構築した構造物がつくりだす景観を、特に「テクノスケープ」と呼ぶ。』

また、2002年10月26日に開催された『第11回都市環境デザインフォーラム・関西「かたちと関係の風景デザイン」』で、杉浦榮氏は次のように発言している。

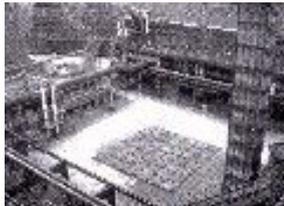
同デザインフォーラムでは、次のようなテーマで開かれたものである。「今までの価値観が失われ不安定な時代、人びとは心の拠り所となる風景を求め、風景づくりがクローズアップされてきた。都市環境デザインも21世紀を見据え、大きく変革されなければならない時である。原点に戻って、日本の都市環境を少しでも美しく魅力的にするために風景を見つめなおしてみることと同時に、実践的な方法論も織り交ぜながら議論されたものである。」

■テクノスケープの可能性



生産の場が風景に読み換えられた、現代的な例としてテクノスケープをご紹介します。

これは、オランダの防風堤です。これはただ単に風をよけるためにつくられた構造物ですが、ミニマルアートのな美しさがあって、様々な雑誌などで風景として取り上げられています。



ピーター・ラッツのデザインしたエムシャーパークの広場です。これは、もともと風景としては捉えられていなかった工場を、発想の転換によって「美しい」と捉えたものです。土木的構造物である工場の跡地を公園にするとき、全て取っ払うのではなく、敢えて残して様々なプログラムが発生する場をつくっています。



ロッテルダム ウェストエイトの広場です。これももともと大きな港にあったクレーンを、広場のライティングの要素として取り入れています。またオランダは人工地盤によって国土が形成されていますが、そのプラットホームを象徴するようなカーテンフロアによる人工床面がつけられています。

テクノスケープは、どちらかという醜悪なものとして捉えられてきた工業地の風景などが最近になって見直され、ランドスケープデザインに取り入れられるようになってきたものです。テクノスケープはブラウンフィールド（産業廃棄地）の問題と結びついていることが多いのですが、ブラウンフィールドとは、第二次産業に供されていた工場跡地が汚染されたまま遊休地として残っている、それをどうしようかという問題です。

こういった問題は、汚染などマイナス面しか語られないことが多いのですが、もともとそのような工場があったところは、ある時代に産業を引っ張っていたスター的な地位にあったわけです。地元の人の中には、プライドを持って工場の生産活動に従事していたんだけど、後になって「なんだあれは、つまらないものをつくって」といわれ、差別を受けている方もおられます。

マイナスの側面だけではなく、それが一時期地域を振興していたプラスの要因だったということ、テクノスケープによって拾い出しポジティブな未来像を描いていける可能性があるのではないかと思います。単なる保全や開発ではなく、こういった現実的な解決と現状のとらえ直しといった試みから、風土のいきている循環が保たれ、生きている風景がうまれてくる可能性があるのではないかと思います。

■産業遺産…産業造形物

＜京都大学建築計画学 吉田哲＞

操業を停止した事物を指して遺産と呼ぶなら、撤退が続くとはいえず、稼働中の工場を指してそう呼ぶのは失礼にあたり、動態保存と呼べば、保存という言葉は適当ではなく、何をおもしろがろうとしているのかが判然としない。そこでひねり出したのが産業造形物という概念である（下記参照）。レンガ組の建家や鉱山遺産などは、ある種素朴で牧歌的ですからある初期工業時代の風情を見せており、その古さも相まって、より「遺産」的であるが、イギリスの産業革命から随分時を経てからの工業化によって、高度成長期にフル稼働した、尼崎にたくさんある工場とそこで使用されている大型機械などの生産設備やクレーンやベルトコンベアなどのもっている即物的機能性を備えた造形や、絡まり合ったように見えるパイプ群が、見る者を圧倒し、おもしろがらせるのはなぜかという理由とは、その種類が異なることは明らかである。

屋根のかかる大空間として工場の建家を改めて見ると、十分な音響効果などには応えられないかもしれないが、市民オーケストラなどは開けるだろうし、天井の高い空間には、かさのはる現代美術品を置いてギャラリーとして利用することなども考えられる。しかし、産業造形物のカタチが持つおもしろさは、空きのできた建家の有効利用とは主題が異なる。活きた産業基盤としての工場の巨大な生産設備や都市を支えるインフラ機械などのもつメガスケールの風景を「テクノスケープ」と命名して、工業風景の美しさに目を向けてみようという取組もある*注。

「産業造形物」の呼び名は、この価値観を共有しているのである。

TQC運動やISOの取得などにより、生産する製品そのものの質だけでなく、生産環境の改善も生じ、語弊を承知で言えば、生産環境の「住宅化」が進んだと言える。オフィスの住宅化、病院の住宅化などあらゆる分野での環境改善は、住宅を目指して行われるのだが、工場の場合でも例外ではない。さらに、生産される製品も重厚長大な素材ものから高付加価値の製品へと移行し、いわゆる工場らしい工場—巨大空間で熱く溶ける鉄が流され、エネルギーにみなぎった生産工程を持つ—は国内には少なくなってきたように思われる。熱とエネルギー、エントロピーの固まりを連想させるような構築物群、である尼崎の工場の生産設備の稼働する生の姿の持つ力強さを「遺産」と呼ばずに讃えたいのだが、いかがでしょう？

注) テクノスケープ SD 1995年4月号

鹿島出版会

産業造形物

稼働、休業中を問わず、工場の生産工程に必要となって、建設もしくは設置された建家や設備。非意図的に現出した特異な造形や構成をもつ。ハイテク表現主義の建築のデザインモチーフになったり、SF映画で表現される「未来」都市の風景のモチーフとなったりする。

1. 建家系造形物
 - ・レンガ造建家
 - ・トラス 木造／鉄骨造
 - ・大空間
2. 生産設備系造形物
 - ・パイプ系 蒸気系、煙突系、油系、薬品系
 - ・クレーン系 船積用、ガントリークレーン
 - ・ベルトコンベア系
 - ・タンク・サイロ系
 - ・電気配線系
 - ・トロッコ系
3. 都市インフラ系造形物
 - ・鉄塔 高圧電線系
 - ・跳ね上げ橋
 - ・閘門

吉田哲氏が指摘したテクノスケープを特集したSD 同号には、千葉大学 宇野研究室が「東京湾岸インダストリアルマップ」として数次にわたって実施した湾岸サーベイ(横浜エリア、川崎エリア、東京エリア、浦安ー市川エリア、船橋ー習志野エリア、千葉ー幕張エリア)の結果が掲載されている。ここでは、撮影収集した349件にのぼる構造物をその形態によって次の6タイプに分類することを試みている。

- 1 塔状構造物
煙突、送電鉄塔など。
- 2 球状構造物
貯蔵用タンクなど。
- 3 円筒状構造物
石油備蓄のタンクやサイロなど。
- 4 箱状構造物
倉庫や工場建築。
- 5 フレーム状構造物
クレーン、パイプライン、ベルトコンベアなど。
- 6 複合した形態の構造物

こうした考え方、アプローチを基礎に財団法人尼崎地域・産業活性化機構では、2004年4月、「工都の情景」と名づけた「尼崎テクノスケープ絵葉書文庫」を発行した。

テクノスケープ、産業遺産を楽しむポストカードブック

特に国道 43 号以南の工業地帯は普段、多くの市民が足を踏み入れる場所ではなく、大半の市民にとって遠い場所となっている。反面、非日常的空間が形成されており、観光的要素が充満しているともいえる。

これまで、あまり美しいものとしてとらえられてこなかった工場風景を切り取ることによって、ダイナミックさや、ある面静謐さ、造形的面白さ、珍しさなどを感じることができる。そうした風景を単にパンフレットにするのではなく、絵葉書とすることにより、自慢できる尼崎の風景として遠くの人に送っていただく、また、観光スーベニアとして使用する可能性も考えられる。

ポストカードブック目次

1. ポストカード
 - No.1 都心に近い海：五合橋横船だまり
 - No.2 工場街へいざなうアーチ：道路をまたぐ配管
 - No.3 動くか？可動橋
 - No.4 天にいたる屋根：中島新橋から見た風景
 - No.5 長い長い壁にそって：工場の壁
 - No.6 空を切り取る鉄骨：立ち並ぶ鉄塔
 - No.7 水面に映える灯：八幡橋からの夕景
 - No.8 調和する人工物と自然：プラント
 - No.9 意思をもつ蔓草：鶴橋からの工場風景
 - No.10 運河沿いの山岳都市：クボタ武庫川工場
 - No.11 縦横無尽のエネルギー：電線
 - No.12 パイプの固まり：エースセンター
2. 撮影ポイントマップ
ポストカードで取り上げた場所の全体地図。
3. 工都の楽しみ
工場街を見る楽しさについての解説。
4. 産業遺産って？
産業遺産の基礎知識
5. 尼崎の工業化のあゆみ史
産業遺産がうまれた背景を解説。
6. 比類なき地域資産 産業遺産とテクノスケープ
7. 工場の情景
8. 絡まるパイプの見方
9. 産業造形物いろいろ
テクノスケープを構成する煙突やクレーンについて
10. こんなものも見つけた
ちょっと変わった面白いもの

11. <付録>産業遺産マップ

国道 43 号以北の地域で簡単にみることのできる産業遺産を地図と写真で紹介。

新聞記事【省略】

「工都の表情ありありと」神戸新聞 平成 16 年 5 月 13 日 掲載

新聞記事 【省略】

「尼崎・工場群を産業遺産に」読売新聞 平成16年8月14日 掲載

新聞記事 【省略】

「工都」の風景 進む再評価」神戸新聞 平成16年8月18日 掲載

(5) 今後に向けて

平成 15 年度、尼崎地域・産業活性化機構で行った「産業遺産の観光資源としての活用に関する研究」では、産業遺産を通じて地域資源の発掘の楽しみを提案するとともに、産業遺産を中心とした地域資源を発掘し、これをもって観光資源としていく可能性を広く認知させるためのツールとしてのポストカードブックを発行した。

これを基盤に平成 16 年度、環境デザイン研究会（武庫川女子大学角野研究室）に委託して尼崎南部臨海部の女子大生の目から見た調査を実施した。次代をになう若者、特に一般には工場景観といったものにあまり興味を抱かないであろうと予想される女子大生の視点で尼崎のもつ独特の景観をとらえてもらうことによって、また新たな発見やアプローチがあると期待したものである。

結果は別途、報告書（尼崎の産業空間を構成する各種造形物に関する調査報告書－尼崎臨海部工業地帯の景観－）によるが、この報告でも「今回の提案は、産業観光のためという視点よりも、市民がこの地域をより身近に感じるための要素を盛り込んだものであり、産業観光への展開はこの延長線上にあるものと考ええる。・・・なお、産業観光への道筋を切り開くには、1 社でも 2 社でも、まず協力していただける企業を開拓し、尼崎のみならず西宮や大阪市西淀川区をはじめ周辺の資源と組み合わせたルート設定からはじめることが肝要である。また可能であれば、環境共生や公害克服などのテーマを設定した上で、楽しみながら学べるプログラムの充実が望ましい。」としている。

おわりに

平成12年度から平成16年度まで、5年をかけて尼崎の新たな魅力、地域資源の発見に取り組んできた。

その間、あまがさき未来協会から尼崎地域・産業活性化機構へと組織が変わり、その取り組み方法やアプローチの仕方に若干の揺らぎが生じたのは否めない。

研究をとおして、あらゆる研究に通底する問題が生じてきた。机上の空論に終わってしまうのかという命題である。しかも、遺産という語感のみから使われなくなったものとの印象がぬぐえず、現役で稼動しているものが産業遺産として認定されていることなど、例証をあげて説明しても理解を得られず、困惑することがあった。一方で廃墟趣味なども加えて、産業遺産がひとつのトレンドとなる動きも各地で活発になってきた。

しかしながら、研究を進めるに従って、「観光」はまだ無理であろう、まずは尼崎の工場景観というものを市民自身が認識することからはじめ、市外からの来訪者があったときに備えることしかないのではないかという認識が改めて生じてきた。平成16年度に行った女子大生による調査結果においても、同様に結論づけられたのである。

産業遺産の観光への活用を検討するにあたって、まずは現場を見て回ることから始めた。すると、工場のもたらす風景には産業遺産にとどまらない魅力があることに気づかされた。しかしながら、それはそこにそのままにあることによって、万人の興味、共感を呼ぶものではないこともまた確かなことである。なんらかの演出をほどこすことにより、より深い楽しみがでてくる。芸術的な造形としてとらえるために、写真展や絵画展をする。工場だけでなく、運河や可動橋などを組み合わせた散策コースを提示する。それはとりもなおさず、まちの見方の提案であろう。

まずは、小さな見学会や説明会からでもはじめるしかない。

そのための資料は用意されたと思う。産業観光に関する考察のなかでもしばしば論じているように、誰にでもわかりやすい。従来の価値観ではなく、説明を付け加えることによってその価値と輝きをます原石にも等しいものである。この資料を基盤にしつつ取り組みを進める中で更に新たな価値を発見して行ってほしいと願う。

それを磨き育てていく過程で、これまでにないまちづくりの方法論が発見されるかもしれない。また新たな人材とのチャンネルが広がるかもしれない。事実この取り組みを通して多くの「まちづくり」に取り組むひとたちと知り合い、ご協力をえた。これもまた大きな資源であろう。